

罵つたりするのを聞くと我慢がなくなつたものです。だが父がボナバルトに対して憤怒を感ずるといふことには重大な理由があつたのです。所で、以前よりづつとポルテール主義でレヂテイミスト(註、佛國正統派即ち一八一四—一八八三年間、ブルボン家の登位を主張したる者)であつた。ムシユード・レツセーは、今度はボナバルトへ廻つて、凡ての社會的罪過、凡ての政治的宗教的罪過の本源を辿りました。さうした場合でしたから、ヴィクトル叔父のことを思ふと、殊更私の氣が沈みました。此の恐ろしい叔父は、最早彼を宥める妹が居なくなつて居つたために、到底我慢がなくなつて居りました。ダビデ(註、佛の樂曲作者一八一〇年—一八七六年)の豎琴は破れました、そしてソールは全く狂氣になつて了つたのです。チャールス十世の没落したことが、此の、ナポレオンのやうな老兵士の豪勇を一層増進することになりました、そして彼は有らん限りの大言壯語を吐きました。彼は既う、あまり私達の家へ寄りつきませんでした。私達の家は、彼にとつては餘りに靜かなものになつてゐたのです。然し時々、飯時分に、まるで墓碑のやうに花で蔽はれた彼が、突然姿を見せることがございました。大抵いつも、誓ひを立て、テーブルに就きましてね、胸のどん底から唸り聲を出して、一と口頬張る毎に、一老勇士として多くの婦人達との幸運を吹聴したものです。それから、食事が済むと自分の拭布を牧師の帽のやうに疊み、ブランデーの瓶を半分程干して、宛ら、酒も飲まずに、老

思想家や青年學生と是れ以上長く話し乍ら止まることを一寸考へたゞけで恐れを成した人のやうに、慌て、跳び出して行くのが常でしたよ。こんな風ですから、若し彼れとムシユード・レツセーとが一緒に來るようなことがあつたら、何も彼も臺無しになるだらうと、私は確信してゐました所が其の日やつて來たのです。奥さん！

『其の日大尉は、殆ど花で隠れてゐました、そして、帝國の光榮を祀つて居る紀念碑をつくりに見えましたので、私もか彼の兩の腕へむきわら菊の花束を投げてやりたくなる程でした。彼は恐ろしく上氣嫌でしたが、此の上氣嫌のために、一番最初に利益をしたのは料番女だつたのです——何しろ、烙肉をテーブルに並べて居つた時、彼に腰へ抱きつかれたのですからね。』

『食事が済むと彼は、後で珈琲の中へブランデーを割るつも、だと言ひ乍ら、自分に差出された壘を押しやりました。私は彼に、早速珈琲を欲しくは無いか何うかを、怖る／＼訊ねました。彼は非常に猜疑心が強くて、理解力が鈍いといふようなことは些ともありませんでした——まあこんな風でしたよ、私のヴィクトル叔父は。だから私の性急なことが、非常に惡い癖と叔父に見えたんです。一種特別な風に私を瞪めて。』

『我慢しろ！ 甥よ。退却を宣言するのは聯隊の子の仕事ぢや無いか！ 惡魔に取られるがい

「！ねえ、物議の振りの先生、お前は俺の靴に拍車が付いてるか何うか、大急ぎで見なくちや不可ん！」と言つた位ですから。

『大尉なんか何處かへ行つちまへばい』と私が思つてゐたのを、彼は前から感付いてゐることは明かでした。私の方では又、彼が確かに滞在するつもりで居ることを、充分承知して居りました。彼は結局滞在しました。その朝の極く少し計りの出来事が、いつまでも私の記憶に滲み込んで居ります。大體私の叔父は極く陽氣な人物でしてね、誰かの邪魔をして居ると一寸考へただけで充分彼を上氣嫌にさせて置けるのでした。彼は、規則正しい軍隊的口調で、坊さんと、喇叭と、シャンパーテン産の葡萄酒五本との或る話を、私達に聞かしてくれました。その話は軍隊社會では非常に悦ばれたものに違ひありませんが、たとひ私が其れを想ひ出すことが出来た所で敢て其れをあなたに繰返してお話する氣がございませんね。私達が客間へ這入つて行きました時、大尉が、その薪架が随分毀んで居るのを見て取つて、物織の顔に、丁度眞鍮磨きの職人の様にトリポリ石(石灰石の分解したものに磨き砂として用ふ)の効能を述べ初めたものです。そして政治上の問題は一つも言はないのです。彼は勢力を節約して居つたのですね。暖爐の枠の上の、カルセージの廢墟から八時が鳴りひびきました。それはムシユード・レッサーの時間だつたのです。暫くすると彼は、

娘を連れて客間へ入つて來ました。普通の、夜の雑談が始まりました。クレマンティンは、腰を下ろして、ラムプの傍で何かの刺繡を初めました。その影が彼女の美しい頭を陰影の中に包んで了ひ、彼女の指の上へ光りを投げて、宛ら指そのものが光を放つて居るように見えはじめました。ムシユード・レッサーは、多くの星學者の發表した彗星のことを話して、此の問題に關聯した二三の學説を述べました。尤もそれは不合理なものでしたが、少くとも或る程度の智的教養を示して居りました。私の父は天文學に就ては可成り造詣が深かつたものですから、自分自身の正確な意見を二三述べ立て、最後に「然し畢竟するに、我々は其れに就て、何を知つて居るでせうか？」といふ永遠の疑問詞で結びました。私の順番が廻つて來た時、私は天文臺の知人——偉大なアラゴの意見を引證しました。ガイクトル叔父は、彗星が葡萄酒の品質に特別な影響を有つてゐると主張して、此の意見を補ふために面白い居酒屋の話為例に引きました。私は、話が順番に廻つて行くのか非常に愉快でしたから、此の同じ規則で其れを繼續させるために全力を盡しました。そして極く最近の研究の助けを藉りまして、あの幾億萬哩の長さに廣がつてゐるにも拘らず小さい星に納めるにとの出来る星雲體の化學的組成に就て長い説明を試みました。父は、彼れ獨特の穩やかな皮肉な微笑をもつて私を見詰めてゐましたが、私の珍らしい雄辯には少し驚いてゐる

たやうでした。然し、人はいつでも天國に止まることは出来ません。私はクレマンティンの方を見乍ら、一種のダイヤモンドの「彗星」のことを話しました——これは其の前晩私が、或る寶石商の窓で感嘆措く能はなんだ物だつたのです。所がそれは、最も不幸な靈感だつたのです。

『あゝ！ 甥よ、』 ヴィクトル叔父は叫びました、「お前の言つて居るあの「彗星」はね、ヨセフイン女皇が軍隊に十字架を分配するためにストラスブルグへ来た時髪に着けてゐたものなんだから、實に詰らぬものだよ。』

『あの小さいヨセフインは、お洒落と虚飾とが非常に好きだつた、』と珈琲を啜り々々、ムシユー・ド・レッセーは言ひました、「私は其の事で彼女を咎めようとは思ひません。尤も幾分か性質に不真面目な所がありました。善い性質も随分有つてゐましたからね。彼女は處女でした。で、ボナバルトと結婚したために、ボナバルトは非常な名譽を受けて居るのです。無論、處女といふことは大したことではありません、然し乍らボナバルトと言ふことは全然何物をも意味しませんからね。』

『一體それは何ういふことです、侯爵閣下？』と、ヴィクトル大尉は追求しました。

『私は侯爵ぢやありません。』と、ムシユー・ド・レッセーは無愛想に答へて、「單に私は、ボナ

バルトが、キャプテン・クックが其の旅行記に書いてゐるあの食人種の女の一人と結婚した方が一層能く似合つたらうといふ意味を言つた迄です——裸體で、文身をして、鼻にリングをぶら下げて——人間の肉の腐つたのを悦んで啖つてゐるやうな女とね、』と斯う云ひました。

『私はそのことを豫見して居つたのです。又悲しいことには（あゝ、何と哀れむべき人間の心せう！）私の最初の考へが、恐ろしく私の豫想と合致したのです。大尉の答辯は實に立派な部類に屬してゐると私は申さねばなりません。彼は兩臂を張つて、傲然とムシユー・ド・レッセーを頭の尖から足の先きまで見詰めて、かう申しました、

『執事閣下、ナポレオンはヨセフインの外に今一人の妻を有つてゐました、マリー・ルイザの外に今一人の妻があつたのです。その配偶のことは貴下は少しも御存じ無いのです、けれども私は彼女を、直ぐ自分の傍で見ました。彼女は、星を鏤めた瑠璃色の外套を着て、月桂樹の冠を頂き、胸には名譽十字章を燦爛と輝かして居りました。彼女の名は「榮譽」と言ふのです！』

『ムシユー・ド・レッセーは、帽子を暖爐の枠の上に置いて、靜かに口を切りました。

『あなたのボナバルトは悪黨です！』

『その時私の父は悠々と起ち上つて、手を差出し乍ら、非常に穏やかに、ムシユー・ド・レッセ

—に言ひました。

『其の人はセント・ヘレナで死んだ人だつたにしても、私は其の人の政府で、十年間働きました。又私の義弟は彼の驚（註、佛蘭西軍旗の模様）が驚なるより斯く言ふ（註、驚なるより斯く言ふ）の下で三度まで負傷したことがございます。ねえ何卒其後の斯うした事實を忘れないで下さい。』

『大尉の上品な諷刺的な傲慢が成すことの出来なかつたことを、私の父の町重な抗辯が、直ぐ其の後で成し遂げまして、ムシユー・ド・レッサーを赫と怒らせて了つたのです。』

『そんなことは忘れて了ひました、』彼は斯う叫びましたが、齒を喰ひしばつて、怒りのために顔を眞奮にし、口には泡を吹いて居りました、「鯉の樽はいつも鯉の臭がしますからね、悪黨の下で勤めてゐた者は——」

『斯う言つたかと思ふと、大尉は矢庭に其の喉元へ跳びかゝつたのです。彼の娘と私とが居なかつたら、恐らく彼れは、其場で大尉に絞め殺されてゐたこととせう。』

『私の父は、平生よりは少し顔を蒼くしてゐました、そして腕組をして其場に立ち乍ら、言ふに言はれぬ憐愍の表情を以て此の光景を見つめて居りました。その次には一層悲しいことが出来たのでしたが——もう此の二人の老人の馬鹿騒ぎに就て諄々言ふのを止すことにしませう。最後

に私は、やつとのことで二人を引離すことが出来ました。するとムシユー・ド・レッサーは娘に一寸眼くばせして部屋を出て了ひました。そのあとへ娘が隨いて行つた時、私は彼女を追かけるように階段の所へ飛出しました。

『「お嬢さん、」私は荒々しく斯う言つて其の手を取りました、「私はあなたを愛してゐます！あなたを戀してゐます！」』

『暫くの間彼女は、私の手を堅く握りしめてゐました。と、彼女の唇が開きました。果してどんなことを私に言はうとして居つたのでせう？ 所が、階段を昇つて行く父の方へ眼を向けたと思ふと、突然彼女は手を振り放して、私に「左様なら」の身振りをしたのです。』

『私は其後、二度と彼女に會ひませんでした。彼女の父はバンテオンの近傍へ引越して、歴史地圖を賣るために借りた部屋に住んで居つたのです。それから二三ヶ月して、その父が卒中で亡くなつたのですが、娘の方は、カエンへ行つて或る年寄りの親戚と住んでゐるといふ話でした。其後彼女が或る銀行の書記——あの、非常に金持になつて、死んだ時は非常に貧乏だつたといふノーエル・アレキサンダー——と結婚したのも其處でだつたのです。』

『所で、私ですがね、奥さん。私は只獨りで極く平和に暮して居りました。大きな悲しみにも

大きな悦びにも兩つ乍ら見放された私の存在は可成り幸福なものだつたのです。然し、随分幾年もの間私は、冬の夜の自分の椅子の傍に一脚の空の椅子を見ては、突然自分の胸に痛々しい沈みを感じずには居れなかつたものです。私が、彼女を知つて居られたあなたから、彼女の晩年のことや死んだことを聞いたのは去年のことです。私はお宅で彼女の娘を見ました。私は彼女に會つたことがございます、然し私はまだ、バイブルの中の老人のやうに「おゝ主よ、今し汝の僕卑を平和の中に赴かしめ給へ！」と言へないのです。何故かと申しますのに、若し私のやうな老耄れが、誰かに對して何かの役に立つことが出来るのでしたら、あなたのお力を藉りて、自分の最後の精力と能力とを、凡て此の孤兒の保育に捧げたく思つて居るのですから。』

私が此の最終の數語を言つたのは、ガブリー夫人の邸宅の玄關へ來た時だつた。そして今しも此の深切な案内者と別れようとしてゐた時、彼女が私に斯う言つた。

『親愛なムシユ、私は此の事でああなたのお力になることが出来ませんの。さうして上げたいのは山々ですけれどね。ジャーンは孤兒で未成年者です。貴方は、あの娘の後見人の許しを得なければ何うすることも出来ないのですもの。』

『嗚呼！』と私は叫んだ。『ジャーンに後見人があつたといふことは、此の世で夢にも知りませ

んでした！』

ガブリー夫人は驚きを現はして私の顔を見た。こんなに單純な老人があらうとは豫期しなかつたに違ひなかつた。

彼女は再た初めた、

『ジャーン・アレキサンダーの後見人といふのはね、ラベロア・ペーレの公證人でメイトル・モシーエといふ人ですの。貴方が其の人と旨く折れ合ひをつけることが、六ヶ敷からうと思ひますわ、其の人は大變堅い人なんですもの。』

『あゝ！ 神よ！』と私は叫ばずには居られなかつた。『一體、この年齢をして、堅い人以外にどんな種類の人と私が折合ひをつけることが出来るかと仰有るんでせう。』

彼女は、丁度私の父がいつもするやうな、優しい意地悪るさを以て微笑した、そして次の如く答へた。

『貴方に似た人達とですわ——袖の上に精神を着けてゐる無邪氣な人達とですわ。モシーエさんは決してさう云つた風の人ぢやないのです。狡猾で手癖が良くないのですもの。けれど若し貴方がお望みでしたらね、私と一緒にあの人に會ひに参りませう、わたしあの人非常に嫌ひです

けれど。そしてジャーンを訪ねる許しを受けることに致しませう。あの人はジャーンを、レ・ターンの寄宿學校へ出してありましてね。其處であの娘が非常に不仕合な目をして居るのです。』私達は早速日を打合はした。私はガブリー夫人の手に接吻した、そして二人はお互に左様ならを言つた。

(五月二日—五月五日)

私は彼の事務室で、ジャーンの後見なるメイトル・モーシエと會見した。小柄で、瘦せぎすで冷淡であつた。その顔色は、宛らも彼の鳩部屋の穴の塵で拵へたものゝやうに見えた。彼は眼鏡を掛けた動物である。何故なら眼鏡を掛けない彼を想像することは不可能な筈だからである。私は彼の——此のメイトル・モーシエの、物言ふのを聞いたが、その聲は宛ら武力のキャラ／＼鳴る音のやうであつた。彼は又精選した熟語を使用する。だが、彼が若しも彼の熟語をあれはどまで入念に選擇しなかつたならば、私は尙一層愉快を覺えたであらうと思ふ。私は彼を注視した、——此のメイトル・モーシエを。彼は非常に儀式ばつて居る、そして羞かしさうに二人の來訪者を眼の隅つこから見つめる。

メイトル・モーシエは全く悦んで居る、さう彼は私達に言ふ。私達が彼の後見してゐる娘に興味を抱いたことを知つて、彼は悦んで居るのである。だが、私達が只自分を悦ばすために此の世に置かれたとは、彼は考へてゐるまい。否、彼はそれを信じないのだ。で私は、彼の仲間の誰でもが、彼といふ人物は悦びを感じしめる能力の殆ど無い人間であるといふ同一結論に到達するだらうと、認めるだけの自由を有つて居る。彼は自分の保護者に餘り多くの悦びを與へることは、人生に就ての悪い有害な觀念を與へるであらうといふことを心配して居る、彼がガブリー夫人に向つて、非常に永い休暇の時以外に、此の少女を家に招待して下さらぬ様にと要求するのも、此の理由によるのである。私達は、所定の形式に於て(メイトル・モーシエの事務所から出るものは凡て所定の形式に於てある)毎月の木曜日に、オークス・ターンのデモール街にある、マドマゼル・プレフェールの私立學校へ、ジャーン・アレキサンダー嬢を訪ねて行く許可を得て、其の埃だらけの公證人と埃だらけの事務室とを後とにした。

五月の第一木曜日に、私はマドマゼル・プレフェールを訪門するために家を出た。その建築は、青い文字で書いた大きな看板によつて、遠方から識別することが出来た。此の青色は、私かマド

マゼル・ブレフェールの性格から得た最初の徴候であつたが、其後に至つては私は一層多く其れを見る事が出来た。怖々した様子の召使が私の名刺を取つた、そして、学校の食堂に特有の饅⁺えた臭ひの漲つて居る寒い應接室の扉口へ、希望の一言も無しに私を置去りにした。此の應接室の床は、實に無精な力を以つて蠟を塗りたくつてあつたので、私は苦しさの餘り暫く闕の上に立つて居つた。然し、馬の毛の椅子の前には皆、小さい毛氈の切片が床に散らかつて居るのを見て、やつと私は、一つの毛氈の島から次の島へと用心深く渡り乍ら、暖爐の枠の一隅に達することが出来た。そして其處で私は、呼吸も切れ／＼に腰を下ろした。

暖爐の上の大きな、鍍金した枠の中には *Fahleu d'Honneur* (註、優等) と前書して、下に長々と人名を書並べた紙が入つてゐたが、その中には悲しい哉ジャーン・アンキサンダーの名が見えなかつた。マドマゼル・ブレフェールの眼識によつて此の如く表彰されて居る女生徒達の名前を五六遍も通讀したあとで、私は、誰も来さうな足音も無いのを不安に感じ初めた。若しも雀共が群れをなして集まるために其の中庭を撰び、そして有らん限りの聲々で嘲ることさへ無かつたら、恐らくマドマゼル・ブレフェールはその小學教師の領域を通じて、此の太陽系外の空間の絶對的静寂を確立することに成功したに違ひなかつた。實際其等の轉るのを聞くのが愉快だつた。

然し擦硝子を通してあるために、其れを見る方法が無かつた。私は只、四方の壁に、此の學校の生徒の製作にかゝる圖畫が、床から天井までギッシリと飾り立てられてある此の應接間を見廻して自ら慰めるより外は無かつた。そこには、聖處女もあれば、花もあり、草薺もきの小屋もあれば、圓柱のある首府もあり、又、サビン國王タチユースの大きな頭もあつて、これには *Estelle Monton* と自署があつた。

私は、此の古代の戰士の蓬々たる眉と擗猛な眼光とを描出したモートン嬢の根氣を讚嘆するごとに、既に可成りの時間を費してゐた。と、此の時、風にサラ／＼と鳴る枯葉のやうに微かな物音が、私をして首を扭ぢ向けさせたのである。それは枯葉では全然無かつた——マドマゼル・ブレフェールだつたのだ。兩手を前で組み合はせて、さながら「聖徒傳集」の中の聖者等が水晶のやうな水の表面を滑ることに慣れて居つたやうに、彼女はその不思議な床の鏡のやうに磨き立てた上を、滑るやうに這入つて來た。然し乍ら、若し何か他の場合であつたならば、恐らくマドマゼル・ブレフェールは私に、あの神秘的な空想に必要な處女達のことを、少しも考へさせなかつたであらうと私は信じる。彼女の顔は、何處かの經濟的な家事管理婦が一と冬の間屋根根部屋へ貯へて置いた朽葉色の林檎を、妙に私に聯想せしめた。彼女の肩は、縁飾りのある肩掛で蔽はれてゐ

た。それは肩掛そのものとしては別に珍らしい所が少しも無いのであるが、彼女の掛けて居る其れは、何だか祭司の法衣か、又は何か市民の高職の表章かのやうであつた。私は訪問の目的を彼女に話して、私の紹介状を渡した。

『まあ！——ではモージェさんにお會ひなすつたのですね！』彼女は叫んだ、『お達者でゐらつしやいますか？ あの方はどの人よりも一番實直な方ですわ、一番——』

彼女は言葉を完了させずに、天井の方へ眼を上げた。私も、彼女の見上げた方向へ自分の眼を上げた、そして、杖形のラムプ吊りの所から小さな螺旋形の紙紐がぶら下がつて居るのを見た。其れは無論、私の察することの出来た範圍では、鍍金した鏡や「優等生一覽表」から蠅を驅逐するために設けられたものであつた。

『實は私はマドマゼル・ジャーン・アレキサンダーに會つたことがございます、』と私は言つた、『ガブリー夫人のお屋敷で。ですから其の娘さんの立派な性格と、聰明さとを賞める資格があるのです。以前その娘さんの両親と非常に能く知り合つて居りましたから、私が其の両親に對して感じてゐた友情が、自然と私を其の娘さんに興味を有たせましてね。』

マドマゼル・ブレフェールは、返事をする代りに大きな溜息をついて、妙な肩掛を胸に押付け

た。そして又螺旋形の紙を見上げた。

遂に彼女は口を切つた、

『貴方が以前アレキサンダーさんやアレキサンダーの奥さんとお友達だつたのですから、何卒モージェさんや私のやうに、あの氣狂いじみた投機事業を悲しんで下さいまし、又さう信じます。あのことがあの御夫婦を破滅に導き、娘さんを一文無しの貧乏にさせたのですもの！』

私は斯うした言葉を聞いて、不幸であることが如何に悪いかといふこと、又さうした了見違ひが、豫め羨望に値する地位にある人々にとつて、如何に許し難いものであるかといふことを、胸の内で考へずには居られなかつた。彼等の没落が早速私達に復讐し、且つ私達に媚びる、而も我々は全然冷酷なのだ。

私は、銀行の成行きに就ては何一つ知つてゐなかつたといふことを、非常に正直に答へてから此の女校長に向つて、彼女がアレキサンダー嬢を満足に思つてゐるか否かを訊ねた。

『あの子は逆も強情ですよ！』マドマゼル・ブレフェール嬢は叫んだ。

そして、それ程訓練し難い生徒のために、自分が如何に困難な立場に置かれてゐるかといふことを表象しようとして、貴とい忍従の姿勢を見せかけた。暫くしてから、一層落ち着いた態度を

以て附加へた、

「娘さんは決して頭が鈍くはございません。けれど、系統的に物を覚えることが何うしても出来ないでございます。」

一體マドマゼル・ブレフェールは、何といふ妙な老嬢だらう！ 歩るく時は足を上げないし、物言ふ時に唇を動さないとは！ だが然し、彼女の特徴を正當な時間以上には考へないで、私は、成程其等の主義が極めて立派なものであり、又その價値に就ての彼女の意見を信ずることも出来るが、畢竟するに、人は何かを學んだ場合に、それを學ぶ事から生じた法式といふものは、殆ど差別が無いといふことを、彼女に答へた。

マドマゼルは不同意の遅い身振りをした。溜息をついて斯う彼女は叫んだ。

『あゝ、貴方！ 教育の方法を理解なさらない方々は、斯うしたことに非常に間違つた考へをお有ちになる傾向がございます。その方々は、世界中で一番良い思想を以て御自分の考へを發表なさるのに違ひございません。けれど、さうした問題は皆、充分能力のある人達に残す方が、すつとくお宜しい筈です。』

私は其れ以上議論をしようと思はなかつた。で只、今直ぐアレキサンダー嬢に會へるか何うか

を彼女に訊ねた。

彼女は自分の答へねばならないことを其の總飾りの縫れの中で——魔法の書の中でのやうに——讀まうとするかの如く、自分の肩掛を見詰めた。やがて口を開いて言つた。

『マドマゼル・アレキサンダーは、まだ懺悔も行らねばなりません。出さねばならない練習問題もござります。でも、目的も無しに折角此處へゐらしたことになるは大變お氣の毒ですから、こちらへ呼ぶことに致しませう。たゞ、最初に御面倒でも此の來賓名簿へお名前を載せて頂きたいのでございます——規則でございますから。』

彼女はテーブルの所へ腰を下ろして大きな謄寫簿を開けた、そして、肩掛の下へ入れて居つたメイトル・モーシエの手紙を再た取出して、其れを見乍ら書き初めた。

『「Bonnard」——Dが一つ、さうでございますね？』と彼女は訊ねた。『大變詳しくお聞きして濟みません。でもね、個人の名前は夫れく、正文法を有つてゐると云ふのが私の意見でございます。此の學校でも個人名の書取の練習がございましてね、貴方、——勿論、歴史上の個人名でござりますけれど！』

私が走り書きで自分の名を書き終ると、彼女は其の次へ私の職業、稱號、自分——詰り、『退職

商人』とか、『屬吏』とか、『獨立のゼントルマン』とか、或は何か其の何か其の外のことを書き付けては不可ないか何うかを訊ねた。彼女の名簿の中には、特にさうしたものを書入れる欄が出来てゐた。

『それはく！奥さん』私は言つた、『是非共あなたの其の欄を、埋める必要がございませぬら、どうか「學士會々員」とお書入れを願ひます。』

私の眼の前に見えたものは、矢張りマドマゼル・ブレフェールの襟巻であつた。けれども今それを掛けて居るのは、マドマゼル・ブレフェールでは無くて、全然別な、極く慇懃で町重で、愛らしい、莞爾した、幸福な人であつた。眼は微笑を湛へてゐた。顔の小さい皺（夥しい数の皺が其處にあつた）も亦微笑した。彼女の口も同じやうに微笑を浮べた、けれども只一方でだけだつた。彼女は物を言つた、と、其の聲も亦彼女の態度と俱に變つた。蜜のやうに甘い聲であつた。

『先生、あなたはあの可愛い、ジャーンが大變惻口だと仰有いましたでせう。私も其れと同じことに氣がついて居りますのよ。あなたの御意見と一致することが出来て、ほんとに鼻が高くなるやうに思ひますわ。あの娘は、ほんとに澤山な興味を私に感じさせたのですもの。幸福に生まれついたと言ふのはあの娘のことですわ。……でも、あなたの貴重な時間をこんな風に費して

濟みませんわね。』

彼女は女中を喚んだ。女中は、前の時よりは遙かに敏活で嚴肅に見えた。そして、學士會員のシルヴェストル・ボナール先生が面會にゐらして應接間でお待ちになつて居るといふことをアレキサンダー嬢に、行つて傳へるやうに吩咐かつて、姿を消して了つた。

マドマゼル・ブレフェールは、學士會の決議と名の付くものには——たとひ其れが如何なるものであらうと——凡て最も大きな尊敬を拂つて居るといふことを、私に對して告白する時間が辛うじてあつた。その時ジャーンは、呼吸を切らし乍ら、嚙栗のやうに眞赤になつて、駆け込んで來た。眼を非常に大きく開き、腕は元氣無く兩側へ垂れてゐたが——天真爛漫な無作法が非常に愛くるしかつた。

『何てだらし無い風でせう、此の子は！』マドマゼル・ブレフェールは娘の襟を直ほしてやり乍ら、母らしい愛を以て呟いた。

ジャーンは慥かに變な様子をしてゐた。頭髮は後のへ梳いて、不完全に網で支へ、其處からは解けた捲髪がダラリと垂れてゐた。しなやかな腕は、ピカ／＼光る毛織物の袖の中に、腋の所まで被はれ、兩の手は、彼女は其れで何を爲るのか知らないらしく見えたが、一面の凍瘡で眞赤に

なつてゐた。彼女の着物は非常に短か過ぎるために、彼女の足には随分大き過ぎる靴下を穿いて居ることや、靴が踵の所で破けてゐることなどが見えた。又腰の周りには帯の代りに跳び繩を巻きつけてゐた、——斯うしたことが凡て相結び付いて、到底人前へ出せないやうな外觀をジャン嬢に與へてゐた。

『まあ、氣狂ひの子—』

かうマドマゼル・ブレフェールは呟いた。彼女は今は早や母親らしい所が無くなつて、寧ろ姉のやうに見えるのであつた。

やがて彼女は、ピカ／＼する床の上を影のやうに滑つて、部屋を出て行つた。私はジャンに話掛けた。

『お坐り、ジャン、そしてお友達に話すつもりで私に話してお呉れ。去年と比べて、今此處ですつと満足してゐるんぢやないの？』

彼女は躊躇したが、やがて人の好い諦めの微笑を浮べて答へた、

『いえ、すつと悪るいのよ。』

私は、彼女の學校生活のことを話して呉れるように彼女に求めた。彼女は早速、自分の各種の

研究を凡て微細に説明し初めた——ピアノ、文體、代々のフランス王の年代記、裁縫、圖畫、教義問答、禮儀作法と云つたやうなものを。……私は到底それを一々記憶することは出来なかつた。依然として彼女は、跳繩の兩端を全然無意識に握りしめ乍ら、説明中は其れを上げた下けたりしてゐた。暫くすると、突然彼女は自身のしつゝあることを意識して、颯と顔を赤らめ、口を吃らせ、そして非常に狼狽した。そのために私は、ブレフェールの學校で實施してゐる研究の綱領を知らうとする望みを放棄しなければならなかつた。

色々のことをジャンに訊ね、而も只極めて漠然たる答へを得た後で、私は彼女の若々しい心が全部あの跳繩に奪はれてゐることを知つた。そこで私は勇敢に此の重大な問題の中に入つて行つた。

『おや／＼、あなたは繩跳びしてゐたんですね？』と私は言つた、『それは極く面白い遊び事に違ひないが、それを行ふには随分身體を使ひ過ぎやしないだらうかね。何しろさう云つた種類の過激な運動は甚く健康を害することがあるからな、私の非常に心配するのは其の事ですよ。ねえジャン——ほんとに、非常に心配して居るんです！』

『貴下は何て御深切な方でせう、先生、』と娘は言つた、『態々會ひに来て下さつて、こんな風に

私にお話しなさるんですもの。私ね、此部屋へ這入つて來ました時餘んまり吃驚したものですから、お禮申上げるのをすつかり忘れちゃいましたのよ。あなたはガブリーの奥様にお會ひになりましたか？ あの方のことを何かお話しして頂戴、先生。』

『ガブリーの奥さんは、』と私は答へた、『大變お達者です。別にあの方のことで話すようなことは無いがね、一度誰かあの方のことを心配さうに訊いた時、庭造りのお爺さんが、あのお城の奥さん——あの奥さんのことを斯う言つたことがありましたつけ、「奥様は道を塞いでゐらつしや」とね。然うだ、ガブリーの奥さんは道を塞いでゐらつしやるよ。ねえジャー、お前さんは、其れがどんなに良い道か知つてゐるだらう、又あの方がどんなにしつかりと其の道をお歩るきなさるか。何時かもね、俺は奥さんと二人で、家から随分遠い所まで出掛けけて行つたことがあつたが、私達はお前さんのことを話し合つたよ。お前さんのお母さんの墓場で、お前さんのことを話し合つたのだよ。』

『まあ私嬉しい、』とジャーは言つた。暫くすると、突然彼女は泣き出した。

私は此の寛大な涙に對して非常に敬虔な氣持を感じたので、其れを挑發した情緒を何等かの方

法で阻止しようと試みることは出来なかつた。けれども、暫くすると娘は眼を拭いた、で私ば訊ねた、

『ねえジャー、ほんとに今先きお前は、其の跳繩のことを大變考へてゐたようだが、あれは一体何うした譯なの？』

『實は、お話しいたしますと斯うですの、先生、只ね、私跳繩を持つて應接間へ這入る資格が無かつたからですの、御存じの通り、勿論私、繩跳びして遊ぶ年齢を過ぎて居りますの。けれど、も女中さんが、老寄りの紳士の方がゐらつしやるからと……あら……斯うなのよ……紳士の方が應接間でお待ちになつてゐらつしやるからと、私に言ひに來ました時、私小さい生徒達を跳ばさして居りましたのよ。それで私、失くさないようにと、慌て、其の繩を腰に巻きつけたの。不可なかつたわねえ。だつて私、是れまでにさう度々面會人があるわけが無かつたのですもの。プレフェール先生はね、若し私達が何か規則に違つた行狀をすると滅多にお許しにならないのよ、ですから吃度私を罰しなさるわ。私ほんとにそれが悲しいの。』……

『それは餘んまり非道い、ジャー！』

彼女は非常に打沈んで來た、そして言つた、

『え、先生、ほんとに不可ないと思ひますわ。だつて私罰を受けたら、小さい生徒達の上に権利が些とも無くなるのですもの。』

私は此の不快の性質を、早速全部了解することは出来なかつた。しかしジャーンは私に説明した——それによると、彼女は一番年下の級を監督したり、子供達を風呂に入れたり着物を着せたり、行儀や裁縫やアルファベットの發音を教へたり、遊びの方法を示したり、最後に、日が暮れると彼等を寝かしつけけると云つたやうな職務を、マドマゼル・ブレフェールから命ぜられて居つたために、教室で寝帽子を被つたり、立つたままでひづくり返つた皿から食事をしたりすることが出来なかつたと云ふのであつた。

私は、「魅惑的な襟卷の婦人」の考案した是等の刑罰を、心密かに讚嘆し乍ら答へた、

『して見ると、若し公平にお前を解釋するなら、お前さんは此處の生徒であると同時に女主人なんだね、ジャーン？ 其れは世間にはザラにあることだよ。お前さんは罰せられる、其の代りお前も罰するんだらう？』

『まあ、先生！』彼女は叫んだ、『違ひますわ！ 私決して罰しなんかはしませんわ！』

『では、お前さんが我儘なために、随分マドマゼル・ブレフェールからお叱りを受けるらしいね？』

彼女は莞爾して、眼をばちく／＼させた。

次に私は彼女に對して、我々が良心に従つて行動したり、出来るだけの美行を爲さうとしたりするために往々にして色々の面倒を惹き起すことがあるが、さうした面倒は決して、全然我々を落膽失望せしめる種類のものでは無く、寧ろその反對に、恰好の試練であるといふことを話した然し此種の哲學は、殆ど彼女を感動させなかつた。彼女は私の道德的訓誡には少しも動かされないうやうな風でさへあつた。だが是れは、彼女の側から見ると全然自然なことでは無かつたか？——又私は、其れが只、最早道學者のシステムの中に興味を見出すことの出来ない無邪氣な子供であるといふことを思ひ出すべき筈では無かつたらうか？……少くとも私は、自分の説諭を切上げに足るだけの過當な感覺を有つて居つた。

『ジャーン、』と私は呼びかけた、『お前、今先つきカブリーの奥さんのことを訊いて居つたね。

さあ、お前のあの「小仙女」のことを話さう。あれは非常に綺麗に出来てゐたね。今でも何か、蠟で模型を拵へてゐるのかい？』

『蠟なんか些とも無いんですもの。』彼女は手を絞り乍ら言った、『爪の垢ほども無いんですもの！』

『忙しい蜜蜂の共和國に蠟が些とも無いなんて！』私は叫んだ。彼女は笑ひ出した。

『あのう、それからね、先生 貴方の仰有るやうな私の *Portrait* (小肖像) はブレフェール先生のプログラムに無いのですわ。でも私、ガブリーの奥さんに上げようと思つて大變小さい聖ジオルヂを拵へかけたの——黄金の胸甲のある、それはく、小ほけな聖ジオルヂなのよ。何うでせうボナール先生、聖ジオルヂに金の胸甲を着けるのは變でせうかしら？』

『些とも變ぢや無いよ、ジャー、だが一体それを何うしたの？』

『今お話しますわ。私ね其れを自分のポケットに入れて居りましたの、だつて外に置く所が無いのですもの。そして——そして、私誤つて其の上へ座つちやつたのよ。』

彼女は斯う言ひ乍ら一つの小像をポケットから取出した。それは人間の形らしい所が少しも無いまでに壓潰されて、挫いだ手足は辛うじて其の針金の骨組によつて胴に附いてゐるに過ぎなかつた。こんなに毀れた自分の主人公を見て、彼女は一時に、憐愍と愉快の感に襲はれた。後者の

感情は勝利を占めた、そして彼女はカラ／＼と笑ひ出した。所が、笑ひ出したと思ふと直ぐ止まつて了つた。

マドマゼル・ブレフェールは、微笑し乍ら、應接間の入口に立つてゐた。

『まあ、いゝ子ですこと！』と、最も優しい聲で、女校長が言つた、『私、此の子があなたをお困らせしやしないかと心配しましてね。それに又、あなたの時間が大變貴といのですもの！』

私はマドマゼル・ブレフェールに、さうした妄想は棄て、ほしいと頼んだ、そしてお暇をするために席から立つて、ポケットの中から、自分の持て來たチョコレート菓子と砂糖菓子とを取り出した。

『まあ、美味しいものを！』ジャーは言つた、『ほんとに學校中を歩るき廻る丈け充分あるでせうね。』

襟卷きの婦人は口を挿んだ。

『アレキサンダーさん』と彼女は言つて、『さあ、こんな結構なことをして頂いて、先生にお禮仰有い。』

ジャーは怨めしさうな風に稍暫し彼女を見詰めた、それから私の方に向き直ほつて、恐ろし

く決然として言つた。

『先生、御深切に會ひに来て下さいまして、難有う存じます。』

『ジャーソン、』と、私は彼女の両手を握りしめ乍ら言つた。『いつまでも、善良な、正直な、勇敢な少女でお出で、左様なら。』

彼女はチョコレートと砂糖菓子の入つた包みを持つて部屋から出て行つたが、どうした機會か跳繩の把手を椅子の背に打突けた。怒りに充ちてゐたマドマゼル・ブレフェールは、襟卷の下から両手を胸に押し付けた。で私は、彼女が教育者としての幻影を打棄てる所を今にも見せられさうな氣がした。

私達が只の二人きりになつた時、彼女は漸つと落着きを取返した。で私は、其のために決して自惚れるわけでは無いが、彼女は顔の全半面を以て微笑を送つたといふことを告白しなければならぬ。

『マドマゼル、』私は、彼女の上氣嫌なのに乗じて、言つた。『私は、ジャーソン・アレキサンダーが少し顔色が悪るいように思ひましたが、最も、あの位の年頃の娘さんが、どれ程の思ひ遣りと注意とを要するかといふことは、私よりもあなたの方が、ずつと能く御存じの筈です。あの娘を

是れより以上に熱心にあなたの御監督にお任せするといふことは、自然あなたに對して害を爲すといふ結果になるだけだと思ひます。』

是等の言葉は彼女を狂喜せしめたように見えた。彼女は、宛ら恍惚状態にあるやうに、天井の螺旋形の紙の方へ眼を上げた、そして両手を握りしめ乍ら斯う叫ぶのであつた。

『秀れた方々といふものは、最も瑣細なことを考へる術を、ほんとに能く御存じですのねえ!』
私は、少女の健康なるものが決して瑣細なことで無いと言ふ事實に就て彼女の注意を喚起し、それから別れのお辭儀をした。が彼女は闕の所で私を呼び止めて、非常に秘密さうに私に言つた、
『御免下さいね、先生、わたし女ですもの、名譽を愛しますわ。包み隠しせずに申上げますがわたしね、此の見すほらしい學校で學士會の會員の方にお目にかゝつたことを、非常な光榮に存じて居りますの。』

私はマドマゼル・ブレフェールの弱點を正當に赦した。そして、主我主義の盲目を以て、専らジャーソンのことを考へ乍ら、道々斯う自分に訊ねつゞけた、

『一體自分達は、此の子を何うしようと云ふのだらう?』

(六月三日)

其の日私は、ゲーテの言葉を藉りて言へば、所謂死ぬことに同意した所の、非常に年寄つた私の同僚を、マーネスの墓地へ護送したのだつた。その生活力が何か異常なものであつた所の偉大なるゲーテは、人間といふものが眞に死を欲するに至らない以上は決して死ぬるもので無いといふことを、現實に信じてゐた——即ち、解體を阻止する所の凡ゆる精神力と、生命そのものを構成してゐるものゝ全體とが凡て死滅しない以上は、決して死ぬるもので無いといふのである。換言すれば、人間は只、各自に於て最早生きることが出来なくなつた時初めて死ぬるのだと、彼は信じてゐたのだ。嗚呼！其れは只、お互個人々々の理解の問題に過ぎない。そして、充分に理解した曉に於てのみゲーテの此の素敵な思想が、靜かに我々を *La Polleze* の歌の所へ連れ歸るのである。

偕而私の秀れた同僚が死ぬることに同意したのだつた——あゝ、極端に猛烈な卒中症の攻撃が數回も連続したことを感謝する——其の最期は明かに之れを立證して思ふ。彼の存命中は、私は殆ど彼とは昵近ちひつよにならなかつた。けれども、彼の死んだ瞬間に私か彼の友達になつたやうに思は

れるのである。何故ならば我が同僚達は、最も嚴肅な態度と深い同情の面持とを有つて、私に柩の附添人の一人としての役割をつとめるやうに、又墓場で弔文を讀んで呉れるやうにと、私に確かめたからである。

私は出来るだけ旨く書いた短い弔詞——餘り其のことには言及してゐない——を、非常に拙く讀み終つてから、ヴァイル・ド・アヴレーの森へ散歩に出掛けた。そして、大尉の杖には餘り凭りかゝらないで、日蔭の小道を傳ふて行つた。繁つた葉を透して漏れた日光は、其處此處に小さな黄金の圓板を作つてゐた。未だ曾て嗅いだことの無い、草や若葉の匂ひ、——嘗て見たことの無い、樹の上の空の美しさ、壯嚴な植物の形態の穩やかな威力、是等のものは私の五感と凡ゆる私の存在とを、深く感動せしめた。そして、最も微かな鈴の音にさへ破られる此の靜寂の中に私の感じたものは、五感の悦びであると同時に魂の悦びであつた。

私は、路傍の若々しい櫛の木立の下蔭の中へ腰を掛けた。さうして其處で私は、再び櫛の木の下に腰を下すことの出来ない内は、決して死なないこと、少くとも死ぬることに同意しないことを、自分に誓つた。其處で私は——廣々とした田舎の偉大な平和の中で——魂の本質と人間の終局の運命とを默想することが出来たのだつた。一疋の蜜蜂は、蒼色の身體を宛ら古い黄金のや

うに日光に輝かせ乍ら、私の直ぐ傍の錦葵の花の上へ飛んで来た——花は濃厚な黒い色をして、密生した葉莖の上に満開してゐた。私がさうした有り觸れた出来事を目撃したのは、決して是れが初めては無かつた。けれども是れほど理解のある親しい好奇心を以て其れを見たのは初めてであつた。私は、昆虫と花との間には凡ゆる種類の同情のあるといふこと——曾て想像だも付かなかつた所の、何千といふ小さな不思議な関係のあるといふことを、認識することが出来たのであつた。

蜜に飽いて昆虫は起ち上がった、そしてブーンと唸聲を立て、眞一文字に飛んで行つた。私は出来るだけ早く起ち上がった、そして立つたまゝ居すまいを直ほした。

『左様なら！』私は花と蜜蜂とに向つて言つた、『左様なら！ 天の思召しで私は、お前達の調和の秘密を見抜くまで永生きするかも知れない。私は非常に疲れた。だが人間は、他人と結付くといふ一種の勞作からのみ休息を見出すことの出来るように作られて居る。色々の花や昆虫は、神の意思に於て、私が永い間言語學と古文學との中を探し廻つた後で、其の休息を私に與へるだらう。あの古いアンテユースの神話が實に溢るゝ計りの意義を有つて居るでは無いか！ 私は大地に觸れた、そして新人である。齡七十になつた今、私の胸の中に不思議な新らしい感情が生れ

る。宛ら榭の古木の空虚の幹から、時々若々しい枝が伸び出るやうに！』

(六月四日)

無限の柔かみを帯びた色彩を凡てのものに與へる薄鼠色の朝な夕な、窓からセーヌ河や其の土堤を眺めるのを、私は好む。私は嘗て、あのネーブルス灣の上に輝かしい静けさを投げる淡青色の空を見たことがある。けれども我々の巴里の空は、更に生氣があり、更に爽快であり、更に靈感的である。其れは人間の凝視のやうに、微笑し、威嚇し、接吻し——又憂愁の面持と歡喜の顔貌とを現はして居る。今しも彼等が一日の仕事を成した時、それは人間と獸との上にいみじくも靜謐な光りを注いで居る。彼處の向う岸では、セント・ニコラスの港の荷揚人足等が、牛の角の船荷を卸ろして居る。と見ると、通路に立つてゐる二人の男は、手から手へ棒砂糖を抛り渡し乍ら、其處から汽船の中の誰かに渡して居る。北側の土堤を見ると、其處には幾匹かの馬車馬が風の樹蔭に一列に立ち並んで、各々その鼻袋へ頭を突込み乍ら、燕麥をもぐぐくと喰つて居る一方では、赤ら顔の駁者等は向ひ側のビール屋の勘定場で一杯引つ掛けて居るが、それでも始終

抜目の無い眼付で朝のお客を物色して居る。

古本屋は箱を土堤際へ据えた。微風にも解けるだぶくの上衣を着て、いつも戸外に出て居る。此の善良な「精神」の小賣商人等は、雨や風や、霜や雪、或は又霧や偉大な太陽によつて甚く曝らされて来たために、殆ど大伽藍の聖像と見分けが付かない位なつてゐる。彼等は皆私の友人である。又私は、事實の點に何等の疑念も抱かずに、その瞬間までいつも私に必要であつた何かの古本を、其等の箱の一つから探し出すこと無しには、箱の前を素通りしたことは、殆ど無かつた。

やがて家へ歸ると、私は家事管理婦の喚く聲を辛棒しなげばならなかつた。彼女は私のボケツトが皆引裂けさうになつてゐることや、鼠共を引寄せた所の紙屑を家中一ぱいに撒き散らすのである。テレーズは其の事では賢い。又私が彼女の言ふことに耳を傾けないのは、彼女が賢いからである。何故なら私は、平靜な態度を取る代りに、いつも無頓着の賢明よりも、激情の愚を選ぶからだ。けれども只私自身の激情が決して暴力を以て破壊して、破壊したり殺したりするといふ種類のもので無いために、普通の人はその存在を知らないのである。斯うは言ふものゝ、時として私はその感情のために甚く動かされることがある。随つて、誰か忘れられた僧侶の書いたものとか、ピーター・シューフェル(註、獨逸の印刷者、一四三〇年一五〇二年)の誰か卑しい職工の刷つたものとか

の二三頁のために眠り損ねたといふようなことは、一度や二度では無かつた。斯うした譯だから若し斯うした力強い熱情が私の中で徐ろに冷却して行くことがあつたら、それは只私自身が徐ろに冷却しつゝあるといふことになる。我々の情熱は我々自身に外ならない。私の古書籍は私である。私は丁度其等と同じやうに古く且つ擦り切れて居る。

輕やかな微風は、舗道の埃と、楓の樹の翅のある種子と、馬の口から落ちた枯草の端くれとを連れて過ぎ去つた。此の埃は其れ自身に於て少しも異つたものでは無い、けれども其れの飛ぶのを見ると、私は少年の頃丁度斯うした埃の渦巻を眺めた當時を想ひ出すのである。で私の古びた巴里人の精神は、此の突嗟の思ひ出によつて著しく刺激された。私の窓から見る凡てのもの——左の方七星丘まで遠く廣がつて Arc de Triomphe (凱旋門) を宛ら石の骸子のやうに、見分けさせるあの地平線、榮光の河セーヌと、其の橋々、チエイレリー宮の高臺の樹立、ルネサンスのルーブル宮、かうしたものは宛ら鍛冶工の製作のやうに彫り刻まれて居る。又右手の Fontaine (昔の彫刻から pons Lutetiae novus dicitur と呼ばれてゐる) の方面は、巴里の中でも古い尊とい部分で、塔や尖塔が聳えてゐる。——是等は皆私の生命であり、私自身である。だから若しも、斯くの如く私を靈感し、私に生氣を吹込み乍ら、種々雑多な幾千の思想の影を通して私の中に反

映する所の、是等のものが無かつたならば、私は恐らく無^{ウレシ}なのだ。私が絶大な愛を以て巴里を愛するのは此の故である。

にも拘らず私は倦怠して居る。私は又、私に考へることを教へ、尙ほ一層考へるように私に勧め、而も私が常に非常に考へて居る此の大都會の心臓の中で、私のための休息が一つも有り得ないといふことを知つて居る。而も間斷無く私の好奇心をそゝり乍ら未だ曾て其れを満たしてくれない是等の書物の中で、空虚なものが如何に私を感激せしめたことぞ？ 或る場合には其れが私の求めねばならない日附である、又他の場合には、其れは私が確かめねばならない場所の名であるか、若しくは眞の意義を決定しなければならぬ所の何か奇異な言葉である。言葉？——然り！ 言葉である。一個の言語學者として、私は其等の主權者であり、其等は私の臣下である。そして、善良な國王のやうに私は全生涯を其等に捧げる。だが、いつか私は位を譲ることが出来ないだらうか？ 此處から全くかけ離れた何處かに或る小さな小屋があつて、そこで私は非常に懐れてゐる静寂を享樂し乍ら、あの決して毀されることの無い、偉大な静寂が私の凡てを包みに來る、と云ふ一つの理想を私は抱いて居る。私は、園の前の一脚の椅子と、眼も遙かに廣がつてる野原とを夢想して居る。だが私は、自然の凡ゆる清新さを映し且つ集めるために、生き／＼と

微笑してゐる若々しい顔が自分の傍に無ければならない。其の時私は自分を一人の祖父と思ふことが出来る。又私の生涯の永い空虚がそれによつて満たされるだらう。……

私は狂暴な人間では無い、而も私は容易に怒らされた。又私の著作の凡ては、悦びと同じ程多くの悲しみを私に與へた。又私は、二三月前にルクセンブルグの若い友達が無禮にも私に就て放語した所の、あの非常な自惚れと非常な無思慮との僭越さに就て、今尙考へ續けて居るといふのは何うした譯か、私には分らない。皮肉にも私は彼を「友達」とは呼ばない、何故なら私は、凡ゆる向う見すと空想の逞しい偏心性を有つた勤勉な青年を好むからである。だが、私の年若い友達は何ゆる限界の彼方へ行つて了つた。動脈の接合を初めて試みた人であり、且つ、外科醫術が單に山師の理髮屋等によつて行はれてばかりゐた當時に於て開業した人であり、而も學問の地位を今日占めてゐる高さにまで上げること成功した人である所の、あのマスター・アンブロー・パーレー(註、佛國外科醫の泰斗、一五〇九年—一五九〇年)でさへ、その晩年に於ては、凡ゆる外科醫の青年子弟達から攻撃を受けてゐた。論議中に、或る頭の空^くつほな青年——恐らく世界の最も善良な息子であるにも拘らず、尊敬の念を全く缺いてゐた——によつて甚しく侮辱されたために、此の老大家は「Du la Mummie」「D. la Licorne」「Des Venins et de la Peste」等の論文の中で其の男に答へた。「余は彼に祈

る、』と、此の偉人は言つて居る。余は彼に祈る、若し彼にして余の答へを反駁せんと欲するならば、願はくは凡ての忿恚を棄て、温情を以て此の善良なる老者を遇せよ。』と。此の答辯は、アンブロー・パーレーの筆から迸り出たものとして尊敬に値する。けれども若しも其れが、職業のために白髪頭しらがたまになつた村の接骨屋接骨屋の書いたものであり、又誰か村の若衆によつて愚弄されたものであつたとしても、依然凡ゆる賞讃の價値があるであらう。

恐らく私の此の事件の記憶は、只賤しい憤恚の感情によつてのみ坐きくと保つて來られたやうに見えるかも知れない。最初は私自身でも然う考てゐたのだ、そして、自分の言つたことの意味をさへ知ること出来ないやうな一少年の言葉を、斯くの如く長たらしく絮述して居ること自分を賞めた。然し此の問題に就ての私の回想は、其後更に良好な進路を取つたのだ。今私が其等を自分の日記に録するものも然うした理由に依つてある。私が二十歳の青年であつた頃（今から半世紀以上も前のことだ）或日數人の同僚と共に、ルクセンブルグのあの同じ公園を散歩して居つたのを、私は想ひ出した。私達は自分等の老教授達のことを話して居つた。すると其の中の一人は偶と、尊敬すべき博學者ベティ・ラーデル先生の名を擧げた。これは古代のエトラスカン文明の本源の上に若干の光明を投げた最初の人であつた。だが實に氣の毒なことには、ヘレンの情

人達の年表を作つたことがあつたのだ、私達は皆あの年表に就て思ふ存分に笑つた。私は又斯ら怒鳴つた、『ベティ・ラーデルは驢馬だ、二字でちや無くて、全十二巻で書いた馬鹿だ！』と。

青年としての私の、此の愚かしい言語は、極めて輕卒に發せられたものであつたために、私の良心の上へ老人のやうな重みとはならなかつた。願はくは神よ、人生の戦闘に於て私が、來だ會つて、より無邪氣な言葉の鎗を使つたことか無かつたといふことを、いつの日か私に示して下さい！ だが然し、今私は、我が一生の何かの時期に於て、ヘレンの情人の年表と同じ程馬鹿けたものを無意識の内に書いたことが眞に無かつたか何うかを自らに訊ねる。科學の進歩は、其の進歩に對して最も偉大な貢獻をしたその書物を、凡て無用のものたらしめる。其等の著作が最早何の役にも立たないことから、自分現代の青年は、其等が何等の價値の無かつたものと信じて了ふ傾向がある。彼は其等を輕蔑する、そして若し其等の著述が何等かの老朽した見解を含んでるやうなことがあつたら、彼は其等を嘲笑する。私が二十歳の頃、ベティ・ラーデル先生及び其の年表を犠牲にして自ら快とした理由も茲に存するのである。又嘗てルクセンブルグで、若い不敬な私の友人が次の如く言つたのも此の理由である……

サクスターグよ、汝自身の内を視よ、そして嘆くことを止すがい。

何たる事ぞ！ 汝救されんとは。汝何者をも救すさざりし非ずや！

(六月六日)

六月の第一木曜日である。私は自分の本を閉ぢて聖なるアボット・ドロククトヴユースに訣別した。此の人は今神の祝福の悦びの中に居つて、彼の名と作品とが地上で、私の手に成る貧しき編纂を通して頌へられたのを見るべく非常な忍耐を感ずることが出来ないで居る。私は其れを告白しなければならぬか？ いつか蜜蜂が訪ねたのを見たあの錦葵木は、あの何時も笏杖を携へ法冠を被つてゐた昔の聖僧達の凡てよりも、遙かに多く私の思想を満たして居つた。私は青年時代に凡てのどんなものでも繙讀したものだ、その當時讀んだスブレンゲル(詩、瑞西の東洋語學者一八一三年に生る)の著書の一冊に『花の愛情』に就ての幾何かの思想が書かれてあるが、其れが今、半世紀も忘れてゐる今日、再び私の記憶に甦つて來て、而も其れが私をして、自分の貧弱な精神的能力を昆蟲と植物との研究に捧げなかつたことを悔しめる程、それ程興味を覺えしめるのである。所で、ほんの今先き私の家事管理婦は、虫眼鏡で、にほひあらしいと、うの花を點檢しつゝあつた

行爲で、臺所の窓の所で私を吃驚させた。

私が斯うした回想をしたのは、自分の襟飾を探して居つた間であつた。だが徒らに數多い抽出の中を搜した後で、結局私は自分の家事管理婦に頼まねばならなくなつた。テレーズは元氣無く入つて來た。

『先生様』彼女は言つた。『あなたがお出掛けになるといふことを私に仰有らねばならないのでした、そしたら私はあなたの襟飾をお上げ致しましたでせうに、ね！』

『だがね、テレーズ』と私は答へた。『お前の手を借らずに見付かるような場所へ置いといて呉れる方が、どれだけ良かったか知れないのだよ。』

テレーズは私に答へようとしなかつた。

テレーズは最早私に何物をも調べてくれないのだ。私は彼女に頼まないでハンカチ一つ持つことが出来ない。のみならず彼女は耳が遠く、跛者びつこであり、又一層悪るいことには、だん／＼記憶力を失ひかけてゐるために、私は永久の不便の中に元氣無く日を送るのである。にも拘らず、彼女はさうした靜肅な自尊心を有つて家庭の主權を揮ふために、私は彼女の統治に反抗して叛逆を企てようなどいふ勇氣を感ずることも無い。

『襟飾だよ！ テレーズ！——聞えるかい？——俺の襟飾だ！若しお前がぐずぐずした遣り方で俺をこんなに狂気にするなら、俺は襟飾なんか要らない、縊る繩が欲しい！』

『大變お急ぎのやうでございますね、先生様、』テレーズは答へた。『あなたの襟飾は失くなりませんよ。此の家の中で失くなるものは一つもございませんよ、どんなものでも私しが管理して居りますもの。でも何卒暫くお待ち下さりませ、直ぐ見付けますから。』

『だが此所に、』と私は胸の中で考へた、『五十年間の獻身と自己犠牲との所産か此處に居る！……嗚呼！ 若しも何かの幸福な機會によつて、此の頑固なテレーズが、一生に一度、只の一度でも、僕婢としての本務に缺くる所があつたならば——若しも只の一瞬間でも過失があつたならば、恐らく彼女は此の不撓不易の權力を私の上に揮ふことが出来なかつたらうし、又私は、少くとも彼女に反抗する勇氣を持つてゐなかつたであらう。だが人は何うして美に反抗することが出来よう？ 何等の弱點を有しない人達は怖るべきである。彼等に乘ずる方法は一つも無い。例へばテレーズを一寸見るかい。彼女は諸君が咎めることの出来るやうな過失を只の一つを有つてゐないでは無いか！ 彼女は、彼女自身に對し、神に對し、又世界に對して、何等の疑惑をも有つてゐない。彼女は烈婦であり、聖書の中の賢い處女である。他人は彼女のことを少しも知ら

ないかも知れない、だが私は彼女の眞價を知つて居る。私はいつも空想の中で、彼女が一つのラムプを携へて居るのを見る。ある粗末な棟の梁木を照らして居る見窄らしい臺所ラムプを携へて居るのを。——それは、蔓のやうに瘦せ、蔓のやうに強い彼女の凋びた腕にぶら下がつてゐる間決して消ゆることの無いラムプである。

『テレーズ、私の襟飾を！ お前知らないのかい、哀れな女よ、今日は六月の第一木曜なんだ、マドマゼル・ジャーンが俺を持つて居る日なんだ。女校長は確かに應接室の床を、勇敢に蠟を塗つたに違ひない。私は、今頃は其の應接で、誰でも自分の姿を映すことが出来ると信じる。又私が、丁度鏡のやうに其處に映る自分の悲しい顔を見ようとして、其の上で迂りこけて古い骨を抄るようなことがあると、私によつては其れが何よりの慰藉になるであらう——遅かれ早かれ、然うしたことが起るに決まつて居るのだ。次に、ヴィクトル叔父の散歩ステッキの把手に彫つてある、あの溫和な尊敬すべき英雄を手本にして、私は、餘り醜い澁面を作らないやうにと自らを制するであらう。……』

『見よ、けにも赫耀たる太陽を！ 土堤は凡て其のために鍍金され、セーヌ河は無數な小さな閃々した皺を作つて微笑して居る。都會は黄金である。そして女の髪の毛のやうにブロンズで黄金色

を帯びた沙塵の霞は、その美しい輪廓の上を漂ふて居る。……テレーズ、私の襟飾を！……あゝ！ 私は今、あの昔のクリーサルがいつも自分の襟飾を大きなブリュタークの本へ挿んで置いたといふ智慧を理解することが出来る。今後私は彼の例に倣つて、「Aelia Enctorum」の頁の間へ、私のネクタイを全部入れて居くことにしよう。」

テレーズは私に喋らして置いて、自分は黙つてネクタイを捜して居る。私は、扉口のベルが優しい音を立て、居るのを聞く。

『テレーズ、』と私は叫んだ。『誰かベルを鳴らして居るぢや無いか！ さあ襟飾を呉れ、そして扉口へ行くがよい。で無ければ、先きに扉口へ行つて、それから神様の助けを借りて、私の襟飾を呉れるがよい。だが、何卒、二つの鞍の間の老耄れ馬みたいに、衣裳戸棚と扉口との間に立たないで呉れ。』

テレーズは敵の方へ行進するやうに扉口へ進んで行つた。我が卓絶した家事管理婦は、年を取れば取る程無愛想になつて来るのである。面識無き人は皆、彼女にとつては疑惑の対象である。彼女自身の主張に随へば、此の性癖は人間の性質を永く経験した結果なのである。私は、是れと同じ経験が他の實驗者の場合にも、同じ結果を生じるか何うかといふことを熟考する餘裕が無か

つた。メイトル・モーシエは、私に面會するために控室で待つて居つた。

メイトル・モーシエは、私の信じて居つたよりも、もつと黄色い顔をして居る。彼は青眼鏡を掛けてゐる、そして彼の兩眼は、丁度二十日鼠が衝立の後ろを駆け廻つて居るやうに、その眼鏡の後ろで絶えず不安さうに動いて居る。

メイトル・モーシエは、こんな場合私の所へ無断で押かけて来たことを言譯する……その所謂場合なるものを彼は明言しないが、察するに彼は、偶然私が襟飾を着けてゐない場合のことを言つて居るのだ。其れが私の過失で無いことは、諸君の能く知つて居る所であるけれども、メイトル・モーシエは、それが分かつてゐないにも拘らず、驚いたやうな顔色を少しも現はさない。只彼は、悪るい時に飛込んで来たと思つてゐるだけである。幾分か私は、早速その點を彼に安心させることが出来た。やがて彼は、態々私と談合に來たのはアレキサンダー嬢の保護者としてあることを私に言ふ。先づ第一に彼は、最初マドマゼル・ジャーンを寄宿學校に訪ねるためには許可を受ける必要があると思つてゐるが、今度は然うした制限を懸念するに及ばないからといふことを私に懇願する。つまり今後、マドマゼル・ブレフェールの學校は——正午から四時までの間ならば——私か訪ねようと思つた日はいつでも入れて呉れるといふのである。私か其の少女に興

味を抱いて居ることを知つて、彼は自分の監督を托した人のことに付ての報導を私に齎らすことを義務と考へて居るのである。彼が随分以前から知つてゐる、マドマゼル・ブレフェールは、彼の最上の信任を得て居る。彼の考へによれば、マドマゼル・ブレフェールは卓絶した道義觀念を有つた文明人であり、且づ卓絶した忠告を與へ得る人物である。

「マドマゼル・ブレフェールは、」と、彼は私に言つた、「主義といふものを有つて居ります。今日では主義といふものは稀れですからね、貴下。何も彼もが凡て變つて了りましたから、我々は到底前の時代と比較になりませんよ。」

「私の階段が適例です、ムシユ。」と私は答へた、「二十五年以前は何の骨折も無しに、昇れたものですがね、今日では其れが呼吸が切れさうなのです、六段も昇らない内に脚が利かなくなるのですからね。兎に角其の性質が悪くなつて了つたのです。それから又彼處に雑誌や書物がございますが、以前あれが月明りで何の妨げも無しに讀めたものですがね、今日では最も明るい日光の中でさへ、私の好奇心を愚弄するのです、そして眼鏡を掛けないといふと、只白と黒の斑点だけしか見せてくれない始末ですからね。それから又私の手足の中へ痛風症が侵入してしましましたよ。確かに是れは、時といふものゝ別な悪戯です！」

「いや、其れだけではございません、貴下、」とメイトル・モーシエは勿體振つて言つた、「現代の眞の不幸は、誰しもが自分の境遇に満足してゐないことです。社會の上流から下層まで、凡ての階級を通じて蔓延してゐるものは、不満と、動搖と、喻安の慾です……。」

「おう、貴下！」私は叫んだ。「此の喻安慾が現代の表象だと貴方はお考へですな？ いや、如何なる時代にも人間といふものは決して不快を求めたことがございませんよ。いつも彼等は自分の境遇をより、良くしようと努力したのです。此の不斷の努力が不斷の變化を齎らすのです、又此の努力が常に續いて居るのです——それのあるのは凡て然うしたことからぢやありませんか？」

「嗚呼！ ムシユ。」メイトル・モーシエは答へた、「あなたが——事務的な世界から全然離れて——書物の中にお暮しになつてゐることは能く分ります、あなたは、私が始終見て居りますやうな、利害關係の争ひとか、金錢のための戦ひとかいふものを、御覽になりません。然し、凡ての人には、大なり小なり其の感激は同じでございます。最も悪慄な妙機事業が到る處で、肆に行はれて居ります。私の周圍に見えるものは、只私を自慄ひさせるだけです。」

私は、メイトル・モーシエが只、彼の善良な厭世主義を表白する目的で、私に訴へたのか何うかを胸の中で疑ふた。所が突嗟に私は、一層慰安的な性質の言葉が彼の唇から洩れたのを聞いた。

メイトル・モーシエの語り出した所によると、ヴァイルジニイ・プレフェールは敬慕尊敬すべき、同情心に富んだ人であり——高き名譽と偉大なる献身との能力ある、教養と思慮のある人であり——又極めて淑やかで、退屈を紛らす術に於て實に巧みで、大聲を上げて恐ろしく上手に讀むことが出来るといふのであつた。やがて私は、彼が只、此の女校長の美德を其れと比較し、算へ上げて以て、世間一般の腐敗の陰惨な光景をより能く描き出さうとして居つたといふことを、理解し初めた。更に進んで私は、此のドムール街の學校が善き保護を受けて隆盛に赴き、且つ社會からの高い尊敬を受けて居るといふことを聞かされた。メイトル・モーシエは宛ら是等の陳述の眞實を誓ふかのやうに、黒い毛の手袋を穿いた手を高く差上げた。それから彼は附加へた、

『私は、自分の商賣柄から、人のことを色々と知ることが出来るのです。公證人といふものは或る程度まで *father-confessor* ですからね。私は此の喜ばしい報せをあなたの所へ齎らすのを、自分の義務と考へたのですよ、貴下。幸ひな機會があなたを丁度マデマゼル・プレフェールに會へるようにした瞬間に、ね。私が申上げたいと思ふことは、まだもう一つだけございます。此の婦人——尤も婦人は此の事柄に就ての私の行動を全然知らないのですが——はね、いつか貴方のことを、最も深い同情を以て私に話したことがございました。私が今其のことをあなたに繰返した所

で結局は只其の語句を弱めるだけのことで、而已ならず、マドマゼル・プレフェールの内所話を、或る程まで洩らさないと、其れを繰返すことが出来ないわけですから。』

『お洩らしなさるな、ムシユー。洩らさなくともいふですよ！』と私は答へた、『本當のことを云へば、マドマゼル・プレフェールは私のことを何一つ知らない筈なんです。然しあなたは、あの方と舊友の感化をお有ちなのですから、私ばあなたに、其の感化をマドマゼル・ジャー・アレキサンダーのために使つて下さるようにお願ひする點で、あなたの御好意を利用したいと思ふのです。あの娘は生徒であると同時に女主人です——あの娘は過勞して居ります。のみならず、あの娘は詰らない不快な方法で罰せられるのですよ。又あの娘の性質は、さうした壓迫を始終加へられる——とによつて反抗的になる、あの寛大な性質の一つなのですから。』

『嗚呼！』メイトル・モーシエは答へた、『あの娘さんは、人生の苦闘の中で役割を演ずるためには鍊へられねばなりません。人間といふものは、決して自らを悦ばすためばかりに此の世界へ來るのでも無く、又自分の好むことばかりを爲に來るものでも無いのです。』

『いえ、人間といふものは、』と、私は少し赫として答へた、『自分の爲さうと思ふことが高尚で智的で寛へでさへあんなら、善であり美であるものを享樂したり、自分の好むものを爲すために

此の世へ來るのですよ。意志を啓發しないような教育は、意志を墮落させる教育です。如何にウ
イルすべきかを教へるのが教師の本分です。』

私は、メイトル・モーシエが、私を可成り馬鹿な人間と思ひ初めたらしいのを觀取した。非常な、
落着いた自信を以て、彼は言ひ初めた。

「貧民教育といふものは、周到な用意と、將來彼等が社會で占めねばならない從屬狀態に對す
る見解とを以て、指導されねばならないといふことを、お忘れになつてはなりませんよ、貴下。
あのノーエル・アレキサンダーが破産によつて死亡したといふこと、又その娘さんが殆ど同情で教
育を受けて居るといふことを、多分あなたはお忘れになつたのですね？」

『おゝ！ ムシユー』私は叫んだ。『そんなことは仰有らないように！ そんなことを仰有ると
御自分を裏切るようなものです、引いては仰有つたことも本當で無くなりますよ。』

『相續した借財が、』と公證人は續けて、『資産を超過して居るのですから。然し私は未成年者
の爲めを思つて債權者等と決算を済すことが出來たのです。』

彼は色々の事情を詳細に説明し初めた。私は一般に取引法なるものを理解することが出來ない
し、殊にメイトル・モーシエの其れが少しも分らないために、さうした説明に耳を傾けることを好

まなかつた。公證人は次に大膽にも、マドマゼル・ブレフェールの教育法の正しいことを立證して
から、結論として斯う言つた。

『人が學ぶことの出來るのは、自分自身を悦ばすことに依つてはありませぬ。』

『いえ、人が學ぶことの出來るのは、只自分自身を悦ばすそとによつてのみです。』と私は答へ
た。『凡ての教育法は只、幼ない者の自然の好奇心を喚び醒して、後日其れを満足させるようにす
る方法に過ぎないのです。又好奇心そのものは、心が満ち足つて幸福であるのと正比例してのみ
生き／＼として有益で有り得るのです。子供の心へ無理矢理に詰め込まれた其等の學問といふも
のは、只智能を塞いだり妨害したりするだけです。知識を正當に消化させるためには、旺盛な食
慾で嚙下されなければなりません。私はジャーンを知つて居りますがね！ 若しあの子を私の監
督に委せて下さるなら、——私はあの娘の未來の幸福だけを見ますから、決して學者には仕上げ
ませんが——その代り輝いた聰明さと生命に充ちた子供を作らうと思ひますよ、人工と自然に於
ての凡ゆる美が、彼女の中で或る優しい敏感な戰慄を喚び起すようにね。恐らく私は、凡ての美
しいもの——美しい風景とか、詩や歴史の空想的場面とか、高尚な音樂の情緒的魅力とか——に
對して、常に同情を以て生活するように教へ込むでせう。又私は、彼女が愛すればいゝと思ふよ

うなものを凡て、彼女の眼で見て可愛らしいものにするでせう。彼女の針仕事のやうなものでも織物を適當に撰ぶことや、刺繡のスタイルや、縁紐の工夫によつて、彼女に愉快なものにしますよ。私は彼女に美しい犬と小馬とを與へて、如何に動物を取扱ふかを教へたり。或は又、一滴の水一片のパン屑でさへ尊いものであることを知らしめるために、小鳥を與へて、其れの番をさせます。それから又、彼女に向一層高尚な悦びを持たせるためには、慈善行爲に悦びを見出すやうに彼女を育てます。又私達の中で、苦痛を遁れることの出来るものは一人も無いのに鑑みて、あの、我々を凡ての苦しみに上に引上げ、又悲しみ其のものにさへ美を與へる所の、基督教の訓へを教へ込むでせう。是れが私の、少女を教育する正しい理想なのです。

「御尤もです、貴下、マイトル・モーシエは答へて、黒い手袋を穿いた兩手を結び合はせた。そして彼は起ち上がった。

『勿論あなたは、』と、私が言つて、彼と俱に扉口の方へ行つた。私が決して自分の教育法を、マドマゼル・ブレフェールに強いようなどゝ一瞬間も思つたことが無いといふことは御分り下さるでせうね。是れは當然、私一個人の意見ですからね、況んや最も良く整つたあの寄宿學校の組織とは全然一致しませんよ。私が只あなたにお願いしたいのは、ジャーソンにもつと少ない仕事と

もつと多い遊びとを與へて下さるやうに、又絶対に必要な場合を除いてはあの娘を罰しないやうに、それから又、學校の規則の許す範圍で、能きだけ精神と肉體との自由を與へてくれるやうに、ブレフェールさんを説き伏せて頂きたいことです。』

マイトル・モーシエは青白い不思議な微笑を浮べて、私の陳述が恐らく好意を有たれるだらうといふこと、そして能ふ限りの凡ゆる考量を加へられるだらうといふことを知らせた。

それと共に彼は、私に小さい叩頭をした、そして一種特別な不快と不安の感情を私に残して出立した。私は自分の生涯に、随分多くの不可思議な人物に出會つたことがあるが、此の公證人と能く似通つた人、或は此の女校長と全然似て居るといふ人には、會て一人も出會つたことが無い。

(七月六日)

マイトル・モーシエは、彼の來訪によつて非常に私を手間取らせたために、私は其の日ジャーソンに面會に行くのを中止したのであつた。色々の職業的な役目が、此の週の残りを非常に多忙にさせた。大抵の人が全然活動的生活から退隱する年齢であるにも拘らず、私は依然として自分の生

活して居る社會に對して、何千といふ絆によつて縛られて居る。私は、學士會の集會や學術研究會や、色々な學者團體の集合の場合に其の司會者とならねばならない。私は餘りに多くの名譽職を荷ひ過ぎて居る。一つの官省だけでも其れを七つ有つて居るのだ。役所は私を追ひ拂へば非常に悦ぶだらうし、私は又其等を追ひ拂ふことを非常に悦ぶ。だが慣習といふものは、私達二人よりも強い。で私は相變らず色々な役所の建物の階段を、跛曳き／＼攀ち上ほつて居るのである。年寄りの書記共は、私が幽靈のやうに廊を徊徘徊し乍ら通つて行くと、お互に私を指差して居る。人が非常に年を取ると、顔出しをしないようにすることが極めて困難であるのを知るようになる。だが然し昔の歌にあるやうに「De prendre ma retraite et de songer à faire un fin」の時だ——年金附きで退職し、良き死と死ぬる準備を爲すべきな時のだ。

或る年寄つた侯爵夫人——若い頃ヘルビシユース(註、佛蘭西の哲學者、一七五五年—一七七一年)の友達であり、又其中に教區の僧の訪問を受けた。僧は彼女に、死ぬ準備することを要求した。

「ほんとに然うしなければならぬのでせうか。」と彼女は訊いた、「外の人は皆、最初に其れを完全に成し遂げるのを、私は存じて居りますけれどね。」

私の父が其後早速彼女を見舞ひに行つたが、行つて見ると彼女の容體が極めて險惡であつた。

「今晚は！」彼女は私の父の手を握りしめ乍ら言つた、「私ね、神様が親しき者を一層良くして下さるか何うか見ようと思つて居りますの。」

哲學者の美貌ベウテの友は、凡て斯ういふ風にして死ぬ習慣によつてゐたのだ。かうした最期は決して野卑なものでも無く、僭越なものでも無いのだ、又さうした輕卒な言動は、あの痴鈍な精神から生まれるやうな種類のものでも無い。だが其等は私を愕然たらしめずには措かない。私の恐怖も、私の希望も、さうした死の態度と一致することが出来なかつた。私は自分の其れを充分に自若たる精神を以て爲したいと思ふ、又これは、私が一二年の内に、自分に屬して居る何かの方法に就て考へ初めねばならない理由である。さも無くば必ずや私は危険だ。……だか、黙ッ！

『彼』が通り過ぎる時『彼』に『彼』の名を聞かせて願ひさせてはならない！ 私はまだ『彼』の助けを藉らずに薪束を持上げること出が来る。

……行つて見ると、ジャーンは實際非常に幸福に暮してゐた。前週の木曜日に彼女の後見人が行つてからは、マドマゼル・ブレフェールは普通の規則から彼女を自由にして呉れて、色々な方法で彼女の仕事を軽くして、れたことを、彼女は私に語つた。その幸福な木曜からは彼女は、

貝葉と花との少なくなつてゐる庭の中を、好むだけ歩き廻ることが出来たのみならず、聖ジョージのあの不運な小塑像に着手する便宜をさへ與へられてゐた。
彼女は微笑し乍ら私に斯う言ふ、

「皆これは、あなたの御蔭だといふことは、わたし能く知つてますわ。」

私は、もつと外の事を彼女と話さうと思つた。けれども私は、自分の言つて居ることが到底彼女の注意を惹くことが出来ないと云ふことを知つた（彼女が幾らさうしようと努力しても）。

「お前、何か私のことを考へて居るようだね。」と私は言つた。「さあ、その事を私に言つてお呉れ。それを言つて呉れないと、私達は全く話することが出来なくなるからね、さうなつたら非常に詰らないぢや無いか。」

彼女は答へた。

「まあ！ あたし、本當はあなたの仰有ることを聞いてゐたのですわ、先生。でも何か外のことを考へてゐるのは本當なの。御免よ、ね？……わたしね、ブレフェール先生があなたをそれらしく大好きになられて、突然わたしにも大變良くして下さるようになったのを、考へずに居られませんでしたの。」

やがて彼女は、妙な、にこ／＼した、懐へたやうな恰好をして私を見つめたので、私は思はず笑ひ出した。

「そのことがお前を驚かしたの？」と私は訊いた。

「えゝ、大變。」

「その理由を私に話してお呉れ？」

「あのね、理由なんか私に分らないの、些とも分らないの……だつて、まあ！……何うしてあなたが、あれ程ブレフェール先生のお氣に入つたのか、些とも理由が分らないのですもの。」
ぢや、私を大變無愛想な人間とお前は思つてゐるんだね？」

彼女は唇を噛んだ。宛ら唇が間違を仕出かしたので其れを罰するかのやうに。それから、スバニエル犬(註、馴養犬の一種)のやうな優しい、美しい、媚びるやうな態度で、その大きな柔和な眼で私を見乍ら、斯う言つた。

「わたし、馬鹿なことを言つたことは能く知つて居りますわ。でも矢ッ張り、何故あなたがそれほどまでブレフェール先生のお氣に入つたのか、私には分りませんわ。だつてあなたは、大變——ほんとに大變、あの方のお氣に入るやうに見へるのですもの。或日あの方は私を呼びましてね

あなたの事を色々とお訊きになりましたわ。』

『本當？』

『え、本當なのよ。あの方はね、あなたのお家のことを見て知りたかったと思つたのですわ。まあ何うでせう！ あの方は、あなたのお女中さんの年齢までお訊きなされるんですもの！』

かう言ふよりジャーンは、わつと笑ひ出した。

『それはさうと、お前そのことを何う考へるね？』と私は尋ねた。

彼女は永い間、擦り切れた靴のクロースをぢツと瞪め乍ら、非常に深く考へ込んでゐるやうに見えた。遂に、又眼を上げて彼女は斯う答へるのであつた。

『わたし何うも審かましいと思ひますわ。だつて、譯の分らないことを心配するのは、ほんとに自然ではありませんか！ わたし、自分が馬鹿だといふことは知つてますわ。でもあなたは私のためにお氣を悪くなさらないでせうね？』

『何うして、決してそんな事は無いよ、ジャーン。私は些ともお前に氣を悪くしやしない。』

私はだん／＼彼女の驚きを分擔し初めてゐたことを認めねばならない。で私は此の少女の唯一

の思想を、私の古びた頭の中で考察し初めた。——「人は自分の理解し得ないことに就て憂慮する」。

所が、彼女は新らしい愉快の破裂を以て、叫び出した。

『あの方の訊いたこと……當て、御覽なさい！ 百でも千でも推量なさつていゝわ。もうお諦めなさつて？……あの方はね、あなたが御馳走が大好きか何うかを、私にお訊きになつたのよ。』

『そして、その質問の函を、お前何ういふ風に受けたのかね、ジャーン？』

『わたし答へましたの、「先生、わたし存じません。」て、さうしますと先生はわたしに斯う仰有いましたわ、「お前さんは小馬鹿だね、秀れた人の生活といふものは、どんな小さなことでも一々注意して見なければなりませんよ。ムシユール・シルヴエストル・ポナールは佛蘭西の名譽の一つだといふことを、お前さん、知らなければなりませんよ！」つて。』

『詰まらない！』と私は叫んで、『所で、お前其れを何う思ふかい？』

『プレフェール先生の仰有ることが正しいと思ひますわ。でも私、些とも構ひませんわ……（私の今言はうとすることが我儘なのは能く知つてゐますけれど）……プレフェール先生が何事

につけて正しからうと正しく無からうと、私些とも構はないのです、些とも構はないのです。』
『よし、ではお前、ブレフェール先生が正しくなかつたことで満足するがいよ、ジャー
ン。』

『然うです、然うです、あの方は、あの時全く正しかつたのです。でも私、あなたを愛する人
を皆愛したいと思つてゐたのです——一人も例外無しに——それに私、それが出来ないのです
だつて私には、ブレフェール先生を愛することが逆も駄目なんですもの。』

『お待ち、ジャー、私は、非常に眞面目に答へた、『ブレフェール先生は、前に對して良くお
なりだよ。今からあの方に對して良くならうとして御覽。』
すると彼女は、鋭どく答へた。

『ブレフェール 先生が私に對して良くなるのは大變樂なことですわ、でも私があの方に對して
良くなることは、本當に無理なことに違ひないのですわ。』

で今度は私は、以前よりも一層嚴肅な調子で言つた。

『ねえお前、先生の、利といふものは神聖だよ。お前は、あの校長さんが、お前のじくなつた
お母さんの代りをして呉れてゐるものと思はなければ不可ないよ。』

私は何うやら斯うやら此の勿體振つた馬鹿なことを言つた時、私は非常に其れを悔ゐた。子供
の顔は蒼ざめ、涙はその眼に溢れた。

『あゝ、先生！』彼女は叫んだ、『あなたは何うしてそんな事が仰有れるのです——そのあなた
が？ あなたはお母さんをお存じないのです！』

噫、神よ！ 私は彼女の母親を知つて居た。又自分の知つてゐたことを言つて、それが何故馬
鹿なことになり得たのか？

彼女は、宛ら自分自身に對して言ふ如く、斯う繰返した。

『お母さま！ なつかしいお母さま！ お氣のななお母さま！』

幸ひな機會に妨げられて、私は其れ以上馬鹿を仕出かさないで済んだ。私が今にも泣き出しさ
うに見えた瞬間に何うしてさう云ふことが起つたか、私には分らない。私のやうな年齢になると
人は決して泣かないものだ。して見ると私の眼へ涙を催さしめたのは、質たまたまの悪い咳せきだつたに違
ひない。然し兎も角も、外觀は私の氣に入つた。ジャーは其れに眩惑くらうくさせられたのである。お
ゝ！ 何と喜びに充ちた純な微笑が、彼女の美しい温ひのある睫毛の下に輝き出したことか！——
夏の夕立の後の、樹の枝の中の日光のやうに！ 私達二人は、互に手に手を取つて、一言も言はず

に永い間坐つて居つた——全く幸福に。此の天國の調和——曾て聖なる婦人に案内させられて行つたあの墓の前へ跪づいた時、自分の魂を通して戦慄を聞いたと思つたことのある、あの天國の調和が、又もや突然私の胸に甦つて来て、無限の柔かみを以て此の祝福の瞬間に靜かに脹らんで行つた。無論此の、私の手を握りしめてゐる少女も、同じく其れを聞いたに違ひない。それから此の恍惚のために物質世界の上に曳き上げられた、哀れな老翁と天真爛漫な少女とが、或、優しい無形の「實在」が二人の周圍は愉樂を作りつゝあるといふことを知つた。

『我が子よ、』と私は遂に言つた、『私は非常に年を取つた、そしてお前が只少しづつ知つて行く所の人生の秘密が、随分澤山私の前へ顯はれた。私を信じるがいゝ、未來は過去から造られるのだ。お前が此所で、短氣と不慮と無しに、満足して暮すためにどんなことしようとも、それは屹度お前が、これから先き何時かお前自身の家庭で平和と悦びの中に生活する上に役に立つであらう。柔順におなり、そして、何うして苦しむかを學ぶのです。忍耐して苦しむ者には、苦しみも少ないものだからね。若しお前が何か甚い不幸の原因を有つようなことがあつたら、私が屹度そこへ行つてお前の代りを勤めてあげる。若しお前が、悪い取扱いをされるようなことがあつたら、ガブリーの奥さんと私とが、お前の身になつて酷い扱ひを受けて居ると、考へるだらうから

ね。』……

「ほんとにあなたの健康は、大變お宜しいのでせうか、なつかしい先生？」

忍び足で私達の後ろへ近づいて、一種特別な微笑を湛へ乍ら此の質問を放つたのは、マドマゼル・ブレフェール其の人であつた。私が彼女に言ひたいと思つた第一の考へは、悪魔の所へ行くと云ふことであつた。二番目の考へは、フライ鍋が音楽の目的に殆ど適しないやうに彼女の口も微笑に適しないといふこと、第三の考へは、丁寧に彼女に答へて、私が彼女の非常に健康なことを望んで居つたと確言することであつた。

彼女は、庭で散歩するやうにと娘を立去らせた。それから片方の手を襟飾の上へ押へ付け、片方の手を「優等生一覽表」の上へ伸ばし乍ら、其の表の初めへ大きな字體で書いたジャー・アレキサンダーの名前を私に示した。

『あなたがあの子の品行を満足されたことを知りまして、私は非常に嬉しく思ひます。』私は彼女に言つた、『これ以上嬉しいことは御座いません、私は又此の幸福な結果を、あなたの御深切な注意の賜物と思つてゐます。大變無駄ですが私は、若い娘さん達の教訓にもなり又若い娘さん達が悦ぶだらと思ふやうな本を少しばかりあなたに差上げたいと思ひます。何卒アレキサンダーや

其の友達仲間の精讀に適するかどうか、一度お目を通して頂きたいのです。』

女校長の感謝は、只其の言葉の中に溢れたのみならず、殆ど涙脆い感情の形式を取つた位に
えた。私は話題を變へようと思つて、

『今日は實にいゝお天気ですね!』と言つた。

「左様でございますね、」彼女は答へた、『若し此のお天気が續きましたら、あの可愛らしい子供
達が思ふ存分樂しめるでせうね。』

『あなたは、休暇のことを仰有つてゐられるのでせうね。然しマドマゼル・ブレフェールは行
く處が無いぢやありませんか、縁者が一人も無いんですもの。一體あの子は此の大きな家の中で
只つた一人何をしようと云ふのでせう?』

『おゝ、私達は色んなことをしてあの娘を悦ばすことが出来ますよ……博物館へも連れて参
りませうし、それから——』

彼女は躊躇した、顔を赧らめた、そして言ひ續けた、

『——それから、若しあなたのお許しがあれば、あなたのお宅へも。』

『あゝ、無論です!』私は叫んだ、『それが第一等の考へです。』

私達は非常に善良な友達としてお互に別れた。私は彼女と、彼女は私と。私は自分の欲したも
のを得ることが出来たからである。彼女は明かに言ふことの出来ない動機によつてある——此
の事實は、プラトーに依れば、彼女をば靈魂の天使の最高位に引上げたものであつた。

……だが然し、私自身が此の人を自分の家へ案内する立場に居るのを知ることが、惡の前兆
が無いとは言へない。實際又、ジャーンを彼女の手に委せて置くよりも、誰か外の人に預けて置
くの方が見る方が、一層私には嬉ばしいに違ひないのだ。メイトル・モーシエと云ひ、マドマゼル・
ブレフェールと云ひ、いづれも私には不可解な性格である。一體彼等は、何故彼等の言ひたいこ
と言ふのか、將又彼等の爲したいことを爲すのか、私には何うしても想像が付かない。彼等は私
を不安がらせるような不思議なものを共通に有つて居る、ジャーンが少し前に言つた通り『人は、
自分の理解し得ないことに不安を有つ。』

嗚呼! 私のやうな年齢になると、誰でも、人生には眞卒が如何に少ないかといふことを知も
過ぎる程知つて了ふ。此の世に永く生きることによつて如何に多くのものを、失ふかといふこと
を、學び過ぎる程學んで了ふ。そして、最早青春以外に何物をも信ずることが出来ないの感す
る。

(八月十二日)

私は彼等を待つた。實際非常に待ち焦れて居つた。彼等を深切に歓迎することをテレーズに懇々と云ひきかすために、私は、諷示や甘言の凡ゆる全力を傾倒した。けれども此の方面に對する私の力は極めて乏しいものである。彼等は來た。ジャーンは私が豫期して居つたよりも一層清爽であり奇麗でもあつた。彼女は實の所、彼女の母親の魅力に似た所を少しも有つてゐなかつた。だが今日は、生れ、初めて私は、彼女が快活な顔をしてゐるのを見た。實際快活な顔は此の世の女性に非常な利益を與へるものである。私は、彼女の帽子が心持だけ一方へ傾いてゐたやうに思ふ。だが彼女は微笑した、そして「書籍の都」は此の微笑のために凡て照らし出された。

私はテレーズの方へ注目した。此の老いたる家事管理婦の頑固な態度が、此の少女を見たために柔らけられたか何うかを見た、私が振り向いて、ジャーンの上に注がれて居る彼女の光彩の無い眼を見た。私は又長い皺の寄つた彼女の顔と、齒の無い口と、その尖つた頬とを見た何か大きき妖婆の頬のやうな。私の見ることの出來たは、これで全部だつた。

マドマゼル・プレフェールは全部空色の裝束で現はれた——そして前へ進み出たり、後退りしたり、飛んだり、小股でちよこ／＼歩いたり、叫んだり、眩いだり眼を俯目にしたり、その眼を上へ轉じたり。辯解しようとして狐狼し乍ら——言ふのを止さうと思ふても矢張り斷然言はうしたり、決して言ふまいと思ひ乍らも再た遣つて見たりして——凡ゆる慇懃の限りを盡した——要するに彼女の爲し得たことは、こせ／＼した騒々しさ許りだつた。

『何て澤山な御本ですこと』彼女は叫び出した、『まあ此の本を、本當に全部お読みになりまして？』ポーナル・先生。』

『嗚呼！ 読みましたがね、』と私は答へた、『全くそのお蔭で私は何も知らないのです。何しろあの本の中には、外の本と矛盾しないものは只の一冊も無いのですからね。だから、あの本を全部読んで了ふ時分には、何事につけ何を考へていゝか分らなくなりますよ。それが丁度私の立場ですよ。マダム。』

そこで彼女は、自分の印象を告げるためにジャーンを呼んだ。けれどもジャーンは窓の外を眺めてゐた。

『何て綺麗でせう！』彼女は私達に言つた、『河の流れを見るのは、わたしほんとに好きですの

よ色んなことを考へさせますものね。』

マドマゼル・ブレフェールは帽子を脱いで、ブロンドの髪の垂れ下がった顔を現はしたので、私の家事管理婦は、人の衣裳が家具の上に散らかつて居るのを見るのを好まないといふ様子をした。早速その帽子を強くおツ取つた。それから彼女はジャーソンに近寄つて、『私の小さいレデイ！』と呼びかけ乍ら、彼女の『物』を要求した。そこで此の小さいレデイは、外套と帽子とを渡し乍ら、非常に美しい頸としなやかな姿とを公に現はたので、その輪廓は、明け放つた窓の強い外光の中に、浮彫のやうに美しく見えた。私は、此の瞬間に誰か他の人に此の娘さんを見せることが出来たらと思はずにゐられなかつた——年寄りの管理婦や、羊のやうに毛を立てゝゐる女校長や記録者であり古文學者である此の老ひたる馬鹿者と全然異なつた誰かに。

『あゝ、お前セーヌ河を眺めて居るんだね。』私は彼女に言つた、あの太陽の中でキラ／＼光つて居るのを御覽！』

『えゝ』と彼女は答へて、窓枠へ凭れかゝつた、まるで火の河のやうに見えますわねえ。でも、あそここの向ひ岸の柳の蔭の所が何て美しく涼しさうに見えますこと

あそここのあの小さい場所が、外の所よりもずつと私の氣に入りますわ。』

『然うだとも』私は答へた、『此の河がお前に魅力をもつて居ることは、私に能く分つて居る。何うだね！』ブレフェール先生に許して頂いて、セント・クロードへ旅行しようぢや無いかね？』ポント・ロイアルの橋の下で屹度ステイム・ボートに乗れるだらう。

ジャーソンは私の提議を喜んだ。又、マドマゼル・ブレフェールは如何なる犠牲をも決して厭はなうと言つた。たゞ私の家事管理婦だけは、私達がこんな舞頓着に出掛けることを少しも望まなかつた。彼女は私を食堂へ呼び出したので、私は恐怖と戦慄とを感じ乍ら、彼女に随いて行つた。

『先生様、私達二人きりになるや否や彼女は言ふのである、『あなたは何時だつて何もお考へになりません、色々のことを考へねばならないのは、いつもわたくしでござりますよ、わたくしの物覚えの宜しいのは、何よりもあなたの仕合せでござります。』

私は此の立荒たしい妄想を追拂ふのに、今が適當な時期で無いと思つた。彼女は續けた。

『そしてあなたは、此の小さいレデイがどんな食べ物がお好きかといふやうなことを一言も私に仰有らないで、お出掛けなさるつもりでせう！ あんな年頃の方は何にも御存じありませんよ、殊に何にが好きといふこともござりませぬ、まるで小鳥のやうにお食べなさるものですよ、あなた御自身は、お旨いものを兎も角御存じですから、お氣に入るやうにするのは仲々六ヶ敷うござ

りますが、先生様、あのお若い方々は随分違つて居るのですからね——あの方々は料理のことは一つも御存じ無いのですよ。あの方々が一番不味いと思ふものが一番お旨いものだったり、お旨しいと思ふものが不味いものだったりすることが度々ござります——何しろまだ、あの方々の胃袋が出来上つてゐませんのです——ですから、あの方々に何をお上げて宜いやら迎も分りませんよ。如何でせうね、あの小さいレディは鳩と青豌豆の料理をお好きでせうか、又ワニルラ入りのアイス・クリームがお好きか何うでせう。』

『善良なテレーズ』と私は答へた、『お前が一番美味いと思ふものを、その通り何でも拵へるがい、俺が見て、これなら美味いと思ひさうな物を、ね。あの婦人達は、俺等の食しい暮らし向ですつかり満足するだらうから。』

テレーズは、非常に無愛相に答へた。

『先生様、わたくしはあの小さいレディのことをお訊して居るのでござります。何一つ楽しい目もなさらずに此の家をお立たせ申すわけには行きませんもの。あの、髪の毛ぢや／＼した年取つた人はね、若し私の料理がお好きでなかつたなら御自分の拇指でも吸はして置けば宜しいのですよ。あの人がお好きでも一向私は構ひません！』

斯うして私の心は落着かせられたので、私は「書籍の都」へ引返して來た。其處にはマドマゼル・ブレフェールが、まるで自分の家に居るやうに、落着き拂つて縫物をしてゐた。私は彼の居つたことを辛うじて氣がついた位だつた。彼女は餘り場所を占領してゐなかつた。實際、窓の隅だけであつた。然し、椅子と足の置場とを非常に旨く選んで居るために、凡ての家具類は全然彼女のために作られたやうに見えるのであつた。

ジャーンは、之れと正反對に、書物や繪畫に注意をを傾け乍ら——さながら其等のものに對して懇ろな別離の挨拶をして居るかのやうに、深切さうな、意味ありけな、半ば悲しげな風に其等を見詰めてゐた。

『さあ、』私は彼女に言つた、『此の本はお前に面白いよ、お前の氣に入らずに居られないと思ふね、此の本は、美しい挿繪が一ぱいあるんだもの。』

斯う言つた私は、ヴェシエリオの蒐集にかゝる、衣裳圖案集を彼女の前へ展けて出した——是れは、諸君の用紙を使つて現代の技藝家の手で貧弱に複製された平凡な刊本では無くて、其の黄色くなつた用紙の上へ描かれて居る貴女達と同じ程貴とい所のある *editio princeps* (著書の初版) の、華麗な、珍重すべき一冊であつて、而も其れが時のために光彩を増して居るのであつた。

無邪氣な好奇心を以て其の挿話を斜くり乍ら、ジャーンは私に言った。

『私達は散歩のお話をして居りましたのよ。でもそれは大旅行ですわ。あなたがさせて下さつてるのは、それからねえ、わたし遠い／＼所へ旅行したいと思つて居りますのよ。』

『そんならね、お嬢さん、』と私は彼女に言った。『そんなら、旅行のため出来るだけ樂にしなければ不可ないよ。それにお前、椅子の隅つこへ座つて居るぢや無いか、だからそんな風に、椅子が一本足で立つたり、そのヴェシエリオの本がお前の膝へ喰へつ付いたりして居るんだよ、もつと樂にお座り。椅子を四本足で立たして、本をテーブルの上へ置いて、ね。』

彼女は笑つて私の言ふ通りにした。

私は彼女を見詰めた。と、突然彼女は叫び出した、

『まあ、來て御覽。此の衣裳の綺麗なこと！』それはヴェニス總督夫人のであつて、

『何て上品でせう！ その生命の一つへ何と立派な思想かんがへを與へて居るのでせう！ あゝ、私言はねばなりませんわ——私贅澤品を崇拜しますわ！』

『そんな考へを口に出して言ふものぢやありませんよ、お嬢さん、』と女校長が言つた、その小さな、形のまとまらない鼻を書物から上げた。

『然し、あれは非常に無邪氣な言葉だつたんです。』と私は答へた。『華やかな人には、華やかなものを愛するのが自然でもあり、又生れ付きなのですからね。』

小さい、形のまとまらない鼻は再び下がつた。

『フレフェール先生も贅澤がお好きなのよ。』ジャーンは言つて、『あの方は、ランプの傘や紙飾りの切抜きをなさつたわ。それは儉約の贅澤品ですけれど、贅澤品は矢ツ張り贅澤品ですわねえ。』

私達はヴェニスの話題に歸つて居つたので、今や此の、縫箔のしない寛袍を装ふた一人の羅馬の貴族夫人と知己にならうとして居つたが、丁度その時私は呼鈴の鳴るのを聞いた。誰かバスケットを携へた行人商人だらうと、私は考へた。所が書籍の都の扉が開いた、そして……所で、シルヴェストル・ボナール、今少し前あなたは、あなたの *Protégé* (被保護人) の美しさを、眼鏡の蔭にある年寄りの衰へた眼よりも、もつと外の眼に見せてやりたいものだとお考へになりましたね。あな の御希望は最も意外な方法で満たされましたよ、そして一つの聲があなたに對して叫びます、丁度輕卒なテシユースに對するやうに。

大意——『心せよ我が君！ 峻嚴なる天汝の祈りを聞きて思ひのまゝに汝を憎惡すること無きよう。』

心せよ！ 天が我等の生費を受けて怒ること屢々なり、又其の賜物が時に我等の罪に對する刑罰なることあり。」

書籍の都の扉が明いたと思ふと、テレーズに案内されて一人の美貌の青年が現はれた。あの善良な年寄りの人だけが、何ういふ風に人々のために扉を開くか、又後で何ういふ風に閉めるかといふことを知つて居る。だが彼女は、待合室とか應接室とかに必要な氣轉といふやうなものは少しも念頭に置いてゐない。何かの告知をするとか、誰かを待たして置くとかいふことは彼女の天性に無いのである。彼女は人々を玄關へ追ひ出すか、或は只諸君の頭上に投げつけるか、どちらかである。

斯ういふ風で、此の美貌の青年は既に闖の内側へ顯はれたのである。だから私は、實際此の少女を直ぐに引張つて行つて、祕密の寶のやうに隣室へ隠すことも出来なかつた。

私は彼自身辯明するのを待つて居る。彼は些の當惑も無しにそれを成す。だが彼は既に、尙ほも机に凭れかゝつてヴェシエリオの本に見入つて居る若い娘を觀取したらしいのである。私が此の青年を見るなり、以前何處かで見たことのある青年だ、で無ければ自分は非常な誤解をしてゐるに違ひないといふ氣がした。彼の名はゲリスである。此れは何處かで耳にした名前だ——だが

何處でだつたか想ひ出せない。何は兎もあれ、ゲリス君は(ゲリスが此處に居るからには)立派な青年だ。彼は、Ecole des Chartres(註、古典學校)の第三學年で、此の十五ヶ月か十八ヶ月の間は卒業論文に没頭して居つたこと、その論題は、千七百年に於けるベネディクト僧院の状態といふのもあることを私に話す。彼は私の、「僧院」に就ての著作を漸つと讀了した所であるが、第一に私の助言が無くては其の論文を十分に完結させることが出来ず、第二には私の所蔵して居る寫本が無ければ不完全たるを免れないのである、而も是れは、『一六八三年より一〇七四年までのシトックス僧院の報告録』に外ならないのであつた。

斯ういふ風に彼自身を説明してから、彼は、私の同僚の最も著名な一人の署名ある紹介狀を私に手渡した。

宜なる哉！ 今私は彼が誰だか分る！ ゲリス君は去年あの胡桃の樹の下で、馬鹿と呼んだあの同一青年なのだ！ そして私は其の紹介狀を開封して居る間に胸の内ですう考へた。

『あゝ！ 不運な若者よ、僕が君の言つたことを洩れ聞いたなどと云ふことを、夢にも君は思つてゐまい、又君が此の僕を何う思つて居るかといふことは能く分つて居るのだよ、——少くともあ日の僕のことを何う思つてゐたか能く分つて居るのだが、君は然うとも知らないで居る。何

しろ若い者は非常に氣まぐれだから！ 今僕は君を掴まへたのだ、君を！ 君は獅子の巢窟へ落ち込んだのだ。だが實際、餘り突然なので、吃驚した老獅はその獲物を何うしたらいゝのか知らない。だが待て、老いたる獅子よ！ 馬鹿けたことをしてはならない！ お前が馬鹿だったといふことが有り得ようか？ 今馬鹿で無いならあの時も馬鹿で無かつたのだ！ お前がマルゲリットの銅像の麓でゲリス君の言ふことを聽いて居つたのが馬鹿だった。お前が彼の言つたことを聽いて了つたのが二重に馬鹿だった。又決して聽かなかつた方がすつとまじだつたといふことを忘れなかつたのが三重の馬鹿だったのだ。

斯ういふ風に老いたる獅子を罵つてから、私は彼に温順さを示すように命じた。彼は非常に謙す必要があるように見えなかつた。そして漸次上氣嫌になつて來たよめに、ワツと大きな笑ひ聲を立てることか、自分を抑制するのに多少の困難を感じた程であつた。私が此の同僚の手紙を讀んで居つた讀み具合から推して、人は私を、彼のアルフワベツトを知らない人間と思つたに違ひない。私はそれを讀むのに永い間かゝつたのだ。又ゲリス君は異なつた事情の下で非常な退屈を覺えたかも知れなかつた。だが彼はジャーソンと見詰め乍ら、模範的な忍耐を以て此の試鍊を我慢して居つた。ジャーソンは時々私達の方を振り向いた。そうだ、お前は、一人の人間が全然身動も

せずじつとして居れる。は思へなかつたのだ、さうだらう？ マドマゼル・プレールは彼女の髪を梳いて居つた。そして彼女の胸は小さい溜息のために時々脹れてゐた。それは、私自分が時々是等の溜息によつて尊敬を拂はれて居つたことを示して居るかも知れない。

「君」と、私は手紙を封筒に納めた時呼びかけた。僕は、君に對して何かの役に立つことを非常に幸福に思ふ。君は、僕がいつも非常に愉快な興味を有つて居る所の穿鑿に没頭して居る。僕は自分の力で以て其の仕事を見てやつたのだ。君の知つての通り——いや君の知ることの出來よりも一層能く——僕は、其等の遺物が如何に役立つたといふことを知つて居る。君の要求して居る寫本は、君の自由に委さう。君はそれを自家へ持つて歸つてもいい、だがね、それは決して小ほけな寫本とは違ふよ、又心配なことは——」

『あゝ、先生、』ゲリスは言つた。「大部な本には、僕決して驚かないんです。」

私は彼に、暫く待つてゐてくれるように頼んで、その記録を取りに隣室へ行つた。所が最初何しても其れを見付けることが出來なかつた、そして殆どそれを捜すのを諦めた位であつた。何故なら私は、或る眼印によつて、テレザが此の部屋を一々整理して居つたといふことを悟つたからである。だがその記録は恐ろしく大きい上に非常に重いものであつた故に、幸ひなことには、

デレーズが其れを、無論自分の思つた所へ置くことが出来なかに違ひないのだ。私は辛うじて其れを自分で持ち上げた。私は、其れが自分の望むことの出来た程の重さがあつたのを知つて、悦びを感じた。

「待ら給へよ、君、」と、非常に諷刺的であつたに違ひないやうな微笑を浮べ乍ら彼は獨語した。「待ら給へ！ 今僕は、最初は君の兩腕を折り、次に君の頭を打破るやうな或る物を君に遣らうと思つて居るのだからね。これがシルヴェストル・ボナールの最初の復讐なのだ。外にどんなことが仕出かされるか、今に分るだらう。」

私が書籍の都へ引返した時、ゲリス君とジャン嬢とが何か頻りに喋つて居るのを聞いた——まあ何うしたと云ふのだらう！ 二人は宛ら、世界中の最も善良な友達のやうに、俱に喋つて居るのだ。禮節に溢れてゐるマドマゼル・ブレフェールは何一つ口を利かなかつたが、他の二人は小鳥のやうに喋つて居つたのである。一體何のことを？ それはヴェネチヤ派の畫家の使つて居る金色に就てであつた！ 然り、『ヴェネチヤ金』に就て。あのゲリスの小蛇は、其の染色の秘訣をジャンに教へて居つたのだ——ティティアンやヴェロネスの畫く女性が最良の典據に則つて自分の髪を染める所のあの繪具の秘訣を。又、ジャン嬢は、蜂密の金色と黄金の金色とに就ての意

見を極めて巧みに表白して居つた。私は、此の二人が相俱に書物の上へのさばり屈んで居るといふこと、又彼等が、私達が今少し前に眺めて居つたあの總督夫人か、或は誰か他のヴェニス族夫人を稱賛して居つたといふことには、ヴェシエリオのあの悪人が責任を負ふべきであるといふことを知つた。

だが氣に懸けるな！ 私は大きな古本を提げて行つた。ゲリスが濟まし込んだ顔をしようとして居つたのを考へ乍ら、それは赤帽にでも頼めば運さうな程大きなもので、それを持上げるために私の腕はすっかり痛んで了つた。然し青年は宛ら鳥の羽毛のやうに其れを受取つて、微笑し乍ら手から下ろした。やがて彼は、私の好きな一種の簡潔法で私に感謝の言葉を述べ、又彼が私の勧告を必要として居つたことを私の記憶に留めさせ、それから、その内に私と會ふ約束を決め乍ら、想像し得る程度の最も完全な沈着を以て私達にお辭儀をした後で、出て行つた。

「どうもあの青年は賤けが良さうだ。」と私は言つた。

ジャンはヴェシエリオの本を、もう二三頁繰つて、そして何とも返事しなかつた。

「あは！」と私は胸の中で考へた。……やがて私達はセント・クロードへ出立した。

(九月—十二月)

相次いで此の老人の家へ訪ねて来るようになった規則が、其後私をして、ブレフエール嬢に對して多大の感謝を感じしむるに至つた。そして彼女は遂に、書籍の都の一隅を占領する権利を得て了つた。此頃では、彼女は、『私の椅子』とか、『私の足臺』とか、『私の格子棚』などいふ言葉を使つて居る。彼女の格子棚といふのは、實際は小さい棚であつて、當然『三鞭酒の詩人達』に屬するものであるが、彼女は自分の仕事袋を藏ふ場所を得るために其等を追出したのであつた。彼女は非常に愛嬌のある婦人である。だから彼女を好かない私は正に一個のモンスターで無ければならない。私は只彼女を忍び得るのみである——最も嚴密な言葉の意味に於て。だが、ジャンンのためとあれば、誰しも忍じ得ないものが無いであらう。彼女の容姿は書籍の都へ一種の魅力を與へる、そして彼女が行つて了つた後でも依然として其れが飛び廻つて居るやうに思はれる。彼女は極めて無智である、けれども彼女は非常に可愛らしく生れつい。居る故に、若し何か美しいものを彼女に見せるようなことがあると、何時も私は、嘗て一度も實際それを見たことが無いやうな氣がして驚嘆させられる、又其れを私に見せてゐるのが自分では無くて彼女だといふ氣が

するのである。私は彼女を自分の思想に従はしめることが到底不可能であることを悟つた、けれども、時としては、彼女自身の氣まぐれなデリケートな行爲を眺めることに私は悦びを見出した。

私よりも實際的な人は、恐らく彼女を有用な人間にするように教育するであらう。だが然し、可憐である。いふ素質は人生の有用なものでは無いが、美しくないにも拘らず、彼女は魅了する。此の魅力こそは、詰り、靴下を繕ふ才能と全く同じ程の價値を、恐らく有つて居るのだ。且又私は不死のものでは無い。随つて、自分の公證人(メイトル・モーシエでは無い)が、私がその少し前に自署した特別な書類を彼女に讀き聞かす時分までは、彼女は可成りのお婆さんになつて了つて居るか何うかを私は疑ふ。

私は、私自身以外の誰かが彼女に支給したり、結婚持參金を彼女に與へたりすることを望まない。けれども私は金持では無い、又父の遺産は私の手の中で決して殖えなかつた。人は古書籍を塾讀することによつて金錢を積むものでは無い。然し私の藏書は——さうした貴重な商品が今日踏んで居る値段で——幾何かの價値がある。然うだ、あの棚には、銀行家が帝王と値段を競合ふに違ひないやうな十六世紀の詩人のものが幾らかある！ 又、クロード女王の御使用になつてゐる

た是の *Tree's Piece* を見落すことあらうとも、シモン・ヴオストルの是等の「*Heures*」こそは、シルヴェストルの邸に於て容易に見通すべからざるものであらうと、私は考へる、私は此の書籍の都に群がつて居る是等の稀代の珍らしい刊本類を蒐集したり保存したりするのに大なる苦痛を嘗めて来た。又久しい間私は其等のものが、私の生活にとつては、空氣や光りと同じやうに必要なものであると信じて来たのだ。私は其等のものを非常に愛して来た、そして今日でさへ、それらに對して微笑したり、それらを抱へたりすることを禁じ難いのである。其等のモロッコ革の装釘は私の眼に如何に喜ばしくあることよ！ 又其等の犢皮の紙片の、如何に柔かき手觸りよ！ 其等の書籍の中には、何か特別な價值によつて、名譽ある人の賞讃を博するに足らないものは只の一冊も無い。若しも他の所有者が、正しい方法で其等を如何に考察すべきかを知るようなことがあつたら何うであらう？ 又今一人の所有者が不注意のために其等を腐蝕したるまゝ棄て、置いたことが出来ようか？ あの比ぶるものなき「*Histoire de l'abbaye de Saint-Germain des Prés*」の一卷がある——が、その人の手中に落ちるのであらうか？……マスター・ボナール、お前は老耄した愚

者だ！ お前の家事管理婦——哀れな者よ！——は儂麻質斯の無慈悲な襲撃に逢つて寢臺の上に釘付けにされて居る。ジャーンは附添婦人と一緒に来る筈である、それにお前は、如何に彼等を歓迎しようかなど、考へもせず、何千といふ馬鹿なことを考へて居る。シルヴェストル・ボナールお前は此の世で何事にも成功することは無からう、然しこんな風にお前に話しかけて居るのはお前自身なのだよ！

斯う云つて居る瞬間に、私は彼等を窓から見とめた。彼等は乗合馬車から出る所である。ジャーンは小猫のやうに跳び下りる。けれどもマダムゼル・プレフェールは、宛ら破船後に甦生したヴァージニヤ人のやうな羞かしげな愛嬌を以て、馭者の強い腕に身を委して居る、そして此度は救助されることを全然諦めて居る。ジャーンは見上げて私を見る、そして笑ふ。所がマダムゼル・プレフェールは、ジャーンが私の方へ、友人の合圖のやうに蝙蝠傘を振り廻すのを妨害しなければならぬ。其處にはジャーンが曾て一度も連れられたことの無い一種の文明の舞臺がある。あなたは若し欲するならば、凡ゆる技藝を彼女に教へ込んで宜しい（私が今斯う言つて居るのは、マダムゼル・プレフェールに限つて言つて居るのでは無い。けれども完全な所作を彼女に教へることとは到底不可能であらう。チャーミングな娘として、彼女は、自分のチャーミングであるといふ

間違を彼女獨特の方法に於て成すのである。私のやうな年寄りの馬鹿者だけが彼女の悪戯を許すことが出来たのだ。若い馬鹿者は何うかといふに——又さうした人は今尙五六人は居るのであるが、彼等が果して其れを何う考へるだらうかといふことは私には分らない。又彼等の考へさうなことは私の仕事に對しては何物でも無い。人道を驅けて居る彼女を一寸見るが、外套にくるまつて、帽子は頭の後ろへ斜めに被り、そして滿艦飾をした帆船のやうに、羽毛を風にひらひらさせて居るでは無いか！ まことに彼女は美しい帆船を想はせるやうな均衡と運動との美を有つて居る——實際、私がハーバーに居つた時、或る日見た帆船が今に忘れずに居るのだ……だが我が友ボナール、お前の家事管理婦が病床に居ること、そのためにお前が自分で行つて扉口を明けねばならないといふことを、一體幾度言ふ必要があるのだ？

開けよ、『冬』の老人！ 呼鈴を鳴らして居るのは『春』だ。

それはジャーンである。——ジャーンは薔薇のやうに、一面に眞赤になつて居る。怒り乍ら呼吸を切らして居るマドマゼル・プレフェールは、到着して我が玄關へ攀ぢ上ほることに對して今一つの全身の恐怖を有つて居る。

私は、家事管理婦の容體を説明して、我々がレストランで飯を食べることにしようとして申出た。

所がテレーズは——まだ全然元氣で、病床に臥せつて居るにも拘らず——我々が好まうと好むまいと、家で飯を食べることに決定した。彼女の意見では、身分の高い人達は決して料理店で食事したことが無いといふのである。而已ならず、彼女は凡ての必要な手筈を決めて、門番の女が料理をすることになつた。

大膽なジャーンは、年寄りの女が何か欲したか何うかを見に行くように主張した。然し多分諸君が想像したであらう通り、簡単な命令で應接室へ送り返へされた。尤も私が想つてゐた程冷酷にはなかつた。

『若し私が誰かに何かしてほしいことがあつたら、あなたよりもずっと優しくも美しくも無い人呼びますから』とテレーズは答へた、『私の望むのは休眠でございますよ。然し是れは *Moulin à Indigo Isuri Tu Bouche* の表號のある縁日には賣つてゐない商品です。さあ、彼方へ行らしてお遊びなされ、こんな所に在らつしやらずに。——年寄りが傳染るかも知れませんよ。』

ジャーンは、家事管理婦の言つたことを我々に話した後で、年寄りのテレーズの話聞くのが大變好きだといふことを附加へた。そのためにマドマゼル・プレフェールは、さうした貴婦人らしくない嗜好を口にしたといふので彼女を咎めた。

私はモリエールの例を引いて彼女を辯護しようとして試みた。所が丁度此の瞬間に、梯子に昇つて本を取出して居つた彼女は偶と柵の一行を全部引操り覆した。重苦しい響が起つた、そしてマドマゼル・ブレフエールは、無論デリケートな人であつたために、殆ど氣絶しさうになつた。ジャン・ンは、突嗟に、其等の書物に續いて梯子の根へ降りて來た。彼女は、一匹の仔猫が一人の女に變形して、其れが、古本に變形した二十日鼠を捕へてゐるやうな感じをさせた。其等を拾ひ上げてゐる時、彼女は偶然面白さうな本を見出した。そして踵で躡み乍ら其れを読み初めた。其れは、『プリンス・グレノーイユ』だと彼女は私達に言つた。マドマゼル・ブレフエールは、ジャンが詩に對して殆ど趣味を有つてゐないことに嘆息を洩らす必要が生じた。ジャン・ド・アークの死を歌つたカシミア・ド・ラヴィグネの詩を誤り無しに、彼女に暗誦せしめることは迎も不可能であつた『小さき叛虐者』といふのを覚えることが出來たのは、せいよくであつた。誰でも、デュベリエールに與へたスタンザ(四行一節の詩)を暗記する前に『プリンス・グレノーイユ』を讀まうとするのは無理であると女校長は考へて居つた。で、感激に我れを忘れて、彼女は、羊の鳴聲よりも甘い聲で、其等を暗誦し初めた。

デュベリエよ、御身の悲しみは永遠のものとはならん

然して父の友愛が御身の心に置くところの

悲しき物語は

その悲しみを常に大いなるものとはなさむ

.....

御身は、彼の幼年時代が

如何に魅力に満ちたりしかを知る

然して御身——人をそしる友よ——は

彼の侮蔑を以て御身の苦しみを慰めんとはせざりき

やがて恍惚として彼女は叫んだ、——

『あゝ、何て美しいんでせう！ 何といふ調和ハモニーでせう！ こんな美妙的な、こんなタッチングな詩は誰だつて讚美しないわけにはまゐりませんわねえ！ 所であのマレルブが、自分の娘の死といふやうな事で厳しく試めされて居るやうな場合に、何故哀れなムシユー・デエベリエMusieu de Eberieux』をなどと言つたんでせうね？ *Tu n'as ami*——あなたが此の言葉が大變無情なものだといふことを御諒解なさらねばなりませんわ。』

彼は、それ程まで彼女を驚愕せしめた所の『Injurieur ami』なる一句が同格法であるといふやうなことを話して、此の詩上の人物を辯護した。けれども私の言つたことが、彼女の頭を清めることに始ど役立たなかつたと見え、彼女は酷い長らしい嘘の發作に襲はれた。やがて「プリン・ス・グレンノーイユ」の史實が極めて滑稽なものに歸したことが明かになつた。と云ふのは、ジャンが其處の毛氈の上に蹲み乍ら、猛烈な笑ひの發作が今にも破裂しさうなのを怵へて居つたのであつた。然し彼女が此の物語の王と王妃及び多數の子供達を讀み終へた時、非常に哀願的な表情を現はした。そして、白いエプロンを掛けて、臺所へ行つて、食事の仕度の手助けをさせてほしいといふことを熱心に私に頼むのであつた。

「ジャン」と私は、師の嚴肅さを以て答へた。「無論、お皿を破つたり、お茶碗の縁を缺いた人、鍋を凹ましたり、杓を皆毀して了つたりするのは問題であるにしても、テレーズがらやんと人に呟付けて臺所で働かして居るんだからね、手助けが無くとも其の内には仕事が済ませるだらうよ、斯う言つてる間にも、あの臺所で物凄く音が聞えるやうな氣がするからね。だが、兎も角も、ジャン、お前には、食後の菓子準備する義務を命じるとしよ。さあ、行つてお前の白いエプロンを取つてお出で。俺が結んで上げるからな。」

で私は、亞麻のエプロンを彼女の胸の周りに、勿體振つて結び付けた。と、彼女は臺所へ驅込んで行つて——後で解つたことだが——其處で彼女は、ヴァーテルにも知らてゐない、又「凡そ美術の數に五つあり。繪畫、音樂、詩、彫刻、建築、即ち是れなり——就中最も主要なる科目を菓子なりとす」といふやうな言葉で *Les beaux arts* に就ての議論を初めたあの偉大な、カレームにさへ知られてゐないやうな、色々の料理を支度し初めた。だが私は此の小さな準備を悦ぶ理由を有してゐなかつた——何故なら、マドマゼル・プレフェールは、私を只二人きりになつたのを知つて、何だか私を恐るべき不安で満ちたやうな態度を現はし初めたからである。彼女は、涙と熱情とを一ぱい湛へた眼で私を見据へた、そして大きな溜息を吐いた。

「お、わたし本當にあなたをおの毒に思ひますわ！」彼女は言ふ、あなたのやうな方が——あなたのやうな秀れた方が——下等な召使と二人きりで暮らさねばならないとはねえ！（あの女は確かに下等ですものね、争ひ難い事實ですわ）。さうした生活は、ほんとに残忍なものに違ひありませんわ！ あなたに必要なのは平和です——樂しみと、世話と、凡ての種類注意とが、あなたに缺けて居るのですわ。で無ければ御病氣になりますわ。貴方のお名を肩書にしたり、貴方と御一緒に暮らすことを名譽と思はない女は一人もございませんわ。いえ、一人もございません、わ

たしの胸が然う申して居ります。

かう言つて彼女は、何時でも飛び去る用意をして居る彼女の胸を兩の手で壓へた。

私は殆ど困迷しさうになつた。私はマドマゼル・ブレフェールに對して、斯様に年を取つてしまつたからには自分の慣習を今更變更する意思が少しも無いといふことや、又私の性格と境遇が命じた此の生活の中で、出来るだけの幸福を見出して居るといふことを、彼女に理解せしめようと試みた。

『いえ、あなたは幸福ではございません!』と彼は叫んだ。『あなたは何時もお傍に、あなたを理解することの出来る人をお置きになる必要がございますわ。あなたの専門の方の色々の關係といふものは、一番廣い性質のものでございますわ、それから又あなたはチャールミングなお友達をお有ちにならねばなりませんものね。社交界へお顔を出さずに學士會の會員になるわけには参りませんわ。ねえ、篤と比較なさつて御判断なさいまし。物の解る女の人で、手をあなたに拒むような人は一人もございませんわ。わたし、女ですからね、先生。わたしの本性は決してわたしを欺きませんわ——あなたは屹度、結婚の中に幸福を見出しなされるに違ひありませんわ。さう斷言する或物が私の中に居りますわ。女といふものは非常に敬虔です、非常に愛情に富んで居ります

(勿論全部の女といふ譯ではありません部分的ですが) それに又、女といふものは、光榮に對して非常に敏感とですわ。あなたのやうな御年齢になると、誰しも、エディボスのやうに、一人のエゲリアが無ければ不可ないといふことを、忘れてはなりませんからね! あなたの料理番は、殆どもう力が無くなつて居ります——それに豊です、病身です。萬一、夜分、あなたの上に何事か起るようはことがございましたら! おゝ! そのことを考へただけでも身慄ひせずには居られませんか!』

斯う言つて、彼女は實際に身慄ひした——ちつと眼を閉ぢ、手を握りしめて、床の上に突立つてゐた。偉大なものは私の恐愕であつた。

恐るべき強い語調で彼女は再び初めた。

『あなたの御健康!——あなたの尊とい御健康! 學士會々員の健康! 一人の學者、一人の文學者、一人の貴といお方、の生命を保護するために、私の血の最後の一滴を流すことが出来ましたら、どんなにお嬉しいこととせう。それ程のことが出来ない女なら、わたし其の女を輕蔑しますわ! お聞き下さいまし、先生——わたしの知つて居ります方に立派な數學者の奥さんがございますの。その數學者と申しますは、いつも全く白紙の本を計算で充たして居りましたね——

白紙の本は、家ぢうの棚といふ棚を全部埋める程澤山あつたのでございます。その方は心臓病を患つてお出でとしてね、眼に見えて寒れて行かれたのでございます。で私その方の奥さんにお目にかゝりましたが、全く落着き拂つて、ちつと御主人の傍に坐つてお出でされたの？ わたし迎も堪りませんでした。或る日奥さんに、わたし斯う申しましたの『ねえ、奥さん、あなた心臓をお有ちぢや無いのですか？ わたし若しあなたの立場でしたら斯うしますわ……斯うしますわ……でも何うするのか私には分りませんわ？』つて。』

彼女は呼吸を次ぐために中止した。私の立場は恐るべきものであつた。彼女の勸言に就て眞に私の考へてゐたことを、マドマゼル・ブレフェールに話すといふことは——私が夢にさへ敢て爲さうと思ふことの出来なかつた或物であつた。何故なら彼女と喧嘩するといふことは、ジャーンに會ふ機会を失ふことだつたからである。そこで私は、靜かに事件を考察しようと決心した。何れにしても彼女は私の家に居る、と云ふ此の考へが、私に加勢して、或種の慇懃さを以て彼女を待遇させるようにした。

『私は非常に年を取つて居ります、マドマゼル、』私は彼女に答へた。『ですから、あなたの御忠告が私の生涯に來たのが、多少遅過ぎたのを、非常に遺憾に思ひますよ。然し其のことは、考へ

て見ませう。その間に何卒、氣を落着けて下さいまし。砂糖水を一杯如何でせう、御氣分が良くなると思ひますが！』

實に不思議にも、此の數語が、直ぐ彼女を冷靜にさせて了つた。見ると彼女は、彼女の隅で彼女の格子棚の近くの彼女の椅子に腰をかけて、足を彼女の足臺に乗せ乍ら、非常に靜かに坐つて居るのであつた。

食事は全然失敗であつた。默想に耽つてゐるらしく見えたマドマゼル・ブレフェールは、此のことに少しも氣が付かなかつた。通例私は、さうした不仕合せに就ては極めて敏感である。けれども今度のことはジャーンを殊の外悦ばせたので、終には私自身も其れを悦ばすには居られなくなつて了つた。こんな老人になつてゐてさへ、私は、片側が生で片側が焼いた鶏肉といふものは滑稽なものであるといふことを、これまで一度も聞いたことが無かつたが、ジャーンが、わつと笑ひ出したので私は然うであることを知つた。此のチキンが何千といふ諧謔を私に語らしめたがそれは今臆えてゐない。又私は、其れが正當に料理されたので無かつたことを嬉しく思つた。ジャーンは再びそれを烙るために元へ返した。それから其れを煮た。それから又其れをバターで以てスチューにした。それがテーブルの所へ運ばれる毎に、前よりも一層食べられなくなるにも拘ら

ず一層愉快なものになるのであつた。到頭皆んなで其れを食べた、所が其れは、何處の料理にも名前の無いようなものになつて了つてゐた。

巴旦杏の菓子フルシグは遙かに非凡であつた。是れは鍋に入つたまゝ食卓へ運ばれた。逆も鍋から出せなかつたからであつた。私はジャーンを當惑させようと思つて、それを碎くために私達皆んなに手を貸してくれるようにジャーンを呼んだ。所が彼女は鍋を碎いて、破片を一つどゞ私達に分けて呉れた。私のやうな老人が然うした物を食べる事が出来たといふようなことは、只極めて粗笨な人へののみ考へられることであつた。急に夢想から醒めたマドマゼル・ブレフェールは、腹立たしさうに此の土器の甘い破片を押しつけた、そして彼女自身が菓子を拵へるのが非常に上手であるといふことを私に告白する絶好の機会が來たと考へた。

『まあ！』ジャーンは、全然悪意を混へない驚きの色を示し乍ら、叫んだ。

それから彼女は、鍋の破片を全部紙に包んだ。これは彼女の小さい遊び友達——殊に生れ付き暴食の癖のある三人のモートンの娘達——に與へる目的であつた。

然し私は、人知れず非常な不安を感じ初めて居つた。彼女の結婚の妄想が、こんな風に爆發して以來、マドマゼル・ブレフェールと是れ以上親密を續けることが、到底不可能のやうに思はれ

た。斯うしてあの婦人は行つて了つた。左様ならジャーン！ 私は此の美しいものが外套を忙しさうに着て居つた間に、ジャーンに本當の年齢を訊く好機會を捉へることが出来た。彼女は十八歳一ヶ月であつた。私は自分の指で算へて見て、もう二年十一ヶ月しないと成年に達しないのを知つた。だが此の年月の間私達は何ういふ風にやつて行けるだらう？

ドアの所でマドマゼル・ブレフェールは、非常に多くの意味を含めて私の手を握りしめた。そのために私は、全く頭から足まで慄へた位であつた。

『左様なら、』私は非常に嚴かに娘に向つて言つた、『だが一寸私の言ふことをお聞き。お前のお友達がこんなお爺さんだからな、若し此のお爺さんを一番必要と思つてゐたら、多分當てが外づれかも知れない。お前が、自分自身に對する本分を誤らないことを俺に約束してお呉れ、そして俺は一つも心配が無いのだからな。御機嫌よう、私の娘！』

彼等の後ろからドアを閉めた後、私は、去り行く彼女を最後に今一度見ようと思つて、窓を明けた。然し夜は暖かつた、私は只、朦朧たる二つの影が埠頭を靜かに横切りつゝあるのを見るこゝとが出来たゞけであつた。私は、廣漠たる都會の底力ある唸り聲が、私の周圍に立ち昇りつゝあるのを聞いた、そして急に自分の氣持が非常に沈んだのを感じた。

憐れな子よ！

(十二月十五日)

シユールの國王は黄金のコップを有つて居つた。其れは彼の妻が死ぬ時、形見として彼に遺したものであつた。彼自身が將に死にさうになつた時、最後に其のコップから飲んだ後で、それを海に投じた。今私は此の追憶の日記を、丁度あの海洋の老國王が、彫刻したコップを保存したやうに保存して居る。私は又、遂に彼が愛の器物を投げ棄てたやうに、私の此の記念の書冊を焼くであらう。私が此の貧しい一生の記録を焼くであらうといふのは決して傲慢な貪婪からでも無ければ、主我主義者の自尊心からでも無い——只私は、自分にとつてなつかしく神聖である其等の事柄が、私の非藝術的な表現の故を以て、他の人には陳腐のものに見えたり滑稽なものに見えたりしないかを惧れるからである。

私は決して、次に起るであらうことを虞つて斯う言ふのでは無い。マドマゼル・ブレフェールから飯に招かれて行つた時、此の恐ろしい人の右側にあつた安樂椅子（實際それは安樂椅子であ

つた）に私が腰かけたといふのは、慥かに不自然であつたに違ひない。テーブルは狭い應接室に据へられて居つた。で私は、外觀の見窄らしい容子から推して、女校長が此の地上を飛翹して居るあの天上の靈魂の一つに違ひないといふことを知ることが出来た。缺けた皿、不揃ひのコップ柄の弛んだナイフ、尖きの黄色くなつたフォーク——實際、正直な人の食慾を害するやうなものは絶対に一つも無かつた。

メイトル・モーシエも招かれて來てゐたけれども、食事が私のために——只私一人のために——調理されたものであることを、私は確認した。マドマゼル・ブレフェールは、私がバタに就てはサルマチャ人の（今の波蘭人）嗜好を有つてゐると想像したに違ひなかつた。何故なら彼女が私に侷めたバタは、小さな薄つぺらな塊に拵へて、極めて悪臭の強いものだつたから。

燻肉は私を毒しようとするばかりであつた。けれども私は、メイトル・モーシエとマドマゼル・ブレフェールとが道德に就て語つて居るのを聞くのが愉快であつた。私は「愉快」と言つた——けれども私は「慚愧」と言はねばならない筈である。何故なら彼等の現はした感情なるものは、私の粗野な性質の圏外へ遙か飛翹して居つたからである。

彼等の話したことが、獣身が彼等の日々のバンであり、自己犠牲が彼等の存在に對して空氣や

水よりも必要であることを、私に立證した。私は食べてゐなかつたのを見て、マデマゼル・プレフェールは、私の「遠慮」を稱するのには彼女が充分好都合であつたことを制しようとして、有りと在ゆる努力を試みた。ジャーンは仲間に加はつてゐなかつた。私の聞いたのでは、彼女が此の席に出るといふことは規則に反することでもあり、又他の生徒達の感情を害する——（彼等の間では一種の平等が保たれる必要があつた）——ことになるからであつた。私は秘かに彼女に祝意を述べた——メロヴィンヂヤ人のバタから遁れ出したことに對して。遺骨箱のやうに空ッほな大きな大根から遁れ出したことに對して。革のやうな烙肉から遁れたことに對して。それから又私が其れに對して彼女への愛を暴露した所の、色々の他の珍らしい食物から遁れたことに對して。

極端に陰氣な顔の女中が何かの飲料を侷めた。それに對して彼等はクリームといふ名前を附けてゐるが——何故さう言ふのか私には分らない——やがて女中は亡靈のやうに姿を消した。

やがてマドマゼル・プレフェールは、異常な感激に我れを忘れて、書籍の都で、あの家事管理婦が病床に臥せつてゐた間に私に對して語つたことを、メイトル・モーシエに凡て委しく話した。學士會々員に對する尊敬、病身で獨りほつちの私を見ることの心配、或は又、どんな惻口な女でも私と生活を共にすることを誇りにし幸福を感じるであらうといふ確信など——彼女は何一つ隠

す所が無かつた。却つて其の反對に、多くの新らしい馬鹿けたことを附加へて話すのであつた。メイトル・モーシエは胡桃を噛み割り乍ら、絶えず叩頭つづいて同意を表してゐた。やがて此の駄辯が済むと、彼は嬉しさうに微笑し乍ら、私の答へは何うであつたかを催促した。

マドマゼル・プレフェールは片手を自分の胸に當て、片手を私の方へ伸ばして、斯う叫んだ、

『あの方は、ほんとに深切な、ほんとに秀れた、ほんとに善良な、又ほんとに偉大な方ですわ！あの方は斯うお答へになりましたの……でも私どうしても、わたしほんの詰らない女ですものね——どうしても、學士會の會員の言葉を繰返すことが出来ませんわ。わたし只、そのお話の要點が言へるだけですわ。あの方はね、斯うお答へになりましたの、成る程、あなたの仰有ることが能く分ります——成る程』つて。』

斯う言ふと同時に、彼女は手を伸ばして私の片手を捉へた。此の時、メイトル・モーシエも感激に我れを忘れて、起つて今一方の私の手を捉へた。

『先生、』彼は言つた、『何卒私に、お慶びの言葉を申し上げさせて下さい。』

私が恐怖を知つたことは一生の中に數度あつた。だが是れ程不快な氣持を起させる恐怖は未だ曾て一度も經驗したことが無かつた。嘔吐を催するよゝな恐れが私に襲ひかゝつて來た。

私は両手を振り放した、そして、私の言葉に出来るだけの眞卒さを與へるようと、其の場に突立つて、斯う言つた。

『マダム、あなたが私の家へ在らつしやつた時私は非常に不完全に自分を説明したか、或は此のあなたのお宅で全然あなたを誤解したか、どちらかです、然し何れにしても、決定的な辯明は絶対に必要ですから、何卒今それを、非常に明白にさせて下さい。いや——私はあなたを理解したことが一度も無かつたのです。若し眞にあなたが其れを計畫なさつて居つたものとすれば——私に對して計畫なさつて居つた此の結婚計畫の性質といふものは、全然私の知らないことです。兎も角、結婚などは私の思ひもよらぬことですからね。此の年齢でそんなことをすれば、許し難い愚擧なわけです。又、今此の瞬間でさへ、あなたのやうな物の分つた方が何うして私に結婚を勤めることが出来たのか、私には何うも合點が行かないのです。實際私は、屹度自分が思ひ違ひをして居つたのだ、そんなことをあなたが以前仰つたことな、か無いのだと、固く信じて居るのです。後の場合で何卒年寄りをお許し下さい、社會の慣習には全く疎く、貴婦人の會話には不慣れで、又自分の思ひ違ひを非常に悔んで居るのですから。』

メイトル・モーシエは非常に靜かに自分の席へ引返した。そこには嚙ぢるべき胡桃が無かつた

ので、彼はコルクを小刀で切り初めた。

マドマゼル・ブレフェールは其の小さい、丸い、冷然たる眼に、私が曾て見たことの無い表情を湛へて、暫く私を見つめた後で、突然いつもの美しさと優しさとを取返した。やがて彼女は蜜のやうに甘い調子で叫び出した。

『まあ！ あの學者達！——あの研究家達！ あの人は皆赤ん坊みたいですよ。然うでもボナール先生、あなたは本當の赤ん坊よ！』

それから公證人の方へ向き直つて、哀願するやうな調子で叫んだが、彼は依然としてコルクの上へ鼻を持つて行き乍ら隅つこの方で非常に靜かに坐つてゐた。

『お、あの方をお咎めては不可せんわ！ あの方を責めては不可せんわ！ 後生ですから、あの方に悪い所があるなど、思はないで頂戴！ そんなことを些とでも思つては不可せんわ！ わたし跪いてお願しなければならぬでせうか？』

然し、メイトル・モーシエは彼のコルクの表面を四方八方から吟味しつゞけてゐたゞけで、何等それ以上の表情を現はさなかつた。

私は非常に腹立たしかつた。若し私が、自分の顔から發散する熱を感じたことによつて判断す

ることが出来たならば、私の兩の頬は極度に赤くなつてゐたに違ひないと思ふ。私が、耳の中でブン／＼云つてゐた唸り聲を通して聞いた次の言葉の意味を、解することの出来ないのも恐らく其のためである。

『わたし、あの方にはほんとに驚きましたわ！ お氣の毒なお友達ね！……モーシエさん、済みませんけれど窓を明けて頂戴！ うさぎ／＼の壓したのが、幾らかあの方の役に立つようと思はれますから。』

私は、言ふべからざる恥づかしさを感じ乍ら往來へ飛び出した。

『哀れな、私のジャー！』

(十二月二十日)

私は、ブレフェール家に就て其れ以上のことを何一つ聞かずに、八日間を過ごした。そのために、最早クレマンティンの娘の消息を少しも耳にせずにはぢつとして居られない氣がした、且又、もつと重要な理由無しには決して學校への訪問を中絶しないと云ふことを、義務の如く我身に感じ

初めたので、私はオークス・ターネスへ向けて發足した。

應接室は、以前よりも一層冷たく、一層濕々として、又一層殺風景で狡猾に見えた。召使の女も遙かに無口で物々しかつた。私はジャー嬢に面會したい旨を通じた。所が、豈圖らんや、可成りの時間が経つてから、姿を現したのはマドマゼル・ブレフェールであつた——嚴めしい、蒼白い顔をして、唇を引緊め、眼には冷酷な表情を湛へてゐた。

『ムツシエ、彼女は頸卷の上に腕を組み合せて言ふ、『大變お氣の毒でございますが、今日はフレキサンダーさんに面會をお許し出来ないのでございます。多分駄目かと思はれますので。』

『何故駄目でせう？』私は吃驚して訊いた。

『ムシユー、彼女は答へた、『今後餘り度々訪問して下さいに御願ひ致しますのは、全く餘儀無い次第でございますね、その理山といふのが、非常にデリケートな性質のものなのです。何卒、こんな事を申上げる不愉快をお察し下さいまし。』

『マダム、私は答へた、『私はジャーの後見人から、その子に毎日面會してもいゝといふ許可を得て居つたのですよ。あなたがモーシエ氏の意志に反對なさつて居りますが、何卒その理由を私にお話し下さいませんか？』

『アレキサンダー嬢の後見人は』と彼女は答へた（そして、強固な柱に縋るやうに、彼女は此の「後見人」といふ言葉に嚙りついた）『あなたの懇ろな御注意が一日も早く無くなればいゝといふことを、私が望んで居るのと同じ程熱心に希望してゐられるのでございます。』

『では、若しそれが事實とすれば、』と私は言つた、『恐入りますが、その理由と、それからあなた御自身の理由といふものをお聞かせ願へませんか。』

彼女は、天井の小さい螺旋形の紙を見上げた、それから恐ろしく平靜に斯う答へた、

『飽くまでそれを仰有るのですね？ では、こんなことをお話致しますのは、女の身としては大變苦痛でございませうけれど、あなたの御熱心に對して申上げませう。此の家はね、貴方、非常な名譽ある家でございましてね。わたし責任を引受けて居るのでございます。わたしが、一人々々の生徒を、母親のやうに注意しなければならぬのです。ですからアレキサンダー嬢に就てあなたが懇ろに御注意なさるといふことは、結局あの若い娘さん自身に非常な弊害を及ぼさず済まないだらうと思ふのでございます。ですから、其れの無くなるのを主張するのは、私の義務でございませう。』

『あなたの仰有ることが、何うも合點が参りませんね、』と私は答へた——そして私は、明らさ

まな眞實を話した。やがて彼女は落着き拂つて再び初めた、

『此の家に對するあなたの御注意といふものは、直ぐお終ひになるといふことが能く分つて居るのです、私が義務を感じて居りましたるやうな風に、此の學校の利益を、アレキサンダー嬢の利益とを兩方共思つて居られるやうな、最も尊敬すべき人達や、少しも猜疑心の無い人達から見ますれば、ね。』

『マダム、』私は呼んだ、『私は、一生の間に随分、澤山な馬鹿けたことを聞いたことがあります、今あなたの仰有つたやうな、そんな馬鹿なことを聞いたのが初めてです！』

すると彼女は極めて平靜に答へた、

『あなたの侮蔑の言葉は、私には些とも應へませんよ。何かを仕遂ける義務を感じて居る者は、凡てを忍ぶだけの勇氣を有つて居りますからね。』

かう言つて彼女は、再び胸の上の襟巻を押へた——恐らく此の場合、あの寛大な心を抑制するのでは無くて、無論それを慰撫するかのやうに。

『マダム、』と、私は彼女に對して指を振り乍ら言つた、『あなたは、理由も無く、老人の憤怒を激昂させましたね。もつと善良におなりなさい、そして少くとも此の老人に、あなたの存在を忘

れさせることの出来るような態度で振舞はれたら何うです、もう是れ以上の侮辱を加へるのはお止しなさい、既にあなたの唇から確かめて居るのですから、私は飽くまでアレキサンダー嬢に注意を拂ふといふことを、あなたに對して明白に警告します。又、あなたが若し、何等かの手段で何かの害をあの娘に加へようとなさることがあつたら、當然あなたが後悔なさる時が来るに違ひないとふことをい！

私が激すれば激する程彼女は冷靜になつて行つた。そして極度の冷淡な調子で彼女は斯く答へた、

『ムシユ、わたくしは、貴方が此の娘に對して抱いてゐられる興味の性質に就ては解り過ぎる程解つて居るのですよ。今貴方がわたくしを嚇かし付けた其の御注意から、早速あの娘を惹出さうとなさらないといふことを、ね、現在貴方が家事管理婦と御一緒に生活なさつてゐらつしやる其の曖昧な親密より以上のことを知りましたからには、私は直ぐ、貴方が無邪氣な子供に逢ふことが全然出来ないやうに處置しなければならなかつたのです。屹度將來はさうする積りです。若し今まで私が信實過ぎますならば、其れを以て私をお咎めになるのは、アレキサンダー嬢のためであつたためでは無いのです。でもあの娘は餘りに無邪氣で、餘り純粹ですからね——これは私

のお蔭です！——貴方があの娘を引入れようとしてゐらつしやる其の危険の性質を些とも疑はずに居りました。ですから、貴方がわたくしを、さうした趣旨である娘を教育する必要の下に置かうとなさるのが一向思ひも寄らぬことなのです。』

『さア、我が哀れな老ボナール、私は肩を聳やかし乍ら自分に言つた——『だからお前は、意地の悪い女といふものはどんなものかといふことを、確實に、初めて知るが爲めに、こんなに永生きしなければならなかつたのだ。此の問題に對するお前の智識は、今初めて完全になつたのだ。』私は答へもせずに出て行つた。そして、女校長の顔に漲つた突然の紅潮から推して、私の沈黙が言葉以上に彼女の感情を害したのを知り、痛快を禁じ得なかつた。

中庭を横切つた時、私はジャーンを探すために、凡ゆる周圍を隈なく見廻した。彼女は私を注視してゐた、そして私の方へ驅けて來た。

『若し誰かとお前の頭の、小さい髪一本にでも觸つたらね、ジャーン、私に手紙をお寄こし！左様なら！』

『いゝえ、左様ならぢや無いわ。』

私は答へた、

「よし、いや——左様ならちや無いんだ！　ね、手紙をお寄越し！」

私は其の足でガブリー夫人の邸へ向つた。

「奥さまは、旦那さまと御一緒に羅馬に在られますが、貴方は御存じなかつたのですか？」
「いや、知らなかつた。私は答へた、『奥さんからお手紙を貰つて……』」

實際、夫人が、出發のことで手紙を私に呉れたのは事實であつた。だが私の頭は非常に混亂して了つてゐたに違ひないのだ。そのために全部そのことを忘れて了つたのだつた。下男も同一意見を抱いてゐたと見えて、『ボナール先生耄碌してお出るナ』と言ひたさうな風に私を眺め——又階段の手欄から覗き込むやうにして、若し私が階段を降りて了ふ前に何か途方も無いことを仕出かさないだらうかを見てゐた位であつた。だが私は全く合理的に階段を降りたので、彼は失望して頭を引込めた。

家へ歸ると、ゲリス君が應接室で待つてゐるとのことであつた。(此の青年は常時の客になつてゐた。彼の批評眼は時々錯誤するけれども、その精神は決して凡庸では無い。)然し今度に限つて彼のいつもの悦ばしい來訪が、只管私を當惑せしめた。「嗚呼！」と私は胸の中で考へた、『今日は

此の青年に對して、何か非常に馬鹿けたことを、確かに言ひさうだ。そして此の青年も亦、私の能力が段々減少して來てゐると考へるだらう。にも拘らず私は、最初結婚を求められ、次いで、全然道徳を缺いた男のやうに罵詈したといふこと——テレーズでさへも疑念の對象に成つたといふこと——それから又、ジャーンが此の地球の表面で、最も悪黨の女の勢力内に居残つて居るといふことを、正直に彼に説明することが出来ないのだ。確かに私は、悪戯氣の青年とシステルシアン派(註、聖バーナードの保護を受
けしベネチクト教團の一分派)の僧院に就て語り合ふのには申分の無い氣持に居るのだ。だが、私達は會ふだらう——私達は試みるであらう……』

だがテレーズは私を阻止した。

『先生様は、まあ何と赤い顔をしてお出ですこと！』と、彼女は咎めるやうな調子で言つた。

『何しろ春だからね。』私は答へた。

すると彼女は叫んだ。

『春ですつて！——師走の月に？』

それは事實だ！　十二月なのだ。あゝ！　私の頭は何うかしたのか？　可愛さうなジャーンの所へ行くのには何と恰好の救ひだらう！

「テレーズ、僕の杖を取つてお出で。それからね、若し能きるなら、何處か僕が再た見出せるような場所へ其れを置いといて呉れるように。」

『今日は、ゲリス君。ご機嫌は何うだね？』

(日附無し)

翌朝此の老爺は、床から起き出ようと思つた。だが何うしても起きることが出来なかつた。無情な、見えざる手が彼を引止めてベッドの上に臥させた。自分が其處へ身動きもならぬやうに釘付けにされてゐるのを知つて、彼はちつと不動の姿勢を保つべく觀念した。だが彼の想念は走馬燈のやうに廻轉しつゞけてゐた。

彼は非常に烈しい熱を發してゐた筈である。何故なら、マドマゼル・ブレフエールとか、聖ゼルマン・ド・ブリーの僧院とか、ガブリー夫人の下僕とか、雑多な幻像となつて彼の前に現はれたから。その下僕の姿が彼の頭の上に、殊更氣味悪く引延ばされて、宛ら大伽藍の怪物のやうに輝いて居つた。又私の寢室の中には、非常に大勢の人、恐ろしく大勢の人が居つたやうに、私に

は思へた。

此の私の寢室は、凡て古風に則つて造作されて居るのである。制服に身を包んだ私の父の肖像と、カシミヤの着物を着た母の肖像とが、壁に懸つて居る。壁紙は一面に、緑の葉の模様で蔽はれて居る。私は、斯うしたことは皆承知してゐる。又凡てのものが色褪せて居り、非常に殺風景になつて居ることさへ知つて居る。だが老人の居間は華麗であることを要しないのだ。清潔でありさへすれば充分なのだ。テレーズもさう思つて居るらしい。兎も角も私の部屋は、私のやうな、いつも幾分か子供らしさと夢想とを抱いてゐる心を悦ばすやうに充分裝飾されて居るのである。

凡て私の空想を充たしたり私を悦ばしたりするやうな物は、壁にも懸つて居れば、テーブルや棚に散らかつたりして居る。所が、今日に限つて、凡ての其等の物が急に何か良からぬ考へを私に對して抱いたかのやうに見えるのである。ノートル・ダム・ド・ブローの三神徳(註、望、仁を言ふ)の一つを象どつたあの小型像も、いつもは其の在りの儘の状態に於て極めて素樸な優雅さを示して居るのであるが、それが今濫面を作つて私に向つて舌を出して居るのである。又、あの美しい小畫像——其れには、ジャン・フォーカー(註、佛蘭西の畫家、一四一五—一四八三年)の温順な弟子の一人が、聖フランシスの後嗣者の腰帶を締めて、跪付き乍ら彼の本を善良なデューク・ド・アンゴラムに對して捧呈

してゐる所を自畫像に描いてあるのであるが——それも枠の中から引出されて、その跡へ大きな醜い猫の頭部が入替へられ、それが燐光を發する眼で私を睨んで居るでは無いか？ 又、壁紙の圖案も見て頭に——厭はしい頭に變じて了つた。……だが、違ふ——あの壁紙には、丁度二十年前にあつたと同じき葉の圖案が描いてあるに違ひないと私は信じる。又他の何物でも無いといふことを。……だが再た、さうぢや無い——前の方が正しかつたのだ——あれは皆頭なのだ、眼も鼻も口もある頭なのだ——其等は頭なのだ……嗚呼！ 解つた！ あれは皆、頭であると同時に葉の圖案なのだ。私は其等を全然見ずに濟むことが出来たらと思ふ。

それから又、あそこの、私の右手にあるフランシス派の僧の美しい小畫像が、再び私の念頭に浮んで來た。けれども只私が、莫大な意志の努力によつて辛うじて其れを枠の中に保つてゐるやうなものであつて、若し私が疲れた曉には、例の醜い猫の首が其の跡へ現はれさうに思へるのであつた。確かに私は精神が錯亂してゐない。その證據には、私のベッドの脚の所に立つて居るレースを非常に明瞭に見ることも出来るし、私に話掛けて居る彼女の聲を充分能く聞分けることも出来るのである。又若し私が、自分の周囲の種々な對象物を、強いて其の本來の形状のまゝに保たうとすることに多忙でさへ無かつたならば、全然満足するように彼女に對して返答も出來た

であらう。

そこへ醫者がやつて來る。私は彼を招いた覚えは無い、けれども彼に會ふと悦びを感じる。彼は私の老隣人である。私は此の人に對して餘り役に立つたことが無いのであるが、私は非常に此の人が好きである。たとひ私が餘り色々のことを彼に語らなくとも、少くとも私は凡ゆる自分の才能を占有して居る、そして今日は自分が素晴しく伶俐になつて觀察して居るのを知つて居るのである。何故なら私は、彼の身振りとか、容子とか、顔の微細な皺とかを認めて居るでは無いか。然し又此の醫者は非常に狡猾であるために、果して彼が、私を何う思つて居るかといふことは、私には全く解らない。ゲーテの深遠な思想が不意に私の想念に浮んだ、そして私は叫んだ。

『先生、此の親爺は、病人になつてもいふことを自身に同意して了つたですよ。然し、少くとも今度だけは、自然に對して其れ以上の讓歩しようとは思つてゐませんがね。』

だか、醫者もレースも、此の私の些細な戯談に對して笑はうとはしない。察するに彼等は其の意味を了解し得ないのである。

醫者は行つて了ふ。夜が來る。すると凡ゆる種類の不可思議な影が、私のベッドの戸帷の周圍に、交々形こくくを成したり解體したりして出現し初める。と思ふと、他の影——亡靈——が私の前

へ群れを成して押寄せ、そして其等を通して私は、忠實な家事管理婦の平然たる顔を見ること
が出来ると、突然一つの叫聲が私の耳を劈く。——金切聲の、大きな苦悶の叫びである。私を
呼びかけたのはお前だったのかい、ジャーメン？
日は終る。そして凡ての影が私のベッドの側に現はれて、永い夜通しを私と共に過ごすのであ
る。

やがて朝が来る——私は、平和が私の身の周りを取巻いて居るのを感じる。宏大な平和が。
尊とき我が神、あなたは私を、あなたの休息の中にお惹入れ下さるのですか？

(千八百六十一年、二月)

醫者は極めて快活である。私が床から起き出れることによつて、彼に非常な面目を施したやう
に見えるのである。若し私か彼を信用しなければならぬのなら、無数の疾病が早速私の貧弱な
老體に跳びついて來たに違ひないのだ。

普通の人間を戰慄せしむる其等の疾病は、言語學者を戰慄せしめるやうな名稱を有つて居る。

何れも半分は希臘語 半分は羅典語の合成語であつて、語尾には、炎症の症狀を示す所の「*itis*」と
か、疼痛を現はす「*algia*」とかを有つて居るのである。醫者は其の名前を全部私に語ると同時に、
其等の厭ふべき性質の特性を表はして居る所の、「*itis*」で終つて居る其れに相當した數多の形容詞
を擧げた、要するに其等は、バンドラの玉手箱(註、ガユヒターが美女)に入つてゐた所の、あの最
も完全な醫學辭書の、確かに半分は言ひ盡して居る。

『ねえ先生！ あのバンドラの話は、實に秀れたコンモン・センスな物語ぢやありませんか
ね！ 若し私が詩人だったら、あれを佛蘭西の詩に書い見るのですがね。さあ握手しませう、
先生！ 私の生命を取りとめて下さつたのは貴方です、そのために貴方を許しますよ。貴方は私
を、私の友達の所へ引戻して呉れたのです、そのために感謝せずには居られないのです。貴方は私
私が實に丈夫だと仰有いましたね。或は然うかも知れませんが、或は、けれども私は非常に永い年
月を生きて來たのです。私は非常に古ぼけた家具ですよ。私の親父の肱掛椅子とは、實に申分の
無い比べものかも知れませんが、その肱掛椅子といふのはあの善良な人が相續したものでしてね。
いつもあの人は朝から晩まで凭れかゝつてゐたものでした。私がほんの子供の時分、一日に二十
遍位は、其の古風な椅子の片肱へ攀ち上ほつて腰かけたものです。その椅子がね、手も付けられ

ずにあつた間は、誰もそんなものに特別な注意を拂ふものも無かつたのですが、それが一本足で
跛びこ曳ひきく歩あき初はめる時分になると、家族が皆、それが非常に良い椅子だつたと言ひ出したので
す。其後それが三本足の跛びこになり、次には四番目の足でキー／＼鳴り出し、其次には兩腕の殆ど
半分程失くしてしまひましたがね、さうなると云ふと皆が口を揃へて、「まあ何て丈夫な椅子だら
う！」と叫ぶやうな始末です。そして、肱掛が擦り切れ、脚が斜めに叩き出されて了つても、依
然として其れが判然と椅子の形を保ち、相變らず直立不動の姿勢を保ち、且又、尙ほ何かの役
に立ち得るのを見て、彼等は皆不思議がりました。遂々馬の毛がその胴體からはみ出して來たの
で、すつか、其れが駄目になつて了ひました。所が、下男のシブリエンが、その不具になつた四肢を
薪にするために鋸で挽いた時に、皆が口を揃へて賞讃の叫びを繰返へしました。「おゝ！ 實に卓
れた——實に不思議な椅子ぢやないか！ 是れは、乾物商人のビエール・シルヴエストル・ボナ
ルの椅子だつたし——それから、其の息子のエベミネード・ボナルの椅子だつたし——又、ピ
ルロン派の哲學者で第三海軍區の長官ジャン・パブティスト・ボナルの椅子だつた。おゝ、何と
丈夫な重寶な椅子だつたらう！」と云つてね。實際其れは死んだ椅子だつたのです。いや、先生
私は詰りその椅子なのです。私が、澤山な人を殺して來た病氣に抵抗することが出來たといふの

で、貴方は私を頑丈だと思つてお出でです、私は只、四分の三だけしか殺されなかつたのですか
らね。いや、實に感謝します！ けれども私といふ人間は、手當の施しようも無い程駄目になつ
た或物のやうな氣がします。』

醫師は、大層な希臘語や羅典語の助けを藉りて、私が實際非常に順調になつて居るといふこと
を立證しようとした。無論、佛蘭西語のやうな明瞭な言語で、斯うした種類の論證を試みることは
何等の効用が無いに違ひない。だが私は遂に、私を説き伏せることを彼に許した。やがて私は
彼が扉口の方へ行くのを見た。

『まあ、良かつた！ 良かつた！』とテレーズは叫んだ。『お醫者を家から追出すには實にいゝ
方法です！ こんな風な事を二度三度おやりになると、もう二度とあなたに會ひに來ませんよ
——さうなると一層宜しいけれどねえ！』

『よし／＼、テレーズ、だが僕は二度とこんな丈夫な人間になつたからには、僕の手紙を私に
呉れることを、拒んでは不可ないよ、彼處に大きな手紙の束があるに違ひないと、僕は思つて居
る、だから既う、其れらを私に讀ますまいとするのは、實に良くないことだ。』
テレーズは、何か少し許りぶつ／＼言つてから、手紙を私に呉れた。だが、一體何うしたのだ

らう？——私は「ヴェシエリオ」の頁を繰り乍ら一々封筒を見て行つた、所が、今此處で見るこ
とが出来からと、非常に期待して居つた子供の手蹟で宛名の書かれたのが、一つも見當らないの
だ。私を手紙の束を皆押しやつた。其等は既う私には何等の興味が無かつた。

(四月一六月)

それは烈しく口論した揚句の約束であつた。

『お待ちなすつて下さい、先生様、わたし直ぐさつぱりした物と着替へますよ。』テレーズは叫
んだ。『そして今度も貴方様のお供致しますよ。此の二三日の間然うして居りましたやうに、貴方
様の疊椅子を提げて行つて、何處か日當りのいゝ處で腰掛けることに致しませう。』

テレーズは眞に私を病身と思つて居るのである、私が病氣して居つたのは事實である、けれど
も凡てのものには結末があるのでは無いか！ マラデー夫人の此世を去つたのは、ほんの少しの
前である、又色の青白い快活な顔をした彼女の召使、ダムコンブレシエンスが、懇懇に私に向つ
て左線ならと言つたのは、三月つぎ以上も前のことになる。若し私が家事管理婦の言ふことを聞いた

のは、私は正真正銘のムシユー・アルガンドになつて、死ぬまで、リボンの附いた寝帽を彼つてゐ
るようなことになるだらう。……そんな事は堪らない！——私は一人で出掛けようと思ふ！
だがテレーズはそんなことに耳を藉さないだらう。彼女は私の疊椅子を持つて行く、そして私に
随いて行かうと思つて居るのだ。

『テレーズ、若しお前さうしたいのなら、明日ベティ・プロヴンスの土塀の、日當りのいゝ側へ
椅子を提げて行つて、お前の好きなだけ其處に居ることにしようぢや無いか。だが今日は、僕は
非常に大事な用事があつて、是非その方へ行かねばならないのだ。』

『それは、尙更結構です！ でも貴方の御用事といふのは、此の世で只一つしかない用事とい
ふわけでは無いのでせうに。』

私は懇願し、叱責する。私は逃げ出す。

愉快な日である、馬車の助けと、神の救ひによつて、私は自分の目的を達することが出来る
と信じる。

彼處には大きな藍色の文字で「ヴァイルジニー・プレフェール嬢に依つて監理さるる令嬢等の寄宿
舎」と書かれた壁がある。其處には、若し聞いて居りさへすれば自由に中庭へ入ることの出来る

鐵の門がある。だが錠前は錆びついて居る。又あの可愛らしい子供達——無論マドマゼル・ブレフェールが、謹慎と、眞摯、正義と、無私とを教へ込んで居る子供達——を、不注意な監視から保護する棒材の後ろには、亞鉛板が張られてある。彼處に窓が一つある。窓の前には鐵棒があり、硝子には白ペンキが塗つてある——此の湯殿の窓は、さながら凝視してゐる眼のやうで——此の建物の内部の世界に開いてゐる唯一の孔である。家の扉口はと言へば、幾度も私が其處から入つて行つたのだが、今は、丁度私が最後に見た時と同じく、小さな鐵格子の潜り門の附いたまゝ、永久に私に對して閉ぢられて居るのだ。又その前方にある只一つの石の階段は、甚しく毀れてゐる、そして、眼鏡の後ろに餘り良い眼を有つてゐないにも拘らず、私は、その石の上に、出つ入りつする少女達の靴の鉾のために小さな白い疵痕の附いてゐるのを見ることが出来る。だが一体、私は何故入つて行けないのか？ 私は、定めしジャンが此の陰鬱な家の中で非常に苦しんでゐるに違ひないと思ふ。又彼女は、人知れず私の名を呼んでゐるやうな氣がする。私は此の門から立去ることは到底出来ない！ 不可思議な不安が私を襲ふて来る。私は呼鈴を曳く恐々とした召使が扉の所く来る。私が最終に見た時よりも遙かにおづ／＼した容子である。斷乎たる命令が下された。私がジャン嬢に面會することを許されないのだ。私は召使に對して、娘が何うして

ゐるか教へて呉れるように嘆願する。女中は、右を見、それから左を見た後で、ジャン嬢が達者であることを私に告げ、それから私の面前で扉を閉めて了ふ。斯うして私は、再び往來で只獨り居る。

それから私が、あの壁の下の同じ道を、幾度往復し、あの小さい門の前を何遍通り過ぎたことであらう！——自分といふ人間が、あの哀れな、此の世で私以外に救ひも無ければ友達も無いあの哀れな子供よりも、遙かに頼り無い者であることを知つて、私は耻づかしさと絶望とに充たされて居つた！

最後に私は、メイトル・モーシエを訪ねようと思つて、充分自分の嫌惡の情を抑へた。先づ最初に私の注目したのは、彼の事務所が、去年よりも今年の方が、一層埃だらけで、又遙かに古ぼけてゐることであつた。暫くすると當の公證人は、いつもの四角張つた態度をして姿を現はした。彼の落着きの無い眼は、眼鏡の後ろで慄えてゐた。私は彼に不平を並べた。彼は答へた。……だが一体何が爲めに私は、自分が焼くつもりの白紙の本の中にさへ、一個の悪人の回想を書き附けようとするのだらう？ 彼はマドマゼル・ブレフェールの味方をする。彼女の惻口な智力と非難無き性格とを、彼は長々と賞讃したことがある。彼は目下論議されて居る問題の性質を決定す

べき立場に居ることを、自分で感じてゐないのだ。だが彼は、諸種の情況が私に不利であることを確言しなければならぬ。私にとつては、其れは少しも異論の無いことなのだ。彼は附加へて言ふ——(而も是れは私にとつては多少の異論無きを得ない)——即ち、彼の被後見人の教育費に充てるために渡されて居つた少額の金は既に費消されて了つたこと、又、色々の事情から見て、マドマゼル・ブレフェールが自分の許へジャーシ嬢を預つて置くことに同意して居るといふ其の公平無私を大いに賞讃せず居れないといふのである。

壯麗な光り、過去の日の光りが、恒久腐敗せざる急流を以て此の汚れたる土地に溢れ、あの男の身體を照らして居るのだ!

又、外部に於て其れは、人口稠密な地方の哀れな者達の上に、その光輝を隈なく注いで居る。けに美はしき哉その光——此の光りこそは永い間私の眼を満たして居つたものである、而も久しからずして私は、永久に其れを享樂することを止さねはならないのだ! 私は、兩手を後で組んで、空想しながら、防壁の線を傳つてさまよふ、そして何うしても知らず、寸時の間に、見窄らしい小庭園ばかりの變な町はづれに自分自身を發見する。埃だらけの道端に、一本の植物があつて、眞つ黒であると共に極めて美麗な其の花は、死者のために最も嚴肅な、又最も純粹な哀

愁と統付ける價值があるやうに見える。それはおだまき草なのだ。我々の教父達が「*Notre Dame*」——「聖母の手袋」と呼んだものである。斯くの如く、幼なき者達に現はれるために實にくゞ小さく出来てゐたかも知れない然うした「聖母」のみが、あの花の狭い果皮の中へその優美な指を入れることが出来たのだ。

又彼處には、亂暴にも花の中へ押し入らうとする大きな花蜂が居る。だが彼の口は其の花密に届かない、そして此の哀れな貪慾者は無益にも筋力を重ねる。彼は其の試みを中絶した、全部花紛に塗れ乍ら花から出て行かなければならぬ。彼は獨特の重苦しい風をして飛び去る。だが此の郊外地方には餘り花は澤山無く、何れも工場の煤のために穢れて了つて居る。そこで彼は父もや例のおだまき草の所へ引返して来る。そして今度は花冠を刺し通して、彼の作つた穴から密を啜るのである。私は、花蜂が其れほどまでの本能を有つてゐようとは、想ひも寄らないことだつた! いや、全く是れは賞讃に値する! 私が彼等を見れば見る程、昆虫や花が私を驚嘆で満たすのだ。私は丁度、悦びの餘り彼の桃の木の花の上を矢鱈に歩いたといふあの善良なローランのやうである。私は、願はくは美しい花園を有つて、森のほとりに住むことが出来たらと思ふ。

(八月―九月)

或る日曜の朝、私は偶然の機會で、マドマゼル・ブレフェールの生徒達が教區の教會へ彌撒に行くために、列を組んで學校から出て行くのを、稍暫し注視して居た。私は、彼等が二列になつて行進して行くのを見てゐた。――最初小さい者達が何れも非常に眞卒な顔をして行く。その中に三人だけ、全然同じ服装をしたのか居つた――でぶくくと太つて、背が低く、勿體振つた顔付をした子供である。私は、其れがモートンの女生徒であることを直ぐ感知した。彼等の姉といふのは、あの恐ろしいサビン國王タチユースの首を描いた藝術家である。縦列の側には、助教師が、手に祈禱者を提げて、身振りをしたり眉を擡めたりして居つた。それから、二番目に年取つた級が來た、最後に大きな娘達が來て、お互に小聲で話し合ひ乍ら通つて行つた。だが私はジャーンの姿を見なかつたのだ。

私は警察本部へ行つて、ドムール街にあるあの學校のことに就て何か聞及んで居ることは無いか何うかを訊ねた。私はやつと説き伏せて、幾人かの女檢閲官を其處へ派遣して貰ふことにした。其の人達は、學校に就ての最も適宜な報導を齎らして歸つた。其の人達の意見によると、ブレフ

エールの學校はモデル學校だつたのだ。だから若し私が無理にも調査して居つたならば、確かにマドマゼル・ブレフェールはアカデミー賞を得たであらう。

(十月三日)

此の木曜日は幸ひ學校の休日だつたので、私はドムール街の附近で三人のモートンの娘に會ふ機會を得た。彼女達の母親にお辭儀してから、私は、十歳位に見える一番上の娘に、その娘の遊ぶ友達のジャーン・アレキサンダー嬢が何うしてゐるかを訊いた。

モートンの娘は、一と息に斯う答へた。

『ジャーン・アレキサンダーさんは私のお友達ではございませんの。あの人は只お慈悲で學校に置いて貰つてゐるんですからね――皆さんはあの人に教室の掃除をさせますの。先生が然う仰つてますわ。それに、ジャーン・アレキサンダーさんは不良少女ですから、暗室に入れられて錠を下ろされますの――それは報るといふものですわ――でもわたし良い子ですもの――暗室へ拘留されたりなんか決してありませんわ。』

三人の少女は元の如く歩き続けた。モートン夫人は其の後ろへ接近して随いて歩るき乍ら、非常に疑り深い眼をして、巾廣に肩越しに私を振り返つて見てゐた。

嗚呼！ 私は、訝しい性質の手段に自分が迫られて居るのを知つた。ガブリー夫人は、直ぐと言つても少くとも今三月は、巴里へ歸らないだらう。夫人がゐなければ私は何等の思慮分別もコンモン・センスも有つてゐない——私は、扱ひ難い無細工な、出来損ひの機械に外ならない。だが然し、私は、ジャーンを寄宿學校の下女にする彼等を、斷然許すことは出来ない。

(十二月二十八日)

ジャーンが無理強いに部室の掃除をさせられて居るといふ思想が、絶対に我慢のならないものになつた。

暗い冷たい日であつた。夜は早くも初まつてゐた。決意の人の如き平静さを以て私は學校の扉の呼鈴を鳴らした。怖々した女中が扉を開けた瞬間に、私は彼女の手へ金貨を一つ投げ入れた、そして若し、アレキサダー嬢に會へるようになつて呉れさへすれば、今一個やると言ふ約束をした。

た。

彼女の答へは斯うであつた、

『今から一時間の内に、格子窓の所で。』

斯う言つて私の眼の前で扉をビシヤリと閉めたが、それが非常に亂暴だつたので、彼女は私の帽子を小溝に叩き落とした。私は、非常に永い一時間を、烈しい吹雪の中で待つてゐた、それから私は窓に近寄つて、何も無い！ 風は狂ひ、雪は烈しく降つてゐた。労働者等は仕事道具を擔いで通り過ぎる、それが、顔に當たる雪を防ぐために俯向いて居るので、強く私に突當つた。まだ何事も無い、私は感付かれたのぢや無いかと心配し初めた。私は女中を買収したのが悪るかつたことを知つて居る、けれども些とも其のことを後悔してゐない。嗚呼、必要な場合に社會制度を切抜ける術を知らない此の男に災禍あれ！

尙十五分間が経過した、何事も無い。

遂に窓が少し開いた。

『貴方ですか、ボナール先生ですか？』

『お前かい、ジャーン？——さあ直ぐと言つてお呉れ、お前が何うなつたか。』

『達者ですわ——大變達者ですわ。』

『だが、もつと外のことを！』

『私ね、臺所へ廻されましたの、又教室の掃除もしなければなりませんの。』

『臺所へ！ その上掃除だつて——お前が！ 噫！』

『ええ、だつて爺見人が、もう私の授業料を拂つて呉れないんですもの。』

『嗚呼！ お前の後見人は、何うも全くの悪黨らしいね。』

『では先生は御存じで——』

『何を？』

『おえ、そのことは訊かないで頂戴！——でもわたし只一人で二度とあの人の傍に居る位なら死ぬ方がましですわ。』

『でも、一體何故手紙を寄こさなかつたの？』

『監督されてゐたのですもの。』

此の瞬間、私は、世界中の何物も其れを翻へすべく勸めることの出来ない決意を固めた。實を言へば私の抱いた考へは、法律違反の行爲かも知れなかつたのだ。だが私は、其の考に就て些の

懸念も抱かなかつた。且又、固く決心したゝめに、私は慎重であることが出来た。驚くべき冷靜を以て私は行動した。

『ジャー、私は訊いた、『言つてお呉れ！ お前の居る部屋は中庭の方へ開くかい？』

『ええ。』

『お前、自分で其の往來の扉を開けられるかい？』

『ええ、——門衛の室に誰も居なかつたら。』

『ぢや、其處に誰か居るか何うか、行つて見てお出で、誰にも見付からぬ様に氣を附けてね。』
それから私は、扉と窓とを見張り乍ら待つた。

六七秒すると、ジャーは棒杖の後ろへ再び現はれて、言つた、

『門衛室に女中が居りますの。』

『大變に都合だ、』私は言つた、『お前、ペンとインキを有つてるかい？』

『いゝえ。』

『鉛筆は？』

『はい、持つてますわ。』

『此處へ抛つてお呉れ。』

私はポケットから古新聞を取り出した、そして——往來のラムプを吹き消さんばかりに強く吹いてゐた風の中で、而も私の眼前を見えなくする程の、降りしきる雪の中に立つて——マドマゼル・プレフェールへの其の新聞を包封して、宛名を書くことが出来た。書き乍ら私はジャーンに訊いた。

『郵便屋さんが通る時、新聞や手紙は此の箱へ入れるのだらう？　そして鈴を鳴らして行つて了ふのかい？　それから下女が郵便箱を明けて、マドマゼル・プレフェールに來たものは早速取り出すのだらう？　郵便物が來た時は、大抵そんな風にするのぢや無いの？』

ジャーンは、其の通りだつたと思つた。

『ぢや、今に分るだらう。ジャーン、も一度行つて見張つてお出で。そして、女中が部屋から出たら、早速扉を開けて、私の所へ出て來るのだよ。』

斯う言ひ乍ら、私は新聞を函の中へ入れた、そして烈しく呼鈴を曳いてから、隣り窓の明り取りの中に身を匿した。

物の數分間も其處に居つたかと思ふ時分、小さな扉が揺れたと思ふと、やがて其れが開いた、

そして一人の娘の頭が、其所から現はれ出た。私は其れを掴まへた。そして自分の方へ曳き出した。

「さあお出で、ジャーン、さあ！」

彼女は不安さうに私を瞪めた。定めし彼女は、私が狂人になつたとしても、思つたに違ひなかつた。然し其の反對に、私は實際、極めて理性が明晰であつた。

『さあお出で、吾が子よ！　さあ！』

「何處へ？」

『ガブリーの奥さんの所へだ。』

と、彼女は私の腕を掴まへた。可成りの時間私達は、泥棒の夫婦のやうに走つた。だが驅けるといふことが私のやうな肥えた者には不適當な運動である。で、遂々息が切れさうなのを知つたために、私は立止まつた、そして燒栗商人のストローヴに作られた何かに凭れかゝつた。その商人は酒店の一隅で仕事をしてゐたが、其處には多勢の馭者が頻りに飲んでゐた。その中の一人は、私達に向つて、馬車が要るか何うかを訊いた。何よりも確かに私達は馬車を欲した！　馭者は、亞鉛の勘定臺の上へコップを置いてから、彼の坐席へ攀ち上り、そして馬を前方へ急ぎ立てた。

私達は救はれたのだ。

『チエツ！』斯う呟いで、喘ぎ／＼私は自分の額を拭ふた。寒いにも拘らず私は、甚く汗を掻いて居つたからである。

非常に不思議に思へたのは、ジャーシが、私達の犯した罪に就て、私が意識してゐたよりも遙かに能く意識して居つたことであつた。實際彼女は非常に眞面目に見えた、そして又、明かに憂慮して居つた。

『臺所なんか！』私は憤然として斯う叫んだ。

彼女は、宛らも『さうだ、彼處だつて別の處だつて、私には些とも關はないぢやないか？』とでも言ふやうに、首を振つた。そして街燈の明りで、私は、彼女の顔が著しく瘦せこけて、容姿がすつかり畏縮してゐるのを見し痛ましく思つた。いつも私を非常に悦ばしたあの快活さも、あの晴々した衝動も、あの敏活な表情も、今は少しも彼女の中に見出せなかつた。彼女の凝視は臆病になり、身振りは遠慮勝ちになり、凡ての態度は憂鬱になつて了つてゐた。私は彼女の手を取つた——小さな冷たい手を、それは全然硬くなり、疵だらけになつてゐた。哀れな此の娘は非常に苦しみを受けたに違ひないのだ。私は彼女に訊ねて見た。すると彼女は非常に靜かに、マドマ

ゼル・ブレフェールが或日彼女を前に喚んで、彼女が身に覺えの無い或る理由で、彼女を小さい怪物とか小蝮蛇とか呼んだと言ふのであつた。

彼女は又次の如く附加へた、

『もうお前さんには、ボナールさんに尋はしてあげないから。あの人はお前さんに良くない助言をしたし、又私に大變侮辱的なことをしたんだからね』。そこで私、言つてやりましたの、「先生、そんなことは私には信ぜられません」つて。すると先生はね、私の顔をビシヤリと打つてから、教室へ追ひ返へしましたの。もつ二度と貴方に會はせて頂けないと言はれた時は、何だか自分の上へ夜が降りて來たやうな氣がしましたわ、闇が降りて來るのを見て人が悲しみを感ずるやうな晩のことを、貴方は御存じありませんの？——では、さうした瞬間か、幾週も——幾月も續いた場合を、一寸想像して御覽なさいまし！ 貴方は、私の小さい聖ジョージを臆えてゐらつしやるわね？ その時分まで、私、出來るだけ上手にそれを拵へて居りましたの——只それだけを拵へて、自分を悦ばして居りましたの。所が、貴方に二度とお目にかゝるといふ希望を全然失くして了つた時、私ね、自分の小さな蠟の塑像をとつて、全く別な方法で其れを製作し初めましたの。もう其れ迄やつてゐたやうな木の燐寸で其れをモデルしないで今度は髮針でやり初めること

に致しました。私ね、Gingles & L. neige (斑白の留針) をへ利用致しましたの。……でも Gingles & L. neige 何のことが、多分御承知無いでせうね？ さうよ、恐らく貴方が御想像出来るよりも、づゝと私、そのことに委しくなりましたの。私、聖ジョージのヘルメット帽の上へ龍を一匹置きましてね、その龍の頭や眼や尻尾を拵へるのに、幾時間もくも費りましたの。まあ、その眼！ 取分けその眼と言つたら！ 私ね、其の兩眼か赤い瞳孔や白い眼瞼や、眉や、凡てのものを有つようになるまで、その製作を止めませんでしたの！ わたし、自分の馬鹿なことは分つて居りますわ。私ね、自分の小さい聖ジョージが完成すると直ぐ、自分が死ぬものと思つて居つたのです。休み時間中、私その製作をやりましたし、ブレフェール先生も、いつも私を一人で居させて下さいました。或る日私、あなたが校長先生と應接室にゐらつしやるのを知りました。そして貴方に注意を向けて居りましたの。私達がお互に「左様なら！」と言つたのは、その日でしたの。私、あなたのお顔を拜見して少し慰められました。所がそれから暫らく経ちますと、私の後見人が来て、木曜日には私を連れて行きたいと言ふのです。私その人の家へ行くのを拒絶しましたの。——でも、後生ですから、理由を訊かないで頂戴ね、先生、すると其の人が、全然で静かに、私が大變氣まぐれな娘だと言ひましてね、私を獨りほつちに置き去りに致しました。所

が何うでせう、翌る日になると、ブレフェール先生が私の所へ來ましてね、ほんとに私が恐れをなしたやうな意地の悪い表情を顔に浮べてゐるぢやありませんか。そして、手に一通の手紙を持ちましてね、「マドマゼル」と私に呼びかけました、「あなたの後見人は、あなたのお金を全部費つて了つたと言つて寄越したのです。でも怖々しないがい！ わたしは、あなたを追出さうとは思はない。だからね。然しあなたは、自分の生活費を儲けねばならないと云ふことが唯一の義務だといふことを知らねばなりませんよ。」つてね。それから私に、家の掃除をさせることにしたのです。そして私が間違ひを致しますとね、屹度私を屋根裏へ入れて、幾日も錠を下ろしたまゝ打棄つて置くのです。最後にお目にかゝつてから、私に起つたことは、まあこんなものでございしましたの。若し私、貴方にお手紙を書くことが出来てゐたとしても、果して書いたか何うか分りませんわ。だつて私、貴方が私を學校から連れ出して下さると思はなかつたのですもの。それに又、メイトル・モオシエさんが私に會ひに歸つて來なかつたものですから、別に急ぐことは無かつたのですわ。わたし當分の内、屋根部屋や臺所で待つて居れると思つてゐたのですの。』

『ジャー、私は叫んだ。』たとひ私達がオセアニカへ逃げねばならぬやうなことがあつても、あの憎らしいブレフェールに、決して二度と 前を捕まへさせやしない。儂はその事で大きな誓

ひを立てる！ 又、何故私達がオセアニカへ行つて悪いことがあるものか？ 氣候が申し分無いし、又そこへ行けばピアノもあると云ふことが、いつか新聞に出てゐたつけ。だが兎も角、その内にガブリー夫人のお宅へ行かうぢやないか、幸ひに、三四日前、巴里へお歸りになつたさうだからね。何しろお前も僕も、二人共が無邪氣な阿呆だからね、何うしても誰か助けて呉れる人が要るのだ。』

私が物言つて居つた時でさへ、ジャーンの顔色は急に蒼ざめて、顔死の状態に於て有慄ひして居るやうに見えた。眼は全くどんよりとし、半ば開いた唇は苦痛の表情を表してゐた。やがて其の頭は彼女の肩へ横様に沈んだ。——彼女は喪神したのだつた。

私は彼女を抱上げた、そして、眠つて居る赤ん坊のやうに、ガブリー夫人の宅の階段の上へ彼女を運んで行つた。所が私が、感情の昂奮と疲勞とのために、今にも氣絶しさうになつてゐた時やつと彼女は我れに返つた。

『嗚呼！ 貴方でしたのね、』彼女は言つた。『まあ良かったこと！』
さうしたことが、私達が友達の家と呼鈴を鳴らした時の状態であつた。

同日

八時だつた。ガブリー夫人は、さも驚いたといふやうに、私達の思ひがけない出現を非常に驚愕した。けれど、夫人は、いつもあの美しい居止の中に現はれる悦ばしい深切を以て、此の老人と子供とを歓迎して呉れた。それは私には——若し私が、彼女にとつて珍しからぬ敬虔な言語を使つてもいゝならば、——彼女が手を撫ける度毎に、その間から何か天上の美が溢れ出るかのやうに思へるのであつた。そして彼女の外衣に滲み込んで居る匂ひでさへ、慈悲と善行との美はしい静かな精神を吹き込むが如く見えるのである。彼女が吃驚したのは無論であつた。だが然し彼女は何事をも訊かなかつた。——その沈黙こそは、けにも賞讃すべきものゝやうに私には思へた。

『奥さん、』と私は言つた。『私共二人は、あなたの保護によつて此處まで参りました。で、先づ第一にお願ひしたいのは、何か晚餐をいたゞきたいのです——いや、せめてジャーンだけにでもお與り下さい。先刻も馬車の中で、あの娘は、弱つて氣絶したのですから。所で私ですが、私はそのために、此の遅い時刻に、苦しい一夜を過ごさな以上は一口も食べる事が出来なかつたのです。ガブリーさんは御機嫌宜しいでせうね。』

『お、主人は此處に居りますよ！』彼女は言った。
そして早速彼を呼んだ。

『あつ、やいませよ、ポール——あつして、ボナール先生やアレキサンダー嬢にお會ひな
さるといふわ。』

彼は来た。彼のフランク、巾廣い顔を見たり、丈夫な四角張つた手を握つたりすることは、私
にとつては一つの悦びであつた。やがて私達は、四人が揃つて、食堂へ這入つて行つた。そして
ジャーンのために冷肉が切られてゐた時——だが彼女は決してそれに手を觸れなかつた——私は
自分達の冒険談を試みた。ポール・ド・ガブリーは、一服喫ふべく私に寛恕を乞ふてから、黙つて
私の話に聽入つてゐた。私が話を終へた時、彼は硬張つた顎髯を掻きむしり乍ら、恐ろしい聲で
『Sacrebien !』と言つた。だが、ジャーンが私達の顔を交々見詰め乍ら、吃驚したやうな顔付をし
てゐるのを見て、彼は附加へた。

『また此の事は、明日の朝話すことにしませう。まあ、暫く私の書齋へあつしやい。私は貴
方にお見せしたい古書を一冊有つて居りますが、それに就て、何が貴方の御意見が承りたいので
す。』

私は彼の後に隨いて書齋へ入つて行つた。其處には、幾つもの撒弾銃や狩獵ナイフが黒い戸帷
に懸けられて、ランプの明りで光つてゐた。彼は、革の蔽ひのある長椅子の上へ、彼の隣りへ私
を座らせて、叫んだ。

『貴方は何といふことをなされたのでせう？ 嗚呼！ 貴方は御自分のなされたことを御存じ
ですか？ 少女を墮落せしめたのです、誘拐です、勾引です！ 貴方は自分で罪に落ちたのです！
只あなたは、五年若しくは十年以上の懲役を宣告されるべきことを仕出かしたとけぢやありませ
んか。』

『噫乎！』と私は叫んだ。『一人の無辜の少女を救ひ出したために十年の懲役——』

『それは法律といふものです！』ガブリー氏は答へた。『ねえ、親愛なムシユー・ボナルド、私は
偶と、法典といふものを可成り知るようになりました——それは決して、私が法律を職業として
研究したからでは無くて、ルーアンスの市長として、自分の部下の者に告示することの出来るや
うに、己むを得ず其れに就ての知識を有つようになったのです。モーシエといふ男は悪黨です。
あのブレフェールといふ女は良くないお轉婆です。又貴方は……。いや！ 實際、あなたが何
であるかを充分強く言ひ表はすやうな言葉を、私は見出すことは出来ないのです。』

犬の頸輪とか、乗馬の鞭とか、馬鞍とか、拍車とか、巻煙草の箱とか、二三冊の参考書と云つたやうなもの、雑然と押込まれてゐる本棚を開けてから、彼は一冊の法典を取出して、頁をめくり初めた。

『重罪及び軽罪』……「差押へと公人」——これは貴方の場合ぢや示りません……「未成年者の誘拐」——さあ是れです……「第三五四條」——「凡ソ、詐欺又ハ暴力ニヨリ、一人若シクハ二人以上ノ未成年者ヲ誘拐シ、或ハ誘拐サルベグ導キタル者、又ハ彼等ヲ誘出シ、若シクハ居所ヲ變ゼシメ、或ハ強制的ニ轉居セシメ、又ハ誘出サルベク導キタルモノ、又ハ、彼等ガソノ權力ト監理トニ服従サモラレ若シクハ委託サレタル人ニヨツテ指定サレタル場所ヨリ、彼等ヲ誘出シ若シクハ強制的ニ轉居セシメタル者ハ、禁錮ノ刑ニ處セラルベシ。刑法第二十一條及び二十八條ヲ参照セヨ、」其の第二十一條といふのは是れです——「禁錮刑ハ五年ヨリモ短カラザルベシ。」第二十八條、——「禁錮ノ宣告ハ公民權ノ喪失ヲ含ムモノト知ルベシ。」さあ、是れで凡てのことが非常に明白です、ねえ、さうぢやありませんか、ムシユ・ボナール？』

『さあ、その次ぎです、「第三五六條」——若シ誘拐者が、犯罪ノ當時二十一歳以下ナル場合ハ

單ニ懲戒處分ヲ受クルノミ……然し貴方の爲めに此の法文を適用するわけには行きません。第三五七條、——「若シ其ノ誘拐者が、自己ノ誘拐シタル少女ト結婚シタル場合ハ、民法ニ依レバ只ソノ結婚ノ無効ヲ主張スル權利ヲ有スルガ如キ者ノ申告ニヨツテ起訴サル、ノミ。然ラザレバ彼ハ、結婚ノ無効ガ宣告サレタル以後ニアラザレバ、求刑サル、事無シ。」然し、アレキサンダー嬢と結婚するといふことが、果してあなたの計畫の一部で無いか何うかは私には分らないことです！ それに就ての此の法文が、實に穩健なものだといふことはお分りになるでせうね。それは只一つの逃げ口を貴方に残して居ります。いや然し、——私は決して貴方に冗談口を叩いて居る場合ぢや無いのです、實際あなたは、御自分から非常に不幸な立場にお入りになつたのですからね！ のみならず、此の二十世紀の時代に、而も此の巴里の眞ン中で少女を誘拐して全然無罪に濟むなどは、よもやあなたのやうな方が、お考へにならないでせうからね？ 私達は今決して中世紀に住んで居るのではございません。ですから、さうしたことは最早法律で許されてゐないのです。』

『誘拐が昔しの法典で許されてゐたといふやうなことを』と私は答へた、『今更あなたはお考へになる必要はありませんよ。パールズ(註、佛の歴史家、一六三〇—一七一八)を讀むと、此の問題に就てコローン

のチルデバート王が、五百九十三年か五百九十四年かに發布した法令が出て居りますよ、それから又千五百七十九年の五月の、あの有名な Ordonnance de Blois (プロア法典)にも、二十五歳以下の、完全な智識、又は意志無く、若しくは父母及び保護者の同意無き子女を、結婚若しくは其他の豫約を以て偽誓したる廉により求刑さるゝ者は、凡て死刑に處せられるといふことが、明確に制定されて居ります。また其の法令には斯う書加へてあります。「Et parailine t seroit puis extra ordinairement tous ceux qui auront participi a dit rap, et qui auront prété conseil, confort, et aide en aucune maniere que ce soit。」(又、所謂誘拐ニ干與シタルモノ、及び如何ナル方法ニ於テモ、何等カノ相談、援助、若シクハ助力ヲ與ヘラレタルモノハ、如何ナル人ト雖モ、同様ニ、極刑ヲ受クベシ。)其 法典は確か斯うでした、殆ど斯うした條項でした。今あなたが秘にお話なさつたナポレオン法典といふ方は、自分の誘出した少女と結婚する誘拐者を、求刑に對する責任から除外して居りますが、其れは、ブレターニの法典によると、暴力の誘拐も、其の後結婚しさへすれば罰せられなかつたやうに、私は記憶して居ります。然し、色々な弊害を伴ふた此の慣例が千七百二十年に廢止されて了ひました——兎も角も私は、十年以内の日附を申上げるのです。私の記憶力は、今では良い方ではありません。随つて私が、息を吸ふのにでも休まないで、ジラート・ド・

ルツシロンの詩を五萬も暗誦出來た當時から、もう永い時が経過してゐるのです。

『シャールマンの法令集は、誘拐の賠償を規定して居りますが、無論そのことは御承知の筈と思ひますから、私は申上げませんでした。こんな風ですからね、親愛なムシユー・ド・ガブリー、誘拐なるものが古代佛蘭西の三代間に於て、決定的に處罰されるべき犯罪と見做されてゐたことがお分りでせうね。中世紀が社會的混沌時代を現はして居るなどと思ふのは大きな誤りですよ。寧ろ貴方は、斯う言ふことを想ひ起さねばならないのです——』

ガブリー氏は此處で私の言葉を遮つた。

『では、』と彼は叫んだ、『あなたは Ordonnance de Blois も御存じだし、バリューズも、チルデバートも、法令集も御存じなんです——それにナポレオン法典のことは、何一つ御存じないのですね!』

無論私は、その法典を読んだことが無かつたと答へた。彼は非常に驚いたやうな顔をした。

『所で貴方は斯ういふことを御理解になつてゐるでせうかね、』と彼は訊ねた、『貴方の犯した行爲が極めて重大だといふことを?』

私はまだ充分に其れを理解出來てゐなかつた。然し、非常に常識的な、ムシユー・ボールの説明

のお蔭で、少しづつ私は、無事な自分の動機に就て判決されないだらうといふこと、只自分の行爲に依つて判断され、その點で罰せられるであらうといふことを、最後に信ずるに至つた。そのために私は非常な落膽を感じ初めて種々雑多な悲哀の情を表白し初めた。

『私は何うしたらいいのでせう？』私は叫んだ、『私は何うすればいいのでせう？ ぢや私は、取返しのつかない破滅に陥つたのでせうか？——おまけに、私が赦ひ出さうと思つた哀れな子供まで破滅に導いたのでせうか？』

ガブリー氏は靜かにパイプに煙草を詰めた。そして、彼の深切さうな中廣い顔が、丁度火爐の焰の中で鍛冶屋の顔が光るやうに、火の後ろで少くとも三四分間眞赤に輝いてゐた程、悠々と其れに火を點けた。

それから彼は口を利いた、

『何うしたらいいかと仰るんですね？ いや、何も爲さらないがいいのです、親愛なムシユー・ボナール！ 神様のために、又あなたの爲めに、全然何事も爲さいますな！ 現にあなたの立場は非常に良くないのですからね。御自分で新奇に面倒を拵へようとお望みにならない以上は、決して出しやばらうとなさつては不可ませんよ！ 然し貴方は、私の取るべき行動を命じて下さら

なければなりません。第一着に、明日の朝私は、ムシユー・モーシエに會ひに行きませう。で若しあの人が、果して私達の考へてゐるやうな人物だつたら——詰り、全くの悪黨だつたらですね——早速私はたとひ悪魔が彼に加勢するようなことがあつても、何うかして彼を、無害にする手段を講じませう。凡てのことは、あの人次第ですからね。もう今晚は餘り時間も遅いし、ジャーン嬢を寄宿學校へ送り届けることも出来ませんから、今晚だけ家内にあの娘さんを此處で守させませう。無論これは、明かに犯罪の共謀を構成するものです、けれども、それは、娘さんを、曖昧な立場と言つたやうなものから救ふことです。所で貴方はですね、親密なムシユー、貴方は出来るだけ早くクエイ・マラクエイスへお歸りなさい。さうすれば、其處へジャンを捜しに來た所で、娘さんが貴方の所にゐないことを立證するのは、あなたにとつて容易なことです。』

私達が斯うしたことを話合つて居つた間に、ガブリー夫人は若い止宿人をして夜の安樂をなさしめる用意をして居つた。彼女が扉口で私達に「お休み」を言つた時、ラワンデルの香を浸ませた二枚の奇麗な敷布を、腕に掛けて持つて居つた。

『あれは、』と私は言つた、「實にいゝ匂ひがしますねえ。』

『えゝ無論ですわ。』ガブリー夫人は答へた、『どうぞ、私達は百姓だといふことを忘れなさらな

いようにね。』

『あゝ！』と私は夫人に答へた。天が私に只の一日でも、百姓になることをお許し下さつたら！ あなた方がルーアンスにゐらつしやるやうに、田舎の新鮮ないゝ匂ひを嗅いだり、樹の間に隠れた何處か小さな家に住んだりすることを、只の一日でも神様が許して下さつたらと思ひます。若しも私の此の希望が、殆ど一生の終りに近づいてゐる老人としては餘り野心に過ぎるなら、せめては自分の纏ふ敷布が、あなたが腕に掛けてゐらつしやる亞麻布のやうに、いゝラウエンダーの匂ひに溢れてゐたらと思ひます。

翌る朝、私が朝食に来るやうに打台はされた。然し私は、正午前に此の家へ姿を出すことを絶對に禁ぜられた。ジャーンは、私に別れの接吻をした時に、二度と學校へ連れて歸らないやうに懇願した。別れに臨んで私達は非常な感慨と非常な憂慮とを感ぜずには居られなかつた。歸つて見ると、テレーズは上り口の所で私を待つてゐた。丁度彼女は、狂暴にならんばかりに私に就て心配してゐた。彼女は、今後私を監禁するといふことより外、何事も言はなかつた。

何といふ一晚を私は過ごしたか！ 私は只の一瞬間も眼も閉ぢなかつた。時々私は、惡戯に成功した少年のやうに、笑はずには居られなかつた。かと思ふと今度は、實に自然に犯した自分の罪

に答辯するために、何處かの裁判官の前へ曳出されて、囚人の椅子に着席してゐるのを考へると言ひ難き恐怖感に襲はれるのであつた。私は非常に恐れてゐた、にも拘らず私は、何等の悔恨も感じなかつた。太陽の光りは遂々私の部屋へ入つて来て、樂しげにベッドの脚を照らした、やがて私は斯う祈つた。

「あゝ神様、トリスタンの中で言はれて居りますやうに「あなたは空と露とをお創りになりました。」どうぞあなたの公平で私をお裁き下さいませ。私の行ひによつては無しに、あなたの御存じの通り正しくて純粹であつた私の動機によつてお裁き下さい。そしたら私は申します、あなたの榮光は天に、心の善良な人の平和は地に、と。私は、私の盜み出した幼な兒をあなたの御手に獻じます。あの娘のために、私が何うしたらいいか分らないことを、してやつて下さいませ。あの娘を凡ての敵からお護り下さいませ。——あなたの御名の永遠に讃へられんことを！」

(十二月二十九日)

私がガブリー夫人の家に着いた時、ジャーンの姿が全然變つて居るのを見た。

私と同じく、彼女も亦曉の最初の光りの中で、「天と露とを息つた」祈に對して祈りを捧げたので無かつたか？ 彼女は、けにも平和な微笑を以てほゝえんだ。

ガブリー夫人は彼女の髪を梳きつけるために彼女を喚んだ。何故といふのに、深切な夫人は、自分の監督に委されてある娘の髪を、自分の手で梳いたり編んだりしなければ納まらなかつたからである。私が、約束の時間よりも少し早く来た、めに、此の愉快なお化粧を邪魔したのであつた。その罰として私は、應接間へ行つて一人で待つようにと宣告された。ガブリー氏は、應接室でほんの暫くの間私の仲間入りをした。彼の額に帽子の線の痕跡の残つて居つたのから見ると、明かに今丁度歸つた所に違ひなかつた。その打解けた顔は、悦びの感激の表情を現はした。私は彼に、何事も訊ねない方がいと考へた、そして一緒に朝食に向つた。女中達が給仕を済ました時、食後のために面白い話をして居つたポール氏は私達に言つた。

『ねえ！ 僕はレヴロアへ行つて来たよ。』

『メイトル・モーシエにお會ひになつて？』とガブリー夫人は昂奮して訊ねた。

『いや、會はなかつた、』と彼は答へて、私達の顔に現はれた失望の表情を珍らしさうに瞳めた。私達の心配を適當な時間だけ享樂してから、此の好人物は附加へた。

『メイトル・モーシエは既うレヴロアにゐないんだ。メイトル・モーシエは佛蘭西を飛出してつたんだよ。彼奴が逐電してから、明後日で丁度八日になるさうだ、而も共托者等の金を全部持逃げしたのだ——何でも可なりのお金ださうだ。行つて見ると事務所も閉まつてゐるが、その近所に住まつてゐる女の人が、あるたけの罵詈雑言と呪詛とを以て、そのことを全部僕に話してゐたつ。公證人が自分一人で七時五十五分の汽車に乗つたのではなく、何でもレヴロアの散髪屋の娘と一緒にさうだ。美人の上に藝事が出来るといふので、その地方で實に有名な娘ださうだ。——その娘が親父よりもずつと剃刀を使ふのが上手だといふ話だがね。まあ兎も角、モーシエがその女と二人で逃げたわけさ。警察部長もその事實を確認してゐるからね。まあ、メイトル・モーシエにとつては、國を飛出すのに、あれ以上都合な機會にあるものかね？ 若し彼奴が、もう一週間も遁走を延期して居つたら、それこそ依然として社會の代表者であつた、ねえムシユー・ポナル、そして貴方を、まるで罪人のやうに監獄へ曳きづつて行つたでせう。今となれば既う私達は、何一つ彼奴に恐れる所が無いのです。さあ、メイトル・モーシエのために祝盃を挙げませう！』

斯う叫んで、彼は白葡萄酒をコップに注いだ。

若しあの悦ばしい朝を記憶するためのみであつたら、私は永生きしたいと思ふ。私達四人は、蠟を引いた檜の木の手ブールを取巻いて、大きな廣い食堂に集まつた。ポール氏の悦びは心からの友情であつた、——否寧ろ、騒々しいと言つても良かつた。そして此の好人物は矢鱈に痛飲した。ガブリー夫人は私の顔を見て微笑した。それは實に愛情の籠つた、實に圓滿な、實に氣高い微笑であつた。で私は、この種の婦人は單に善行に對する報賞としてあのやうな微笑を保たねばならないのだといふこと随つて彼女を知つて居る凡ての人をして、出来るだけの善事を爲さしめるものだといふことを感じた。やがて、私達の勞苦に報ゆるために、以前の快活を取返してゐたジャーンは、僅か十五分間足らずの間に、人間の本质とか、宇宙の本质とか、科學、物理、形而上學の性質とか、——不可能、不可説不可知のものゝことは措き、大宇宙と小宇宙のことゝかの、徹底的説明を要するものに就て、私達に十二の質問を發した。それから彼女はポケットから聖ジョージの小像を取出した、それは我々の飛翅中に最も慘酷な苦しみを成した人であつた。その兩足と兩手は失くなつてゐた、けれども依然として彼は、青い龍の附いたヘルメット帽を被つてゐた。ジャーンは、ガブリー夫人に敬意を表するために其れを修復するといふことを、嚴そかに夫人に誓つた。

愉快な友人達！ 遂に私は、疲勞と歡喜とに包まれて彼等と別れた。

再び宿に歸つた時、私はテレーズから、極めて辛悚な小言を忍ばねばならなかつた。彼女は既う私の新らしい生活方向を理解しようとする望みを捨てたと云ふのである。彼女の意見によると先生は既に正氣を失つて居るのであつた。

『然うだ、テレーズ、儂は氣狂爺だし、お前は氣狂婆さんなんだ。全く然うだよ！ ねえテレーズ、あゝ神様、私達二人を祝福して下さいまし、そして新らしい力をお與へ下さい。私達には今、果たさねばならない義務があるのです。所でテレーズ、儂に長椅子の上に寝轉ばして呉れなにかね。既う實際立つて居られないのだから。』

(一八六一年、一月十五日)

「先生、お早うさま、ジャーンは斯う言つて這入つて來た。が、テレーズは遂々扉口へ行き着くことが出来なかつたゝめに廊下に立つてブツ／＼言つてゐた。

『マドマゼル、何卒儂を呼びかける時は、極く重々しく儂の稱號を使つてほしいものだね、そ

れから又、「お早う、私の保護者」と言つてお呉れ。」

「では、全部結着がついたのでございますか？ まあ結構なこと！」少女は両手を拍ち乍ら叫んだ。

「全部取り極まつたのだよ、マドマゼル、郡役所で、治安判事の前でね……だから今日からは、もうお前は僕の委任下にあるんだよ。何を笑つてゐるんだね、お前は僕の被後見人ぢやないか？ お前の眼でちやんと分るよ。今屹度頭の中で馬鹿なことを考へてるんだね——餘ッ程馬鹿けたことを。え？」

「まあ、違ひますわ！ 先生……いえ、私の保護者といふ積りだつたのよ。わたしね貴方の白髪を見て居りましたの。まるで露臺バルコニーの忍冬ナツメのやうに、帽子の縁から下の方へ縮れ出して居るのですもの。ほんとに奇麗な髪ね、わたし本當に好きですわ！」

「まあお坐り、そして若し出来るなら、詰らない事を言ふのをお止し。お前に大變眞面目なことを話したいと思つてるんだからね。お前、マドマゼル・ブレフェールの學校へ歸りたいなんて頑張るようなことは無いだらうね。……決して無いね。ぢや、若し僕が、一緒に住むつもりでお前を此處へ連れて来て、お前の教育を卒つて、それから……何と言つたらいいかな？——お

前を、あの歌にあるやうに、永久に此處へ置いておいたら、お前何う言ふだらうかしら？」

「まあ、先生！」彼女は悦びに顔を赧らめ乍ら叫んだ。

私は續けた。

「壁の向ふ側に美しい部屋があるが、家事管理婦が部屋の中を奇麗に掃除して、お前のために家具の備付けをして呉れてあるよ。お前は、いつも其處に置いてあつた書物の代りをするわけだよ。丁度晝が夜を續ぐやうにお前は其等の本の後嗣ぎになるわけだ。さあ、テレーズと一緒に一つて見てお出で、そして其の部屋に住まはれるか何うか見てくるといふね。僕はガブリーの奥さんと相談して、今晚お前がそこに寝ることの出来るやうに決めてあるんだ。」

言ひ終らぬ内に彼女は駆け出してゐた。私は彼女を暫く呼び返した。

「ジャーン、もう暫くお聴き！ お前今日までは、いつも私の管理婦の氣に入りだつた、けれども彼女は、凡ての年寄りと同じで、時々氣嫌を悪くすることがあるからね、いつも温順しくして、我慢して居るんだよ。彼女には何かにつけて斟酌してやるんだよ。僕も彼女には一々斟酌するのを自分の義務と思つてゐる。そして彼女が短氣を起したら凡て我慢してゐる。まあ、言はゞ彼女を尊敬するに限るね！ ジャーン。何も斯う言つたからとて、彼女が僕の召使であり、又

お前の召使であるといふことを、僕は決して忘れやしない。彼女にしても、ほんの暫くでもそれを忘れるようなことは無からうね。だがあの女を尊敬してほしいと言ふのは、あの女が非常に年を取つて居ると、非常に寛大な心を持つて居る點でなのだ。あれはね、それは／＼長い間、いつも善事をしつゝ生きて來た謙遜な女なのだよ、そして其の習慣の中で變屈に固まつて了つたのだ。だからあの眞直ぐな精神の残酷な態度を辛棒して忍ぶがい。若しお前が命令する方法を知つて居るなら、あの女は征服の方法を知るだらう。さあ／＼、彼方へ行つて自分の部屋を整理するがい、お前の勉強や寝むのに一番都合のよさうな風にね。』

此の旅費を以て、ジャーンを家事上の經歷に向つて出立させた後で、私は一冊の「評論雑誌」を読みはじめた。それは非常に若い人達の經營になるものであるが、實に卓絶したものであつた。その論調は多少ぎこちない所があるが、精神は熱烈なつた。私の讀んだ論文は、確かに、青年の頃私の書いた此の種のものに比すれば、精確な點と實證的な點とでは、遙かに卓絶してゐる。その論文の筆者たるポール・メイヤー君は、驚くべく明確な鋭い批評眼を以て、凡ゆる誤謬を指摘した居る。

私達は、其の當時、これ程明確な批判を以て批評する必要が無かつた、私達の放縱は夥しいも

のであつた。それが、學者と無學者とを同じ賞讃の破裂の中へ混淆せしむる程度にまで行つた。けれども人は、如何にして誤りを見出すべきかを知らなければならぬ、又當然責めべき場合に責めるといふことは、必須の義務でさへあるのだ。

私は、小さいレイモンド（これは私達が與へた名であつた）を憶えてゐる。彼は何一つ知らなかつた。彼の精神は何等充實した學問を吸収する力の無いような精神だつたのだ。然し彼は母を非常に好いてゐた。私達は、それ程完全な息子の無智に就てのヒントを、決して口にしないように、（極めて周到な注意）を拂つた。そして私達の忍耐があつたればこそ、小さいレイモンドはずん／＼と最高の地位にまで進んだ。その時彼は母親を失つた。だが凡ゆる種類の名譽が彼の頭上に雨の如く降り注いだ。彼は萬能になつた——彼の同僚と學術とに對して。——暫くすると、ルクセンブルグの若い友人が現はれた。

『お早う。ゲリス。今日は非常に幸福さうぢやないか。ねえ君、どんな幸運が君の所へやつて來たのかね？』

その幸運といふのは、彼が非常に立派に論題を主張し得たといふこと、及び彼が自分の學級で上席を占めることが出來たといふことであつた。彼は又、試験の間に往々引用された私自身の著

述が、大學教授によつて最上級の讃辭を以て語られたといふことを、それに附加して語るのであつた。

「實に素敵だ、私は答へた、」又、私の舊い名譽が、斯ういふ風に君自身の若い名譽と結付けられたといふことを聞いて、非常に幸福に思ふね。ゲリス。私は、君の知つての通り、君の論題に非常な興味を以てゐた。だが色々家事の整理しなければならなかつた爲め、近頃は始終多忙でそのため今日は君がそれを主張する日だつたことも、すつかり忘れてゐたのだ。

ジャーン嬢は、實に折良くも此場に現はれた。何だかそれは、今言つた家事の整理なるもの、性に就て、何かを彼に言ふために入つて來たやうであつた。

ゲリス君は彼女に對して、此の若い男が、以前面識があつたといふことを主張したり、舊い友達のやうに出しやばつたりする調子を、何う思ふかといふことを訊ねた。あゝ、決して心配は要らない！——彼女は決して此の青年を忘れてゐなかつた。あの時、彼處で、正しく私の面前で、「ヴエネチヤン・ブロンド」の問題に就て去年の會話を二人が繰返したといふ事實から推しても、此のことは極めて明白であつたのだ！二人は實に活氣ある調子で論議を續けた。私は、此の部屋に居る資格が全然無いのぢやないかと、自分で考へ初めた。私が自分に聞かしめるために爲し

得た唯一のことは、咳をすることであつた。一言を挿さまうとするのにも、二人は決してその機會を與へてくれなかつた。ゲリスは、たゞベネチヤン派の色彩畫家のことのみならず、その他自然と人類に就ての凡ゆる事柄を熱烈に論じた。するとジャーンは、いつも彼に對して『さうですわムツシユー、其の通りですわ。』……『わたしの考へてゐた通りですわ、ムツシユー。』……『ムシユー、あなたは、丁度わたしの考へて居ることを、ほんとに美しく表白なさるのね。』……『今あなたのお話しになつたことを、能く考へて見ますわ。』など、答へてゐた。

私が物を言つても、マドマゼルは決してその調子で答へようとはしない。私が彼女の前へ智的な食べ物を列べた所で、彼女は只、ほんの舌の先きで其れを味はうとするだけである。まあ、全然それに觸れようもしないであらう。所がゲリス君の方は、凡ゆる問題に就て、彼女の考への中で絶對の權利を握つて居るやうに見えるのである。凡ゆる彼の空虚な性格に對して——『あゝさうですとも！』——『おゝ無論です！』いつも斯うなのだ。又その時のジャーンの眼！私は會つてその眼が其れ程大きく見えたの知らない、又それほど不動な表情をその中に見たことも無いだが然しその凝視は、いつもの通り——飾り氣も無く、フランクで、凜々しかつた。ゲリスは明かに彼女が氣に入つたのだ。彼女も彼を好いてゐる。そのことは彼女の眼で分つて居る。彼等二

人は凡ゆる森羅萬象に對して其れを表示したのた！ 實に美しいぢやありませんかね！ ボナール先生。——貴方は御自分の被後見人を見て餘んまり嬉しがつてゐらつしやるものだから、御自分が後見人だといふこともお忘れになつてゐるぢやありませんか！ 貴方が此の仕事を行つて初めたのは、つい今朝からぢやございせんか。それに既うちやんと、其れが、非常にデリケートな困難な義務を惹起すといふことをお知りになりましたね。ねえボナール、實際貴方はあの青年を娘さんの側から引離すために、何か手段を講じる必要があります。是非さうしなければ……えッ！ だが私は、自分の爲すべきことを何うして知り得よう？……

私は手近かな棚から出鱈目に一冊の本を取出した。私はそれを開ける。そして恭しくもソフオクトレスの戯曲の中へ入つて行く。手を取れば取る程、私は、愈々古代の二文明國に對する愛好心を増すのである。だから今では、伊太利と希臘の詩人のものは、此の書籍の都の、樂に手のとどくような棚へ、いつも置いてあるのである。

遂々、青年と淑女とは、私が彼等に對して注意を傾けるのに餘り多忙に見えるので、止むを得ず私に何だか注意を注ぐようになった。私の信じてゐる所では、ジャーナ嬢は曾て私の讀んでゐるものを訊いたことがないのである。否、實は私は、それが何であるかを彼女に言ひたくないの

だ。内所の話だが、實は私の讀みつゝあるものは、一つの熱烈な場面を通して素晴らしい音楽を奏でる所の、あの優しい晴れやかな合唱の聖歌——The chorus of the Old Man of Thebes である——*Epos avkate* ……「克ち難き戀、おゝ、富める家々の上に降る汝——處女の美しい頬に休む汝——凡ての海洋を渡る汝——けにや不死のものの中、あるは又些かの空間をのみ生活する人間の中、汝を逃がれ得るものも無し、又汝に憑かれたるものは、己が上に狂氣のあるを見ん。私が此の美しい聖歌を再讀した時、アンチゴーンの顔は冷靜な純粹さを以て私の眼前に現はれた。何たる影像であらう！ 最高の天國を飛翔する神と女神の群ではないか！ アンチゴーンに連れられて、永い間流浪ひつゝあつた乞食の王様である盲目の老人が、今神聖な儀式で葬送された。そして、曾て人間の頭で考へられた最も美しい空想のやうに美しい彼の娘は、暴君の意志に逆つて、自分の兄を敬虔に埋葬する。彼女は、暴君の息子を愛し、その息子は又彼女を愛する。かうして、彼女が刑場へ行く時に、彼女の美しい敬虔の犠牲である老人達は歌ふのである、克ち難き戀、おゝ、富める家々の上に降る汝、——乙女の美はしき頬に休らふ汝……

「マドマゼル・ジャーナ、お前本當に、私の讀んでゐるものを知りたくて堪らないのかい？ 私

様に笑つた顔の影像を澤山繕ひ込んだ美しい掛錦を織つた話なんだよ』

『あゝ！』ゲリスはワツと笑ひ出して叫んだ。『それは教科書にありませんね。』

『scolding なんだ、』私は言つた。

『未刊行ですね、』彼は附加して立ち上つた。

私はエゴイストでは無い。だが私は用心深い。私は此の少女を養育しなければならぬのだ、何故なら彼女は、まだ結婚するには餘りに若いから。否々！ 私はエゴイストでは無い、けれども私は、もう二三年は彼女を手元へ置かねばならない——只一人で私の手元に。確かに彼女は、私の死ぬまで待つことが出来る！ 憂ふるな、アンチゴネ。老いたるエデイボスはやがて聖なる埋葬を發見するであらう。

兎角する中にアンチゴネは、家事管理婦の手助けをしつゝ人參を擦つて居る。彼女はそんなことを爲るのが好きだと言ふ——それが彫刻術と關聯してゐるので、彼女の性能に適するといふのである。

(五月)

今で、誰が書籍の都を認めるであらうか？ 其處は到る處花ばかりである——凡ての家具類の上にあへ。ジーヤンの考へは正しかつたのだ、あの青磁の支那花瓶に生けた薔薇の花は、實に美しいではないか。彼女は毎日テレーズ市場へ出掛ける、而もそれが老婢に買物をさせるのを助けるといふ口實である、所がいつも自分の花以外に何も持つて歸つた例は無いのである。花といふものは事實非常にチャーミングなものである。いつか私 確かに自分の計畫を實行しなければならぬ、そして田舎で、其等の自然の領域に於て其等を研究することに没頭しなければならぬ——自分の有つて居る知識と熱心とを凡て傾けて。

何がために私は此所で爲さねばならないか？ 何故私は斯様な羊皮紙の文書に眼を消耗しなければならぬのか、それが今では、知る價値のあることを一つも私に教へないではないか？ 私は最も烈しい悦びを以てさうした古文書を常に研究してゐた。當時私が、其等の中に何を見出さうとしてあれ位熱心だつたのか？ 宗教的基礎の年代——肖像画家、寫本家たる僧侶の名前——焼パンとか牡牛とか土地とかの値段——何か司法とか行政とかの法令——これが凡てなのだ、而

もそれ以上のものになると、漠然とした神秘的な崇高な「或物」が、私の興味を唆つたものだ。にも拘らず六十年の間、無益にも私は其の「或物」を探し求めて来たのさつた。私より賢い人達——即ち師と仰がれた人々とか、眞の偉人とか、フォーリール家——（フォーリール、佛の史家）とか、テイエリー一家（兄弟共に十八世）（紀の佛國歴史家）とか——は實に多くのことを発見してゐる、そして、名も無ければ形も無い所の、而も其れが無ければ如何に偉大なる精神的仕事も此の世界で成し遂げる事が出来ないといふ其の「或物」を、私の成し得た程も見出すことが出来ずに、仕事半ばに死んで居るのだ。そして私は、確實に発見し得られさうなものを探して居るに過ぎないために、全然何物をも発見することが出来ないのだ。随て私は聖ゲルマン・デ、ブレー僧院の歴史を完成することも、多分覺束ないわけである。

『おぢさん、此のハンカチに何が入つて居るか、一寸當て、御覽。』

「外見から判断すると、どうも花らしいね、ジャーン。」

『まあ、違ひますことよ——花ぢやないことよ。そら！』

見ると、小さな灰色の頭がハンカチから突き出て居る。それは灰色の小猫の頭である。ハンカチを開く、すると此の動物は毛氈の上へ跳び下りて自體を震はす、そして片方の耳を聳てる、と

思ふ今度は今一方の耳を聳て、充分警戒しながら、身の廻りや居並ぶ人々を點檢し初める。

テレーズは、呼吸を切らし乍ら、籠を肩にかけて突然其場へ現はれる、そして矢張り此の點檢の對象の役割を引受ける、だがその役割は一向彼女の氣に入りさうも無いのだ。何故といふに此の若い猫は、そつと彼女の所から遠のくからである。就も私の脚元へ近寄らうともしなければ、又恐ろしく饒舌に慈愛の言葉を使つてゐるジャーンの傍へ行かうともしなかつたのだ。テレーズの第一の缺點は、自己の感情を抑へることの出来ない點にある。そのたあに彼女は、何も自分の知らない猫のやうなものを家へ連れて歸つたといふので、お嬢さんを猛烈に責め立てるのである。ジャーンは、自分を辨明するために、凡ての譯を私に話した。彼女がテレーズと一緒に藥屋の店先を通つた時、その店員が小猫をば往來へ蹴出したのを見た。吃驚して恐れをなした其の猫は此の怖ろしい往來に居つて通り過ぎる人々に蹴散らかされて居るべきか、或は又再度蹴出されるのを覺悟の上で其の藥屋へ歸つて行かうかと、思案してゐるやうに見えた。ジャーンは其の猫が危急の場合にあることを感じ、その躊躇して居るのを理解した。猫が非常に愚かしく見えた。そして彼女は、それが愚かしく見るのは、只猫自身が何うしたらいいか決心がつかないからだといふことを知つた。そこで彼女は猫を抱上げた。所が其の猫は、今までは家の内でも外でも何等

の休息を得てゐなかつたために、おとなしく彼女に抱かれた。それから彼女はそれを安心させるために撫でたりさすつたりした、そして大膽に藥屋へ入つて行つた。

『お内で若しあの猫がお嫌ひでしたら、決してお擲りになつてはいけません。是非わたしに下さいまし。』

『さあ、持つて行らつしやい、』藥屋は言つた。

……『まあ斯うなの！』ジャーンは結論として附加へた。それから其の猫に對して、色々な深切を盡したといふことを話すために、又もや聲を變へて笛の調子になつた。

『あの猫は甚く瘦せてるね、』私はその薄命な動物を見やり乍ら言つた。『それに又恐ろしく醜いぢやないか。』

ジャーンは、其れが些とも醜くないと思つて居る、が最初見た時よりはずつと愚鈍に見えるといふことは認めて居るのである。今度は彼女は、猫が愚圖々々してゐるのではなくて、吃驚したと思つて居る、そしてそのために不幸な表情を顔に現はしてゐると考へて居るのである。私達はその猫の身になつて考へねばならないとジャーンは言ふ——で私達は己むを得ず、その猫が恐らく自分の身に起つたことを理解することが出来ないのだといふことを承認する。それから私達一

同はは此の哀れな小さい動物の面前でワツと笑ひ出す。すると猫は極めて滑稽な面をして勿體振つて居る。ジャーンは猫を抱き上げようとするが、テーブルの下に隠れて了つて、ミルクの皿を見せておびき出さうとしても一向誘惑されさうも無い。

私達は皆背中を向けて其れを見ないように約束する。今度目に其の皿を調べて見るとミルクが一滴も無くなつて居る。

『ジャーン、』私は言ふ、『お前の protégé(被保護者)は確かに哀れつほい容子をして居るが、狡猾くて猜疑心のある奴だね。が僕は、彼女が此の書籍の都で別に悪るいことはしないだらうと思ふし、随つて藥屋へ送り返へす必要もなく濟むと信じて居る。その内名前を付けてやる必要があるね。』Don Gris de Goutière』といふ名前はどうかね。だが少し長過ぎるやうだね。』Pill』(醫者の意)か Drug』(藥種の意)か、それとも Castor-oil』(蓖麻子油)にするかな。これだと、短かいし、又彼の一生の初期の境遇を記憶するのにも遙かに役立つだらうぢやないか。お前何う思ふね？』

『Pill』も聞えが悪くありませんね、』ジャーンは答へる、『でも彼れが不仕合せな境遇から救ひ出されたのですから、これからいつもその不仕合せを思ひ出させるやうな名前を與へるのは、餘んまり不深切のやうですわ。それは私達の愛撫に對して、餘り高價なものを支拂はせることに

なりますわ。もつと寛大になつて、可愛らしい名前をつけてやらうぢやありませんか、當然彼れが其れに價するようになるのを望む意味でね。御覽よ、あんな顔して私達を見てゐるぢやありませんか！私達が彼れのことを話してゐるのを、ちゃんと知つてゐるのですわ。それに又、今では既に不幸ぢや無くなつてゐるんですもの。又其れ程馬鹿けてゐないことを大變に示さうとして居るのです。わたし冗談申しませんわ！不幸といふものは人を愚鈍に見せるものですわ、——わたし其のことを確信して居りますわ。』

『よし、ジャー、お前さうしたいと思ふなら、お前の *Prolog* をハンニバルと呼ばうぢやないか。此の名前がどれ程適切かといふことは、直ぐとはお前に分らないかも知れない。然し此の書籍の都の居候のやうにして、先きから連れて來られてゐるアンゴラ犬は、始終ハミルカーと云ふ名で呼ばれて居るんだよ。其奴が非常に惻口で、又人物も變つて居るから、いつも僕は自分の秘密を打明けて居るがね。此の名前が別な名前を生むといふことも、ハンニバルといふ名前がハミルカーといふ名前の後嗣ぎをするといふことも自然なのだ。』

私達は皆、此の點で意見が一致した。
『ハンニバル！』ジャーンは叫んだ、『さあ此處へお出で！』

ハンニバルは自分の名前の變な響きを聞いて非常に驚いた、そして本棚の下の穴の中へ身を匿さうとして駆け出したが、それは、鼠でさへ身を押し込めることの出来ない程小さい穴だつた。

斯くも立派な名を榮譽とする美はしき方法よ！

其の日私は非常に興味を以て仕事に對することが出來た、所が丁度ペン先をインキ壺に浸さうとした時、誰か呼鈴を鳴らしたのを耳にした。若し人あつて、此の想像力に乏しい一老人の書いた是等の頁を読むことがあつたら、其の人は屹度、新來の人物の來たことを告げもせず、又不慮の出來事を報らせもしないで、呼鈴が私の話中鳴りつゞいて居るといふ點を可笑しく思ふに違ひない。舞臺の物は凡て逆定理によつて取扱はれて居る。作者先生は立派な理由無しには決して幕を上げない、それは貴婦人や令嬢達を一層悦ばせるためなのだ。これが藝術である！私は、脚本を書く位なら寧ろ死ぬ方がましだ、——これは人生を蔑視するからでは無くて、到底私といふ人間が面白いものを何一つ工夫出來さうも無いからである。工夫！さうだ、工夫しようと思ふやうな人はインスピレーションといふ賜物を授けられてゐなければならぬ。さうした賜物を所有するといふことは、私にとつては極めて不運なことに違ひない。まあ考へて見るがい、若

し私がサン・ゼルマーン・デ・ブレー僧院の歴史の中に、何かの捏造を試みたとしたら、何うであらう？ 我が青年學徒達が何と言ふだらう？ 又學校にとつては何といふ凌辱であらう！ 學士會にした所で、決して此の同題に就て何も言はないだらうし、又恐らく一考さへしないだらう。假し私の同僚が、折に觸れて少しはかり書くことがあつても、彼等は決して讀まうともしないだらう。彼等はバーニイの意見と同一なのだ。バーニイは斯う言つて居る。

Une paisible indifférence

Est la plus sage des vertus.

(意——美德の内最も賢明なるは冷靜なる無關心である)

最も賢ならんがために最少の賢ならんとすること——是は確かに佛教徒が、知らずくへ到達してゐる所のものである。若し、私がそのことを報告するために羅馬へ行く積りにしてゐることよりも、もつと賢明なことがありとすれば……』だが是は凡て、ゲリス君が突然鈴を鳴らしたゝめであるのだ！

此の青年は、近頃、ジャーインに對する態度を全部變へてしまつた。今では、これまで不眞面目であつたと同じだけ眞剣であり、いつも饒舌であつたと同じだけ沈黙になつて居る。ジャーインも

亦彼の手本に習つて居る。私達は無理矢理に熱烈な戀愛の形勢に到達したのだ。何故なら私は、たとひ老いてゐるにしても、決して欺かれることは無い——此の二人の子は熱烈に眞卒に互に戀愛の擒となつて居るのだ。今ではジャーインは彼を避ける——若し彼が書齋に這入つて來ると彼女は自分の部屋へ隠れる——だが彼女は、獨りほつちの時、只一人ピアノに向つてゐる時は、何うして彼に近づくかを能く知り切つて居る！ どんな晩でも彼女は、新らしい電の新發現である所の豊富な熱情に打慄き乍ら、自分の弾く音樂を通して彼と語るのである。

あゝ、何故私はそのことを告白してはならないか？ 私の弱點を公言してはならない理由があるらうか？ 確かに私の主我主義ば、それを私から匿して置くことになつて、もつと罪の軽いものになるとでも言ふのか？ で私は其れを書くことにする。さうだ！ 私は何か外のことを願つて居るのだ。——さうだ！ 私は彼女を、自分の子供のやうに、自分の娘のやうに、私の傍へ置く積りだつたと思つた——無論何時もではなく、況んや非常に永い間といふのでも無い、たゞほんの二三年なのだ。私はそれ程老境に居るのだもの！ 彼女は待てないといふなら？ だが誰が知らう？ 痛風症が癒はつてまでも私は、彼女の忍耐の上に餘り多くのものを課したくは無い。斯ういふのが私の願ひであり、私の望みだつたのだ。私は自分の計畫を立てた——私は此の粗野

な青年の來ることを少しも當てにしてゐなかつたのだ。だが此の違算は殘酷といふより外はなかつた。それは私の計畫が偶然にも間違つたからであつた。にも拘らず我が友シルヴェストル・ボナールよ、君は君自身を餘りに輕卒に責めて居るやうに私には思はるれのだ。若し君が此の少女を今二三年手元に置きたいと思つたのなら、それは君自身の爲めであると同じだけ彼女自身の爲めだつたのだ。彼女はまだく知らねはならぬことが澤山ある。又君は先生として少しも輕蔑さるゝ所が無いではないか。あの賤しい公證人のモーシエ——其後に到つて絶好の機會に彼の下劣を示した男——が態々君を訪ねて行つた時、君は燃えるやうな凡ゆる熱誠を以て君自身の教育の理想を彼に説明したものだ。それから君は自分の法式を實行しようと試みたのだつた——ジャーンといふ娘は確かに恩義を知らない。又、ゲリスは餘りに誘惑力のある青年だ！

だが然し、——彼を家から追出さない以上は（さうすることは實に忌はしきまでに不躑躅な、意地の悪いことである）——私は永久に彼を迎へねばならない。彼は私の小さな應接室で實に永い間待つて居つたのだ、あのルイ・フィリップ王が町重にも私に贈つて呉れたセーブル燒の花瓶の前でそして其等の磁器には、レオポルド・ロバートの農氏や漁師の繪が描いてあるが、ゲリスは同情的なジャーンの賛成を得て（彼は全く彼女を魅了してしまつてゐるのである）大膽の其等にも其等の

花瓶を甚く醜いと言ふ。

『ねえ君、實に永いこと待たして濟まなかつたね。少しばかり仕事が残つてゐたものだからね。』

私の言つて居るのは眞實である。思索は仕事である。だが無論ゲリスは、私の言ふ意味が分らない。彼は、何か私が考古學上のことを言つてゐると思つて居るのだ。そして、ジャーン嬢の健康に就ての彼の質問に對して、『實に甚く上機嫌だ』といふ答へが、保護者としての私の道徳的權威を示すやうな極めて無愛想な調子で言はれた。そこで私達は色々の歴史的問題に就て會話を初めた。私達は先づ綱領に就て會話しはじめた。綱領といふものは時としては極めて有用である。私は、自分の屬する此の歴史家達の時代に對する或種の崇敬を、ゲリス君に對して諄々と説かうと思つた。私は彼に言ふ、

『歴史といふものも、嘗ては藝術であつたのだ。又空想力の最も完全な訓練に對して餘地を與へてゐたのだが、今日では其れか一科の學問となつて了つて、其れを研究するには絶對正確な智識が要求されるやうになつて居る。』

ゲリスは此の點に就て私と見解を異にすると言ふ。彼の言ふのでは、歴史が科學であるといふ

「ことも、又それが科學になり得たといふことも信じられないといふのである。」

『先づ第一に、』と彼は私に言ふ、『歴史とは何でせうか？ 過去の出来事を書き現はしたものでありませんか。然しその事件といふのは何でせうか？ 單に平凡な事實をいふのでせうか？ 何かの事實を言ふのでせうか？ いえ〜！ 其れは記録の價値ある事實を言ふのだと、あなたは仰有います。所で、歴史家といふものは、一つの事實が、記録する價値があるとか無いとか、何うして決めるのでせうか？ 自分の趣味と、氣まぐれと、自分の思想とに依つて——詰り藝術家のやうに、勝手にそれを判別するのですか？ 何故と云ふのに、色々の事實といふものはその本來の性質によつて、歴史的の事實とか非歴史的の事實とかに區分さるべきではありません。どんな事實でも、何か非常に複雑したものです。一體歴史家といふものは、色々の事實をば、凡てその複雑のまゝ現はすのでせうか？ いや、そんなことは到底不可能です。して見ると、其等の事實を組織してゐる特質の大部分を削ぎ落としたものを現はすのでせうか、そのために切り碎いふものに至つては、推して知る可しです！ 若しも一つの所謂歴史的の事實が、全然歴史的で無い一つ若しくは其れ以上の事實によつて注目を惹くことがあつたならば——いや、これは極めて有

り得ることです——而も其の知ることの出来ない理由のためであるとしたら 歴史家といふものは一體、それらの事實の關係を、一方の事實から他の事實へ、何うして結び付けるのでせうか？ 然しボナール先生、私は、歴史家といふものが自分の前に確固たる實證を有つて居ることや、従つて實際彼は同情的な論據に對する然うした確證にのみ信認を感じてゐるといふことを想像し乍ら、こんなことを言つて居るのです。こんなわけで、歴史は科學で、ありません。藝術です。だから人は、自分の空想の力によつてのみ此の藝術に成功することが出来るのです。」

此の瞬間にゲリス君は、私に、或る馬鹿な青年のことを私に強く想出させた。何時かルクセンブルグの公園で、ナバルルのマルゲレットの銅像の下で、その男が亂暴なことを言つて居るのを私に聞いたことがある。所が、會話が一轉すると、今度は私達はウィーター・スコットと面を接して居つた。私の下劣な若い友人はスコットの作品をば『ロココ式』(註、一八世紀末の無趣味な裝飾味)のものであり、トルバドール式(註、十一世紀頃佛國に起りし一遊の抒情詩人)のものである。せいふくは、安つほい青銅の時計の圖案を請負ふてゐるやうな人をインスパイヤするに恰好のものだ」と言つて快としてゐる。これは彼の口にした言葉そのまゝであるのだ！

『何だつて！』私は「The Bride of Lammermoor」 & 「The Fair Maid of Perth」を書いたあの素

晴しい創作家を熱烈に辯護して叫んだ、『彼の書いた其等の立派な小説の中の過去の生活といふものは、凡て——其れが歴史ぢや無いか、其れが叙事詩ぢやないか！』

『いえ、反古ほんこです、』ゲリスは私に答へる。

そして——諸君が信じないかも知れないが——此の狂氣じみた青年は現に私に向つて斯う言ふのである、即ち人間が如何に學問した所で、五世紀も十世紀も前の人間が果してどんな生活をして居つたかといふ様なことは到底分るものではない、何故なら其等の人間が僅か十年十五年前に生活して居、たものと想像しようとする丈けでも最大の困難を感じるからである、と言ふのである、彼の見解では、歴史詩も、歴史小説も、歴史畫も、皆その性質上、藝術の分派としては異常に間違つて居るといふ。

「凡ゆる藝術に於て、』と彼は附加へる『藝術家は自己の靈を再現することが出来るだけです、ですからその人の製作品は、たとひ如何程粉飾されてゐた所で、それは彼自身の精神の反映ですから、彼自身と同時代の人々に必要なものです。若し「神曲」がダンテの偉大な靈で無かつたらば、何を以て其れを尊敬しませう？ 又、ミケル・アンゼロの大理石像です、其等が若しミケル・アンゼロ自身でなかつたならば、果して其等の製作が、全然非凡であることを我々に示すこ

とが出来ませうか？ 藝術家といふものは自分の創作へ自分の生命を傳達するか、で無ければ只人形の着物を脱したり、人形に盛装セウゾウしたりするだけです。』

何うして、逆説ギャグや侮言ブツゴンがこんなにとどく、出るのだらう！ だが私は青年の無遠慮を決して嫌ひではない。ゲリスは椅子から起ち上がつて再た坐る。何が彼をそんなに苦しめてゐるかといふことは、私にはちやんと解つて居る、又彼が誰を待つてゐるかといふことも。今度は彼は、現在の所一ヶ年に千五百フランクの金を作ることが出来るといふこと、又此の以外に、相續した小財産の中から、一年に二千フランクやそこらの利子が這入つて來るといふやうなことを、私に話しはじめた。そして私は、彼が自分のことをこんなに自信を以て話す目的に就て、些とも思ひをめぐらしてゐない。彼は只、自分が幸福な境遇に居つて、基礎が鞏固で、家庭を愛して、比較的自立的であるといふこと——極く切りつめて言へば、結婚し得るといふことを、私に力説しようとして、財政に關する小演題をして居るに過ぎないといふことは、ちやんと私には分つて居る。幾何學者の所謂 *Quod erat demonstrandum* (公式によつて證明し得る) ののである。

彼は席を立つて又座つた。丁度二十遍目である。今度は第二十一遍目に起ち上る。それでもまだジャーンの顔が見えないので、出来るだけの不幸を感じ乍ら、出て行く。

彼が出て行つた瞬間に、ジャーンは書籍の都へ這入つて来る。ハンニバルを探して居るといふ口實の下に。彼女も亦實に不幸なのである。そのために、愛物にミルクを與へる時に呼ぶ聲が、殊更哀しげに聞える。ボナールよ、見よ、あの哀しげな小さい顔を！ 暴君よ、見よお前の仕事を！ お前は彼等がお互に相會ふのを妨げて居つたのだ。だが彼等は二人共、同じやうな表情を浮べて居るではないか。同じ表情をして居るのは、彼等はお前に無關係に、思想の中で結合して居る證據なのだ。カーサンドラよ幸福なれ！ パーソロよ歡喜せよ！ 保護者であるといふ意味は此の事なのだ！ 両手でハンニバルの顔を抱へて、毛氈の上に跪付いてゐる娘を一寸見るがいゝ！

然うだ、愚かなる動物を愛撫せよ！——彼を憐れめ！ 彼の上に涙を流せ！——汝、小さき浮浪者よ、我々はその嘆息と悲哀との眞の理由を能く知つて居る！ たが然し、それは實に美しい繪だ、私は長い間その光景を見て居る。それから書齋の中をぐるツと一瞥してから、斯う叫ぶ、
『ジャーン、僕はもう、此處の本を皆倦いて了つた。皆賣拂はねばならぬ。』

(九月二十日)

旨く行つた！——二人は許嫁になつた。ジャーンと同じく孤兒であるゲリスは、自分で直接私の所へ結婚申込したのではなかつた。彼は自分の大學教授の一人を介して、代理に私の所へ來て貰つた。それは學識と人格に於て非常な尊敬を受けて居る年寄つた私の同僚の一人だつた。それにしても何といふ愛の使者だらう！ 嗚呼！ 熊だ——ピレネー山脈の熊では無くて、文學上の熊だ——而も後者の熊の類は前者よりも遙かに獍猛である。

『正邪は別として(尤も僕は邪と思ふがね)ゲリスの言ふのでは、決して持參金なんか要らない、肌衣一枚で君の保護者を連れて行くといふのだ。諾と言ひ給へ、そしたら話が済むのだ！ こんな事は愚圖々々しては不可ないよ！ 僕は、ローレンから來た非常に珍らしい古い印章を二三個君に見せたいと思ふが、君は以前に一度も見たことが無からうと思ふよ。』

彼の言つたことは眞實である。私は、是非ジャーンに相談するからと彼に答へた、そして私は、自分の保護者が持參金があるといふことを彼に話すのが、些とも愉快でなかつた。

彼女の持參金——それは、つい私の眼の前にあるではないか！ 私の書齋が其れなのだ。へん——とジャーンとは、臍ろけにさへそんな事を思つてゐない、だが此のことは、私が現在よりも

遙かに富んで居るといふやうなことを下劣にも信じてゐる事實なのである。私は年寄つた守銭奴のやうな顔をして居る。それは確かに虚偽の顔だ。だが其の顔の不誠實が、私に對して實に多くの酬ひを與へたことは屢々である。世の中には吝嗇な富豪ほどの尊敬を受けるものは誰も無い。私はジャーマンに相談した。——だが彼女の答へに耳を傾ける必要が何處にあらう？ 旨く行つた！ 二人は許嫁になつたのだ。

單に彼等の言葉や態度を書附けるといふやうを目的で、是れ以上此の若い二人を注視するといふことは、私の性格にも適しないし私の顔にも不似合である。Koli me tangere (註、他人のこと)——これこそは凡ゆるチャーミングな、戀愛事件に對する箴言である。私は自分の義務を知つて居る。それは、私に話されたあの無邪氣な靈の凡ゆる小さな秘密を尊敬することだ。願はくは此の子供等をして、出来るだけお互に愛さしめよ！ 彼等相互の熱烈な信頼の流出の一語も、彼等の飾りけの無い露骨な天真爛漫の一つの暗示も、決して此の老保護者の手で日記の中に書き附けられないだらう。彼の権力はそれ程寛大で簡單なのだ。

それは兎も角として、私はいつまでも腕組みしてゐられない。若し彼等が着手しなければならぬ仕事があるなら、私にも自分の仕事がある。私は全部の蔵書を競賣に附するためには目錄を作

らうとして居る。これは私を悲します仕事であると同時に、私を悦ばせる仕事である。私は、恐らく自分がなさねばならないよりもづゝと永い間それを躊躇しつゝ、私の思想、私の手、私の眼に斯くまで親しみの出來た其等の著述——全然必要も理由も無くなつてゐるものでも——のペーヂを一々繰つて居る。だが、もうおさらばだ。だが、別れを長引かすのは昔から人間の性質では無いか。

此處にある此の丰大な一巻、これは三十年もの永い間私に仕へたものだが、今忠實な召使が價するやうな凡ゆる深切な言葉をそれに與へないで何うして其れと別れることが出來よう？ 又此の一冊、それは實に有益な教義によつて屢々私を慰めたものだが、私は「師」に對するやうな、最後に其の前に跪く必要が無いだらうか？ 然し私は、嘗て私を邪路に導き、嘗て私を、考古學者の誤つた年代と、省略と、虚偽とで惱ました書物に出喰はす度毎に、悲痛な悦びを以て、其れに斯う言ふ、『行け！ 詐欺師、叛逆人、偽證者！ 余の傍から永久に去れ。——A. P. O. T. O. (先驅者、皆お前のやうに、不合理に金で被はれて居るのだ！ それがお前の身に降りかゝるが、いゝ——剝奪されたお前の名譽と、モロッコ革で裝飾されたお前の裝束に感謝する——何處かの愛書癖の銀行家の私室に備へ付けられるが、いゝ、だがお前は嘗て私を迷はしたやうに其の銀行家を迷はず

ことは出来ないだらう、何故なら其の人は只の一行もお前を讀まないだらうからな。」

私は自分の保存しなければならぬ數冊の本を傍へ取りのけた。——それは皆記念として贈ら
れたものであつた。私が其等の本の中へ「Golden Legend」の寫本を加へた時、トレボフ夫人の想
ひ出に、其れに接吻しないでは居られなかつた。彼女は、高い地位を有し凡ゆる富を有して居る
にも拘らず、私に悦ばしい記憶として残つて居る。又嘗て私が彼女に深切を爲したと彼女が感じ
て居ることを只私に證明するために、私の恩人となつて居るわけである。……斯う私は保留し
た。私が、初めて、自分が故意の罪を犯したと感じたのは此の時だつた。その晩、夜通し私は惑
はされた。朝方になつて此の誘惑が遂に不可抗のものになつた。まだ家の中の者は皆眠つて居つ
た。私は寢床を出て、ソツと忍び足に部屋を出た。

汝、闇の力よ！ 夜の幻よ！ 雄鶏が高鳴きしてからお前が儂の家の中を徘徊してゐる時、儂
が爪先きで書籍の都の中を忍び歩るきして居るのを見ても、決してお前は、ネーブルスでトレボ
フ夫人がしたやうに「あの老人は實に人の好ささうな丸い背中をしてゐる！」など、聲を立てな
かつた。私は書齋に這入つた。ハンニバルは、尻尾を逆立て乍ら、私の足へ身體を擦りつけて咽
喉をゴロ／＼鳴らしにやつて來た。私は棚から一冊の本を抜取つた。それは或る重寶なゴジック

の原本で、ルネサンス時代の或る立派な詩であつた——私が夜通し夢想して居つた寶玉であり、
寶物であつたのだ。私はそれを取上げて、戸棚の一番底の所へ押し込んだ。それは自分が保存し
やうと思つた本を入れる戸棚にしてあつたのだが、それが直ぐ一杯になつて、殆ど破裂しさうに
なつて了つてゐる。言ふも恐ろしいことだが、私はジャーンの結婚資金に忍び寄りつゝあつたの
だ！ 而も此の罪を進行して了つた後で、又もや私は決然として自分の仕事に取りかゝつた。そ
してジャーンが何か着物が結婚衣裳かのことと私に相談に來た時まで、私は目錄を作つてゐた。
私は彼女の言つて言ふことを少しも了解することが出来なかつた、尤もこれは、私が女の衣裳と
かキャラコの布地とかに就ての流行語に全然無智であることにもよるのである。嗚呼！ 若しも
十四世紀の花嫁が、彼女の時代の衣裳に就て私に話しに來たのなら、實にその時こそ私は彼女の言
葉を理解し得たであらうに！ だがジャーンは私の時代に屬してゐないのである、それで私はガ
ブリー夫人に來て貰つて、此の重大な場合にジャーンの母親の代理を頼まなければならぬ。

……夜が來た！ 窓に凭れて私達は、點々たる燈火に鑲められた、廣々とした小暗い市街を
瞰下した。ジャーンは窓枠に凭れ乍ら額に手を當て、何だか少し悲しげな顔をしてゐた。で
私は、彼女を注視し乍ら胸の中で斯う言つた、——凡ゆる變轉は、最も憧憬されるものでも、各

々の憂愁を有つて居る。何故なら我々が後に残すものは我々自身の一部だからである。我々は、今一つの生に這入ることの出来ない前に此の生を終へなければならぬのだ！

すると、宛らも私の黙想に答へるかのやうに、若い娘は小聲で私に言ふ、

『ねえ私の後見人、わたし本當に幸福ですわ。聲を立てたい位に思ひますわ！』

最後のページ

(千八百六十九年、八月二十一日)

八十七頁……もう二十行書きさへすれば、昆蟲と花とに就ての私の著書が完成するのだ。第八十七頁、そして最終……

『吾人の既に知れる如く、昆蟲の訪問は植物にとつて重要缺くべからざるものなり。かるが故に彼等の本務は、雄蕊の花粉を雌蕊に齎らすに在り。又花そのものも、此の婚姻的訪問を招く目的のために布置され、且つ蠱惑的に作られたる觀無きにもあらず。植物の蜜腺が砂糖分の甘き液を分泌して昆蟲を惹き付け、且つ無意識の内に、直接或は異花の受精作用を幫助すと

いふ事實は、既に余が證し得たりと信ず。茲に、最後の受胎作用は更に平凡なるものなり。凡ての花が昆蟲の眼を惹くごとき色彩と香氣とを呈せること、又内部に於ては、其等の訪問者が今まで被はれてゐた花粉を柱頭に置くに非ずんば花冠の中に侵入し得ざるが如き接近法を、訪問者に指示すべき様構成され居ることは、既に述べたる所なり。余が最も尊敬するスプレンドル先生は、天竺葵の花冠を裏付けて居るかの美麗なる織毛に就て曰ふ、「賢明なる造物主は嘗て一本の無用なる毛をも創らざりき！」と。余は余の順番に於て言はん、若し福音書に書かれたるかゝの谷間の百合が、凡ゆる榮華に於ける、ソロモン王よりも遙かに豊麗なる裝束をなせりとせば、其の紫の外被は結婚の上衣にして、その豊麗なる扮装こそは種族保存に缺くべからざるものなり。』

(千八百六十九年、八月二十一日、プロロルスにて)

* シルヴェストル・ポナール氏は、彼と同時代に數人の著名な博物學者が、昆蟲と花との關係に就て孜孜として研究して居つたのを知らなかつた。氏は、ダーウインの努力も、ヘルマン・ミューレル博士の研究も、或は又サー・ジョン・ルボックの記述をも知らなかつたのだ。然し乍ら、シルヴェストル・ポナール氏の結論が上記三人の博物學者の到達したる所と極めて相似し

居る點は確かに書留める價值がある。考古學者であるサー・ジョン・ルボックが、ボナール氏と同じ様に晩年に及んで初めて博物學に一身を捧げたといふことは、左迄重要な事實では無いが、恐らくは同様に興味のあることである——佛蘭西の刊行者註。

プロールス村！ 私の家は、諸君が森へ行く時村の一筋道を通ると、その最後にあるのが其れである。破風作りの、スレート葺きの家で、鳩の胸のやうに太陽の中で虹色の光を放つて居る。その屋根と上の風見機が、此の村の人々から、言語學や歴史學に關する私の著作全部よりも以上の尊敬を贏ち得て居る。ボナールさんの風見機と言へば、三歳の童兒と雖も誰一人知らぬものは無い。其れは古色蒼然として、風の中でキー／＼鳴つて居る。時として其れは——丁度テレーズと同じく——頑として何一つ仕事をしないやうなことがある。テレーズは今では、已むを得ず一人の快活な少女に手傳ひして貰つてゐるのであるが——無論そのことを非常にブツ／＼言つて居る。家は大きい方ではないが、私には非常に住み心地が良い。私の部屋は、窓が二つあつて、朝は太陽を受ける。子供達の部屋は二階にある。ジャーソンとヘンリーは年に二度位來て其の部屋を

占領する。

小さいシルヴェストルの搖籃は、いつも其の部屋にある。非常に可愛らしい子供だが、顔色が非常に蒼い。いつも草の上で遊ぶ時は、母親が非常に心配さうに其れを監視するのが常である。随つて、頻繁に縫物の手を休めて子供を膝へ抱き上げると云つた風である。此の哀れな幼兒は決して眠りに行かうとしたことが無い。眠ると何時も、何處か遠い／＼所へ行くと云ふのが常である。其處は眞暗で、色々の怖ろしいもの——二度と見たくないやうなもの——を、いつも見たと云ふのである。

稍あつて彼の母親は私を呼ぶ、そして私が彼の搖籃の側に腰を下ろすのが常である。彼はいつも其の小さいカサ／＼した温い手で私の指を一本握つて、斯う私に言ふ、

『ねえ、ゴッド・ファーザー、何かお話しして頂戴。』

それから私は色んな話を聞かしてやるのだが、いつも彼は非常に眞面目に傾聽する。私の話は皆彼の興味を惹く、所が殊更に彼の小さい靈を悦びで充たした話の一つあつた。それは『青い鳥』であつた。その話が了へると、いつも彼は私を見上げて、『その話を今一度して頂戴！ も一度して頂戴！』と言ふのが常である。で私は、彼の小さな、蒼白い、青脈の見える頭か、枕に凭れて

眠りに陥つて了ふまで、その話を繰返すことにして居る。

醫師は、私達が幾ら訊ねても、斯う答へるのが常であつた。

『お子達は何も御異常はございませんよ!』と。

さうだ! 小さいシルヴエストルの身には、別に大した異常は無かつた。去年のこと、或る晩彼の父は私を呼んだ。

『お越し下さい、』彼は言つた、『何うも子供が良くないのです。』

私は搖籃に近付いた。母親は彼女の靈の凡ゆる力で上から吊下がつて居るかのやうに、身動きもせず、その搖籃の上に身を押し出してゐた。

小さいシルヴエストルは私の方へ眼を向けた。が、瞳子は既に上眼瞼の下へ、釣上がつて了つて、再び降りることが出来なかつた。

『神父さま、』彼は言つた、『もう私に何もお話して下さいませんか。』

いや、私はもう、何も話をする積りでは無かつたのだ!

哀れなジャーン! — 哀れな母よ!

あゝ、私はもう、餘りに年老いて、深い感慨に耽ることも出来ない。だが幼児の死といふもの

が、何といふ痛ましい神秘であらう!

今日、その両親が来た。此の老人の屋根の下で六週間を暮らさうとするのである。今丁度二人が、腕を組合せて森から歸つて来るのが見える。ジャーンはきちんと黒い肩掛を纏ひ、ヘンリーは麥藁帽子にクレープ紐(註、喪章と)を巻きつけて居る。だが二人共、青春の悦びに輝いて、非常に甘い微笑を互ひに交はして居るではないか。彼等は彼等を支へて居る、大地に向つて微笑する。彼等は彼等を浸して居る空氣に微笑する。彼等は、お互に相手の眼の中に見る光りに向つて微笑する。私は窓からハンカチを彼等に振る、——と、彼等は私の老齡に對して微笑する。

ジャーンは輕快に階段を駆け上がった。彼女は私に接吻する、それから私の耳に何だか聞くといふよりも判じるやうなことを囁やく。私はそれに答へて言ふ、『ジャーンよ、お前の上に神の祝福あれ! 又お前の夫にも、お前の子供達にも、お前の子供達の子孫にも永遠に!』と。……

Et nunc dimittis seruum tuum, Domine!

(主よ、今あなたの下僕をお召し下さい!)

罪の士博ルーナボ・ルトスエヴルシ

刷印日十二月六年一十正大

行發日五廿月六年一十正大

有所權著作

錢卅圓二價定

寬 備 崎 川 者 譯

浩 尾 鷲 者 行 發

八ノ二町銀本區橋本市京東

六 龜 田 官 者 刷 印

六ノ一町川小西區田神市京東

社 成 大 所 刷 印

六ノ一町川小西區田神市京東

社 夏 冬 所 行 發

八ノ二町銀本區橋本市京東

番二一一三 局本 話電

番六四四五四京東替振

206
148

終

